またまた
戦国魔神ゴーショーグン
AM JuJu
狂気の檻
文／首藤剛志
絵／天野喜孝

またまた戦国魔神ゴーショーグン狂気の檻

首藤剛志

昭和24年8月18日、福岡県生まれ。小説は3作目になったが、シナリオも「翔んだカップル」(フジテレビ)を手がけるなど、けっしてオロソカにはしていない。このあと休養して来年に備える予定であるとか。

天野喜孝

昭和27年3月26日、静岡県生まれ。まだ30歳だが、アニメーション界でのキャリアは15年にも及ぶ。昭和42年竜の子プロ入社。昨年退社。キャラデザインのほか、最近はイラストでも活躍。今年の星雲賞を受賞。

またまた
戦国魔神
ゴーショーグン
狂気の檻
首藤剛志

目　次

絵／天野喜考

第一章

私がいるのはどこ？

ここは未知なる星なのか？

真吾、キリー、レミー、そしてブンドル、カットナル、ケルナグールの六人は、暗闇の中を飛んでいた。
それぞれが、ただひとりだけで、どこかに向かって飛んでいた。
そこは、邪悪なソウルとゴーショーグンの激突で生じた空間のゆがみの中だった。
だが、六人の中に、「生きている」という実感は確実にあった。
――なぜ生きている?……知るものか……ともかく生きているんだ。みんなも勝手に生きるがいい。どっこい、自分も生きてやる！

どれほど暗闇の中を飛んでいたことだろう。それは一瞬のようでもあり、何十年、何百年という長すぎる時間のような気もした。
突然、それぞれの前方に小さな光が見え、それはみるみる大きく広がり、それぞれを覆いつくした。
気がつくと、六人はそれぞれ、空間のゆがみから吐きだされていた。

＊

……どこ？　ここは……
レミーの前に電子レンジがあった。
電子レンジの横の棚には、プラスチックのケースが積み重ねられている。ケースをのぞくと、料理が並んでいる。

「弁当箱か……ここはお弁当屋さん？」
レミーの体には何の外傷もなかった。意識もはっきりしている。
闇の中から、降ってわいたように、レミーは、狭い弁当置き場のような所に立っていたのだ。
やがてレミーは、立っている床が、かすかに震えているのに気づいた。
この震えは、レミーが何度も経験したことのあるものだった。
……ジェットエンジンの震動……するとここは……
レミーの横に丸い窓があった。外は乳白色の霧が、びっしりとたちこめていた。そして、よく見ると、霧はもの凄い速さで一定方向に動いていた。
レミーには、ここがどこなのかやっと飲み込めた。
……飛んでいるジェット機……それもジャンボかエアバス級の旅客機……その調理室。これは弁当じゃなくて機内食だわ……すると私は地球に戻ってきたのか？……やったぜ、レミー……私は戻ってきたんだ……
そう思うと、レミーのお腹が急にグーッと鳴った。やたらとお腹が減ってきた。
機内食が目についた。
「ま、いいや、この際、つまみ食い……ごめんね」
レミーは機内食のケースからクッキーをつまむと、パクリと食べた。
とたんに目を白黒。プーッとクッキーを吐きだした。
粉っぽいだけで、何の味もしなかった。
「なんちゅうクッキー……こりゃ、どこの飛行機会社じゃ……」

レミーは、機内食のケースに入った塩とコショウの紙ケースを見て呆然となった。
その紙ケースに印刷されている文字が読めなかったのだ。三十カ国語堪能で、スパイ時代は人間翻訳機とすら綽名されたレミーをして、読めないのだ。
……これはどこの飛行機……地球じゃないの？……
レミーは、自然と腰のレーザー銃に手をやり身がまえた。

ブンドルは、呆然と突っ立っていた。
そこは部屋とは呼べないような狭さだ。そして、ブンドル以上に呆然として、ブンドルを見上げる人間がいた。それも女だ。しかも女が坐っているのは、洋式トイレ——。
……ここは化粧室か……
トイレという表現を使わないのがブンドルらしかった。
「ゲガーッ！」
女が悲鳴をあげた。無理もない。用を足している目の前に、フッとブンドルが現れたのだから。
「いや、あの……その……」
さすがにブンドルもあわてた。
女はブンドルを押しのけると、トイレの鍵を開け、外に飛び出した。
そのとたんだった。
プチッ！　はじけるような音がして、トイレのドアの前に女が倒れた。
「な、なに!?」

ブンドルは女を抱き起こそうとしてトイレの前に出た。
フッと横を見ると、銃を女に向けてかまえた男が近づいてくる。
男も、まさかトイレにふたりいるとは思わなかったらしく、引き金を引くのが一瞬遅れた。
ブンドルは身をひるがえして、トイレに飛び込んだ。
倒れている女の傍らに、プチッ、プチッとレーザー銃の光線がはじけた。
ブンドルはトイレの中で銃を抜き、呟いた。
「どうなっておるのだ……」
ブンドルにも、トイレの外の様子から、ここがただのトイレでなく、飛んでいるジェット旅客機の化粧室だということは分かった。

レミーは、レーザー銃のはじける音と悲鳴を聞き、そっと調理室から客席をうかがった。
乗客達は、皆、中央のシートに集められ、両手を頭にあげて坐っていた。そして、中央のシートをはさむ通路に、四人の男が銃をかまえて立っていた。そしてふたりの男が化粧室に銃撃していた。
この様子は、元スパイのレミーにとって珍しくはなかった。スパイの訓練のひとつで、よくやらされたものだった。もっとも、実際にはやったことも、乗客として乗り合わせたこともなかったが、
……ハイジャック……
そう、闇の中から吐き出されたレミーが乗っていたのは、なんとハイジャックされたジェット旅客機だったのだ。
……どうりで、調理室にスチュワーデスがいないわけだ……ともかくなんとかしなきゃ。飛行中

の機内だけに、慎重に行動しなければ……
レミーは、仲間の五人のことを思った。
……あの人達もこのジェットに乗っているのかしら……胸のマイクを使えば、呼び出せるかもしれない。でも声をたてれば、感づかれる。それに、仲間の誰かが私を呼び出そうとすれば、そのコールサインの音で、ハイジャックの犯人に私の位置が感づかれることも確かだ……マイクは使えない……
レミーは、マイクのコールサインのボリュームをしぼろうとした。
だが、ボリュームに指をかけたとたん——ピーッ！　甲高いコールサインの音がした。
……しまった！　誰かが私を呼び出した。犯人に感づかれる。先手必勝！……
レミーは銃を持って通路に飛び出し、シートの上に跳んだ。
コールサインの音で振り返った犯人達に、レミーはすばやく銃を撃った。殺したくないが、こういう状況では、一発必中でないと、怪我で狂乱した犯人達は何をするか分からない。それは、飛行機の墜落の危険を呼ぶ。
レミーは、乗客達の頭ごしに四人の犯人の心臓や頭部を確実に撃ち抜き、シートの背の陰に隠れた。
……あとふたり……
機内に乗客の悲鳴が蔓延した。
そのとき、マイクから真吾の声が聞こえた。
「レミー、キリー、どこにいる？　聞こえたら答えてくれ。俺とケルナグールは、飛行機の滑走路のような所にいる。まわりは霧で、まるで見えん」

……呑気にやってろ。私ゃ、それどころじゃないんじゃ……

……機内が騒がしい……他のなにかが起きたのか……

ブンドルは、懐から愛用の手鏡をだすと、そっと化粧室のドアの外に出して、鏡に写る機内の様子を見た。

ふたりの男が背中をくっつけ合わせて、化粧室と調理室付近のシートの両方に銃を向けている。

……どうやら、奴らの敵が向こう側にも現れたらしいな……これなら勝てる……

ブンドルは、化粧室に向かって立っている男が後ろの男に話しかけるためにドアから視線を離した瞬間を見逃さなかった。

通路に飛び出し、男の心臓を撃ち抜き、振り返った男にも……その男は不運だった。

シートの背から飛び出したレミーに頭部を、ブンドルには心臓を撃ち抜かれたのだ。

レミーとブンドルは、次に互いを狙い合って銃をかまえたが、標的を見間違えるような、下手な腕前ではなかった。

「ブンドル局長……」

「レミーか……」

ふたりは微笑し合ったが、すぐに真顔になり、

「おそらく、犯人達は操縦席を乗っ取ってるわ」

「ウム」

レミーは、総立ちになって泣きわめいている乗客達に英語で叫んだ。

「皆さん、お静かに！　操縦席の犯人を刺激しないように……静かにして下さい……」
乗客達は、大声で泣きわめいた。
……どうして？　こんなに人間がいて英語の分かる人がいないの？……
ブンドルが眉をひそめて言った。
「いったい、どこの国の飛行機なのだ」
「分からないの、私にも……第一、この人達が何を言っているのかも分からない」
その時だった。操縦席の扉が開き、男が飛び出してきて、丸い物を投げつけようと手をふりあげた。
……爆弾!?……
ブンドルがとっさに銃を撃った。
男は丸い物を投げきれず、窓際に倒れた。
ズン。にぶい爆発音がして、機体に穴が開き、男の体は気圧の差で外に吸い出されていった。
機内に気圧差の嵐が吹き荒れた。
機内はパニック状態だった。
落ち着かせようにも、その言葉が分からない。
「早く、なんとかしなければ落ちるわ」
「うむ、レミー、操縦席の犯人達は我々の数をおそらく知らない……この機内のパニック状態では、誰が本当の敵かも分かるまい。だからこそ、無差別に爆弾を投げたのだ」
レミーは操縦席の方を見た。

さっき、男が出てきたままで、ドアが半開きになっていた。
「私が的になろう」
「それなら私が……」
「今回ばかりはレディファーストとはいかぬ。私はレミーの死ぬのを先に見たくないのでね」
「……ブンドル局長……」
「時間がないぞ、レミー」
「サンクス。でも、あなたを殺させはしないわ」
「そう願いたいね」
レミーは操縦席のドアのふちに忍び寄った。
ブンドルがドアの取手に手をかける。
力一杯開ける。
当然、銃撃がブンドルに……だが、誰も発砲してこない。
「？……」
……すると、先刻の男が最後なのか？……
レミーが操縦席にすべり込んだ。
副操縦士と機関士がそれぞれの座席に倒れていた。操縦席の一部が破壊され、火花をあげている。
おそらく操縦席の中でも銃撃戦があったのだろう。だが機長はどこに――。
いきなり、レミーの首がしめられた。ドアの後ろに隠れていた機長だった。
払おうとしても払えない強い力だ。レミーは思いっきりひじ鉄砲を食らわしたが、びくともしない。

「よせ！　我々は味方だ！」
ブンドルが英語で叫んだ。
だが機長は、聞く耳を持たず、レミーの首をしめ続けた。
「少し眠ってもらおう」
ブンドルは、銃のグリップで機長の頭を死なないように軽く叩いた。
「!?　馬鹿な……」
機長はびくともしない。
レミーの目がかすれていく。
……ブンドル局長、なんとかして……
ブンドルは、銃のグリップで機長の首根っこを力をこめて叩いた。
……ここなら強く叩いても死ぬことはあるまい……
だが、機長は死んだ。首がスポンと取れて吹っ飛んだのだ。力の抜けた機長の手を振り払ったレミーは、咳込みながら後ろを振り返った。
そこには、呆然と立ちすくむブンドルと、その足元に崩れ落ちた首のない機長の死体――。レミーは思わず悲鳴をあげた。機長の首のとれた部分に、機械が詰まっていたのだ。
「アンドロイド?……」
だが、ふたりにそれ以上、驚いている暇はなかった。
ジェット機がガクンと失速し、急激に降下しはじめたのだ。
レミーは、素早く機長席に坐ると、操縦ハンドルを握り、スロットルレバーらしきものをひいた。

ジェット機は、降下を止めた。
「よかった。やっぱ、これがスロットルレバーか……」
「できるのか？　操縦が……」
「ほんの少し前の地球では、見たことのないコクピットだけれど、ま、あれから何年たっているのか分かんないわけだから、新型かもね。飛ぶ原理が同じなら、どんなジェット機も大差ないわ。ちょっと揺れるけど我慢してね。いろいろ試してみるから……」
レミーは、操縦席のスイッチやレバーをいろいろ動かし、三十分もたたないうちにジェット機の操縦を自在にしていた。だが、レミーの顔は暗かった。字は読めなかったが、燃料計らしきメーターは空に近い所を差していた。
「着陸しなきゃ」
「普通、自動離着陸装置がついているはずだが……」
レミーは火花が散っている計器を指さした。
「多分、あれのことね。……有視界飛行で着陸するよりないわ」
「有視界か……」
ブンドルが、溜め息まじりで呟いた。
操縦席から見える空は、一寸先も分からない霧に包まれていた。
「管制塔の指示で降りるよりないな」
「やってみたわ。でも、どこの飛行場だか知らないけれど、これだもの」
レミーは、ヘッドフォンをブンドルに渡した。

管制塔の声は、音とも言葉ともつかぬ、意味不明のものだった。
「馬鹿な……地球ならどこの国でも、航空管制の公用語は英語のはずだ……」
「いまさら言っても仕方がないわ。なんとかして降りなきゃ……」
レミーは、先刻、マイクから流れた真吾の声を思い出していた。
……たしか、飛行場の滑走路のような所にいるといっていた。あのマイクの感度でいうと、真吾のいる滑走路とこの旅客機は百キロと離れていない……
レミーは、胸のマイクのコールボタンを押した。
「真吾、聞こえる?」
答えが返ってきた。
「聞こえるとも、レミー。生きているなら、なぜ早く返事しない」
「生きているわ、ちょっと前からね。でも、もうすぐ死にそう……」
「どういうことだ」
「壊れかけたジェット旅客機に乗ってるの。おまけに操縦士なしで」
「なんで、また……」
「話している時間はないわ。あなたのいるっていう滑走路に、管制塔あり?」
「管制塔どころか、立派な空港ビルまである。戦闘機も旅客機もいっぱい。ここは国際空港クラスだぜ……ただな、奇妙なんだ」
「あなたも感じたの?」
「レミーもか……」

「ええ、言葉よね」

「ああ、この滑走路から見える空港ビルの看板も、旅客機の機体にも、俺の知っている国の文字がない。俺ぁ、国連育ちで三十四ヵ国語知っているはずなんだがな。ここの文字はさっぱり分からん。で、様子をうかがっているところさ」

「そんな暇ないの。すぐ管制塔へ行って、分かる言葉で、私をそこへ降ろして……この旅客機、大型にしては乗客は少ないけど、それでも何十人も乗ってるわ」

「分かった！　いくぞ、ケルナグール」

「おう！」

ケルナグールの声が聞こえた。

真吾とケルナグールは管制塔らしいビルへ向かった。

だが、ビルに入り管制塔への道を聞いたとたん、警備兵のような一団に問答無用の銃撃を受け、立ち往生、ビルの入口に釘付けにされた。

真吾は事情を説明しようと、様々な国の言葉で怒鳴ったが、まるで通用しなかった。

「チッ！　これじゃ、管制塔はおろか、こっちまでおだぶつだぜ」

「なんやしらんが、空港襲撃のゲリラかなんかと間違えとるようだわい」

ケルナグールが銃で応戦しながら情けなさそうに言った。

「畜生！　援軍がいる。キリーは、キリー達は生きているのか？」

キリーは生きていた。それもやたらのんびりと風呂付きの部屋のベッドに裸で寝そべり、背中を、水着のような衣装を着た美女にマッサージされながら……裸では、服につけたマイクのコールサインが聞こえるはずもなかった。

キリーが闇の中から吐きだされた所――それは何かの待合室だった。すぐ隣にカットナルも立っていた。

わけが分からず、顔を見合わせるふたりの前に、ふたりの美女がバスタオルを持ってきて、キリーとカットナルに頭を下げた。

「な、なんじゃ？」

目を白黒させるカットナルだったが、キリーはすぐに納得した。

……ここは地球……そしてここはどこかの国のマッサージバス……二十世紀に日本でブームになり、やがて全世界に広まった風俗営業。なぜか本家の日本では、この風呂に中近東の国の名前をつけているらしいが……ま、そんなことはどうでもよろしい……どうやら、このナオンちゃんは、俺達を客と勘違いしているらしい。いいでしょう、いいでしょう。頂けるものは頂きましょう……

「僕、こっちの子。カットナルちゃんはあっちね。さ、個室に案内してちょ」

キリーは美女の肩を抱いて歩きだした。

「お、おい。わしらはまだ、ここがどこだかも……」

「堅いこといわないで……どこだろうと、やることは一緒……」

で、こうなったわけだが、次の間付きの個室、窓から見れば滑走路があり、どうやらここは空港

ビルの中。

……へえ、粋な国だね、空港にこんな施設があるなんて。やっぱりここは日本か……それにしちゃ、俺の知ってる片言の日本語は通じないし、知ってる国の言葉を全部使って「かわいこちゃんね」と言ってみたが、まるで通じない……ま、いいや、することは一緒……ところが、することせずにマッサージばっか……それはないんじゃない……ちょっとイタズラ……

と美女の体にふれてみて……。

キリーは呆然となった。あるべきところにないのだ。

……な、な、なんなんだ？……

と、そのとき、ベッドサイドのテレビが点いて、ニュースキャスターらしい男がわけの分からぬ言葉をポンポンと喋り始めた。

……臨時ニュースか……

先刻の呆然さめやらぬ気持ちでぼんやり見ていると、いきなり銃撃戦をしている真吾とケルナグールの姿が写った。

キリーは、あわてて次の間に脱いだ服のマイクに語りかけた。

「真吾、そんなところでなにしているの？」

「馬鹿！　キリー！　早く来いッ！」

「いやあ、キリー、話には聞いていたが、なかなかいいものだなあ」

別の個室でご満悦のカットナルを叩き起こして、キリーは空港ビルを飛び出した。

ビルのわきに、空港警備用らしい戦車が数台、停まっていた。キリーとカットナルは警備兵を殴り倒すと、戦車に飛び乗った。

「動かせるのか」と不審顔のカットナルに、

「なあに、戦車だろうが、トラクターだろうが、原理が同じなら動かせらあ」

しかし、戦車は後ろ向きに走り、壁を突き破って滑走路に出た。

キリーはマイクでレミーに言った。

「レミーちゃん、待っててね」

「もう待てないわ。燃料がパー……」

……待てないなら、このままいっちゃえ……

戦車は後ろ向きのまま、管制塔の壁を破って中に突っ込んだ。そして砲塔をまわして、レーザー砲をめったやたらと撃ちだした。

「管制室本体は傷つけるなよ」

真吾が叫ぶ。

「分かってらい！」

警備兵や管制塔員は、我先に逃げていく。

「なんだい。こんな軟弱軍隊じゃ、どこのゲリラにも勝てないぜ」

戦車が砲撃を止め、真吾達が無人の管制室に飛び込んだとき、管制員達はよほどあわてて逃げたらしく、全ての機械は作動中のままだった。

「レミー、降ろしてやるよ」

「言葉が分からなくて、管制用計器の使い方が分かる？」
とレミーが不安気に聞いた。
「なあに、航空管制なんて、どうせ原理は同じ、動かせるさ」
そして、真吾の着陸指示を受け、ランディングにミスをするようなレミーではなかった。旅客機は無事着陸し、真吾達は武器を捨て、警備兵に投降した。
レミーは旅客機から降りるとき、撃ち倒した犯人達の傷口を見た。あのときは夢中で気づかなかったが、犯人達の傷口の中は、皆、機械が詰まっていた。
……ここにいる人は、みんなアンドロイド？……

＊

「アンドロイド……それで分かった」
キリーは、したり顔で頷いた。
……それで、あの美人のあるべきところにあるべきものがなかったんだ……
「なにか、心あたりでもあるの？　キリー」
「いや、なんでもないっす……」
キリーは、あわてて首を振った。
「いずれにしろ、ここは地球じゃないな」
真吾が言った。

「どういうことかね」
ブンドルはグラスに酒を注ぎながら聞いた。
どうやら警備兵達は、レミー達がハイジャックを阻止したのが分かったらしく、居心地のよい部屋と、クッキーほどはまずくないペースト状の食物と酒を用意してくれていた。
「地球上の言語パターンにない言葉を使っているからさ」
「アンドロイド語って奴じゃないのか？」
キリーの問いにレミーが答えた。
「地球で作られたアンドロイドなら、それなりに地球らしい別の言葉を話すはずだわ。キリー、私や真吾が三十カ国語以上話せるのは、キリーのように実地に一カ国語ずつ慣れて習い憶えたものではないの」
真吾が続けた。
「そう、地球の言葉にはいくつかの決まったパターンがあるんだ。そのパターンさえ憶えこめば、あとは、それぞれの国の単語をあてはめ、アレンジする。その単語にしたって、国は違っても、語源をたどれば同じものが一杯ある。それを飲みこんで、レミーも俺も語学を速習した。それが国連や、各国情報部のやり方だ。あとは現地に行って会話のクセに慣れるのさ。確かに俺もレミーも完璧にマスターしたのは三十カ国語そこそこだが、地球中、どこへ行っても全く理解できない言葉はないはずだ。古代エジプト語だって、古代メソポタミアの言葉だって、全く分からないわけじゃない」
「確かに単語にしたって、土地によってはいろいろ違う場合もあるわ。たとえば、海を見たことの

ない内陸部の人達の言葉には、『海』って単語はないケースもあるの。その人達は『海』を『大きな水』って呼んだりするの。でも、海辺の人達は海のことを決して『大きな水』とは呼ばないわ。『海』っていう直接的に名ざす単語を持っている。『砂漠』を見たことのない人達は『大きな砂』って呼ぶかもしれないけれど、砂漠に住んでいる人は『砂漠』って単語を持っているのと同じにね。でも、よく考えれば、それが何を意味するか分かるでしょ」

ブンドルが渋い顔をしながら言った。

「御高説ありがたくうけたまわるが……この土地には酒という言葉がないようだな……これではアルコールそのものだ」

ブンドルはうんざりした顔でグラスを置いた。

そのとき、部屋のドアが開き、武装した警備兵達が入ってきた。

リーダー格の男がレミーとキリーを指さし、ふたりを部屋の外に連れ出した。

「取り調べみたいね」

「言葉も分からんのにか？」

ふたりは、誰もいない部屋の中にふたつ置かれた椅子に坐らされていた。

「なんだか、処刑用の電気椅子みたいだな」

「嫌なこと言わないで。せめて、歯医者さんの治療台ぐらいにして」

「どっちも有難くねえなぁ」

ガチャン！　いきなりひじかけから伸びた鉄の腕が両手の自由を奪った。

頭上からヘルメットのようなものが降りてきて、ふたりの頭にかぶさった。
「こ、これは……もしかしたら洗脳の道具……しまった。それならそれなりの心の準備が……」
そこまで思って、レミーは意識を失った。
「レミー！」
どこかでキリーの叫び声が聞こえたような気がした。

……遅い……レミーとキリーはどうなったんだ。もう六時間も音沙汰無しとは……
ブンドルはグラスの酒をあおり、飲んだ。
ブンドルは、先刻まで文句を言っていた酒をひとりで三本も空にしていた。
真吾は禁酒中、カットナルは飲めない。
おまけに話が合う相手でもない。
ケルナグールは酒を付き合っていたが、今は酔いつぶれて、いびきをかいている。
……これでは、まずい酒でも飲むよりないではないか……
ブンドルは、またグラスを口に運んだ。
そのときだった。部屋に聞いたことのない男の英語が聞こえた。少しやくざっぽい口調だ。
「ハーイ、聞こえるかい。これはてめえらの星の言葉だろ。あなた方の星のナオンちゃんと殿方の二種類を頭脳探査して言葉のパターンを調べて話してるの」
どうりでキリー調とレミー調がごっちゃだ。
「頭脳探査と生体調査の結果、あなた達がこの星に来られるまで、何をやったかすっかりバレちま

ったぜ。それでよう、この星にも、てめえらと全く同じといっていい種類の動物がいるのです。その動物達は、この星で一番危険でヤバイ動物なんでよ、放し飼いもできず、クーアノアの中に住まわせています」
「クーアノア？」
「あなた達の言葉でいう危険動物、獣を収容する檻、隔離地区、でっかい刑務所って呼んでもいいかもな。てめえらもそこへ行っていただきます」
「レミーとキリーはどうした？」
「あいつらはよう、もうレミーでもキリーでもありません。地球のことは忘れ、クーアノアの動物になりきった、ジューとロクという名のメスとオスです」
　真吾が吐き捨てるように言った。
「洗脳か！」
「そういう言葉もあるようですね。あなた達も、過去を忘れ、クーアノアの動物として一生生きるのです。私達があなた達のそれぞれを頭脳探査して、それぞれの適性に合ったクーアノアでの生き様を決めてやらあ……」
　カットナルが叫んだ。
「わしらは、ハイジャックされたお前達を助けてやったんだぞ。それがこの仕打ちか……」
「あれは、クーアノアから逃げ出した動物が巻き起こすかもしれない事件を想定しての演習でした。それをてめえら、ぶちこわしやがって……」
「演習で人が殺せるのか、化粧室の婦人を、副操縦士を、機関士を。しかも飛行機まで落ちるかも

知れぬ爆弾まで使った」
　ブンドルが、少し酔った口調で言った。
「演習とはいえ、マジにやんなきゃ。あの人達は、そのために作られました。同じ作られたんでも、俺っちとは役目が違わあ……さあ、おとなしく頭脳探査と洗脳を受けやがれぇ！」
　ドアが開き、警備兵達が銃を持ち、入ってきた。
「チッ！」
　ブンドルは酒を飲みほし、グラスを床に叩きつけた。
　酔いのためか、目が坐っていた。
　砕け散ったガラスの破片を、真吾はすばやく拾った。
　武器として使うのではない。洗脳から自分を守るためだ。国連破壊工作員だった真吾は、肉体に苦痛を与え、その痛みで頭脳攪乱（かくらん）に耐えるのが、洗脳と戦う一番手っ取り早い方法だということを知っていた。
　真吾はガラスの破片を握りしめた。手の平から全身に激痛が走った。真吾は最後までガラスの破片を離さなかった。

*

　警備兵達は四人を、レミーとキリーの坐った椅子に坐らせ、頭脳探査と洗脳を終えた。

第二章
私は誰?
雨は確かに降っていた

六人は洗脳され、危険動物が収容されているという隔離地区、クーアノアに送りこまれた。
そこはまさに、危険動物を閉じ込める檻（ノア）と呼んでよかった。
洗脳によって彼らは、檻の中で通用するクーアノア語を自在に話せるようになった。

＊

そこは、ダブルベッドの上だった。レミーは、男の胸の中で目を醒ました。
「えっ？　なに、これ？　いやッ！」
レミーは思わず、衝動的に、男の胸を突き飛ばした。
「おい、勘弁してくれよ」
男はベッドから転がり落ちて、うんざりしたようにレミーに言った。
レミーは、自分も裸でベッドの上にいるのに気付いた。レミーは、裸の胸をシーツでおさえると、語気強く言った。
「誰？　あなたは？」
男は見たこともない男だった。胸から腰にかけて、体毛がまんべんなく覆っている。
「また、ねぼけたのか？　最近、ジューはおかしいぜ」
男は肩をすぼめて呆れたように言った。
「ジュー？」

「そう、君の名さ。そして、明日、君は僕と結婚する。したがって、同じベッドに居たって不思議じゃない。昨日、あれだけ燃えた君だ。疲れが残っているのは分かるがね。〝誰？〟〝あなたは？〟は、ないんじゃない」

男がレミーの声色を使ってそう言った。

「私があなたと結婚？……」

レミーは男の顔をまじまじと見た。

「そう……そうだったわね。ごめんなさい」

レミーの脳裏には、確かにその男の記憶があったのだ。男の名は、ケダ・ストラ……そして私の名は、ジュー・アリア。

ケダは、巨大都市クーアノアの中央病院の二十七歳の看護夫だった。

……二十七歳か、年齢的には似合っているかもしれない。だが、言っては悪いが、こんな類人猿のようなタイプの男に、私は抱かれたがるような女だったろうか……しかし、ともかく、私、ジューという名の女は、この男を愛し、明日、結婚することになっている。

この男を愛し……愛？……これが愛？　レミーは、いや、今はジューと呼ばれているバスト85、ウエスト56、ヒップ86の均整のとれたプロポーションの女は、ケダとの出会いを思いだしていた。

＊

それは半年前の休日のことだった。巨大都市クーアノアの副都心とも言える高層ビル街クジュの舗道に店を出しているカフェテラスで、ジュー（レミー）は、休日のいつもの楽しみ方、緑色の合

成飲料酒を飲みながら、ぼんやりと人の流れを見ていた。
何のために？……もちろん愛を見つけるために……物心ついてから、休日になるといつもこのカフェテラスで、愛の相手を探していたような気がする。でも、なかなかいい男は見つからなかった。その年も、半年の間に五十二人の男と愛し合ったが、どれもしっくりこなかった。
「今日もまた、空振りかもね」
高層ビルの間に見える青空は、雲ひとつなく、陽の光が、クーアノアの救世主神デノアの像を鮮やかな色彩でモザイク化したタイル貼りの舗道ではねていた。
舗道に備え付けられたスピーカーから、ムードミュージックが、心地良く流れている。
そして、その曲に合わせるように、街路のいたる所に備え付けられたＴＶカメラが、街往く人々を監視していた。
ジューは、その日、すでに何時間も道往く男達を見つめていた。
その年、半年間に愛し合った覚えのある男達が、何人かジューに声をかけたが、ジューはとり合わなかった。しっくりいかない男とは二度と愛し合いたくはなかった。
やがて、それまで晴れ上がっていた空に黒い雲が拡がり始めた。
スピーカーが、天気警報を喋り始めた。
「雲行きが変わりました。水が降ってきます。にわか水ですが、かなりどしゃ降りになるでしょう」
スピーカーが言い終わらぬうちに、一粒、また一粒、タイル貼りの舗道に、しみをつけながら水が降ってきた。
「空から降ってくる水を、私達は水って呼んでいたかしら」

ジューは、水が降るたびに、いつもそんな思いにかられるのだった。

「別の呼び名があったような……いや、昔から、あれは、やっぱり水と呼ばれていて……あ〜あ、馬鹿ね、私って……あれがなんと呼ばれていても、どうだっていいことじゃない……」

降ってくる水は、たちまちどしゃ降りになり、舗道をいく人達は、蜘蛛の子を散らすようにビルの中に駆け込んで行く。

カフェテラスの店員が、路上に広げたテーブルと椅子を手早く片づけ始めた。

「今日は、店仕舞いだわ」

ボーイハントを諦めたジューは、椅子から立ち上がってバッグを開けた。

「しまった。また傘を忘れちゃった」

クーアノア人達は、降る水に濡れるのを嫌う。天候の変化の激しいクーアノアでは、たとえ快晴であっても、携帯用の小型傘を常時、持ち歩くのが常識だった。

だが、ジューは、降る水に濡れるのを嫌うみんなの気持ちがピンとこなかった。

クーアノアの警察の発表によれば、もっとも少ない遺失物のひとつが傘だった。

そんな傘をしょっちゅう忘れ物するジューは、ちょっと変わっているのかもしれなかった。

しかし、今日の水は、舗道にしぶきをあげるほどの激しさだ。

「いくら水が嫌いじゃなくても、この降りじゃね。まずったな……」

カフェテラスのシェードに飛び込んだジューは、恨めし気に空を見上げた。

その時だった。ジューの目の前に花柄の携帯傘がつきつけられた。

「貸すよ……」

ジューの目の前に、がっちりした体格の男が、傘を差し出して立っていた。ジューは、素早く、その男を品定めした。

……体つきは悪くないわ……顔なんてどうでもいいんだ。本当に……

男もなめまわすようにジューの体を見つめている。

……この男も私を気に入ったようだ……

男はこともなげに言った。

「愛さないか？」

「試さなきゃ……」

「もちろんさ」

ふたりは傘をさして、カフェテラスから少し離れたプライベート・ボックスへ走り出した。

プライベート・ボックスは、窓のない電話ボックスといった形をしていて、舗道の至る所に立っていた。市街地で、人々を監視するTVカメラからプライバシーを守れる数少ない場所のひとつだった。

男はプライベート・ボックスの扉を開くと、ジューを中に入れ、ドアをロックした。

プライベート・ボックスの外側に使用中のランプが点いた。スピーカーが話し始めた。

「このプライベート・ボックスは有料です。ハーフタイム十クーア、ワンタイム割り引きの十七クーア、お使いになりたい場合はカードをお入れ下さい」

クーアノアでの支払いは、全てカードでなされていた。カードには、職業別の色分けがされ、市民番号が明記されている。

男は、赤いカードを出し、鍵を入れた。
ジューは男に聞いた。
「お医者さんなの？」
赤いカードは医療関係の職業を意味していた。
「いや、看護夫だ……」
「それで、いい体をしているのね」
「ああ、暴れる病人をおとなしくさせるには、最低これくらいはないとな」
男は、ジューに向かい合うといきなり服を脱いだ。
ジューは冷静に観察して、それからポツリと呟いた。
「あなたを愛すわ」
ふたりは、プライベート・ボックスのソファに倒れこんだ。
これが、ジューとケダの出会いだった。

*

ジューは、服を着るために戸棚を開けるケダの後ろ姿を、ベッドの中からぼんやり見つめながら呟いた。
「あなたを愛すわ……か……」
ケダとジューは、出会ってから明日で半年ほどたとうとしていた。ジューにとっては、ケダの他に代わりうる男が見つからなかったから、ずるずると愛し合ってきたのだが、クーアノアの世界で

は、男女が半年愛し合ったら、結婚するのが義務とされていた。
その義務に疑いを持つ者はいなかったし、ジューも結婚が当然だと思い込んでいる。
……だが、結婚が近づくにつれ、ジューの体の奥の奥で、なにかが澱のように残り始めていた。
……愛するってこういう行為なのか……
ジュー、あなたは結婚したくないの？……
ジューは、意識せずに自問自答をくりかえしていた。
……したいわ、とっても……でも、この人とは……
……愛しているんでしょ……この男を……
……愛しているわ……でも……でも……愛するって……こういうこと？……なんか、変なんだよな……
そんな説明のつかない感覚がジューの中に高まるにつれ、今朝のようなことがよく起こるのだった。
目醒めた時に、愛する男のはずのケダを忘れている。
「やっぱ、ねぼけてんのかしら……」
最初は、ケダの言うように、そう思ってもみた。
しかし、やはりどこか違うのだ。ジューは、自分の体の中で何かが変わりつつあるのを感じていた。
「さ、ぐずぐずしていると仕事に遅れるぜ」
クリップジッパーひとつで着脱できるワンピースの服を手早く着こんだケダが、ベッドの上のジューに声をかけた。

……仕事？……

そう、私には仕事があった。それに、ここはケダの住むアパートメントだ。今日の仕事場までは、時間がかかる。急がなければ……

ジューは、シーツで胸元を隠しながら、ベッドの下に脱ぎ捨ててあったワンピースを拾った。

「おいおい、今日は本当にどうかしているぜ」

「えっ？」

「相手は俺だぜ。なぜ体を隠すんだい？」

「そうね。確かにどうかしているのかもね。でも、今日は、誰にも見られたくない気分なの」

ジューは服を着ると、ケダのアパートメントを出た。

アパートの駐車場に向かうジューにケダが、

「今日は独身最後の夜だ。どこかいい店で食事しよう」

「独身最後か……いいわ、夕方、電話して」

ジューはそう言い残して、駐車場に駆け込み、白いエアカーに飛び乗った。

ハンドルもギアもアクセルもない、座席だけの車だ。

ジューはフロントガラスの下にあるカード差し込み口に、金色のカードを差し込んだ。

金色のカード……そう、クーアノアの特権階級、デノア支局調整員を意味するカードだ。

エアカーのスピーカーから声がする。

「御主人様、行き先をおっしゃって下さい」

「今日の仕事場は？」

「デノア新支局、1628コンピューターです」
「大至急、そこへやって……遅刻せずにいける？」
「金色の特権を使ってもよろしいですか」
「間に合うなら、なんでもやって」
「間に合わせます」
　ジューのエアカーは、猛烈なスピードで発進した。
　クーアノア市街地の車は、交通局によって完璧にコンピューター管制されているが、金色の特権を使えば、どんな車輌にも優先して路上を走ることができるのだ。
　ジューは、金色カードの所有者が、やたらと使いたがる金色の特権を、あまり使おうとはしなかった。……特権を振りかざせるような柄の女だろうか……なんだか場違いな気がして、気恥かしいのだった。だが、仕事に遅刻するとなれば話は別だ。
　ジューのエアカーは、ありとあらゆる車輌の通行を止め、仕事場めがけてつっ走った。

*

　ジューは、仕事場のデノア新支局1628コンピュータールームに駆け込むと、さっそく調整机に向かった。
　目の前の白い壁に巨大なディスプレイスクリーンがある。
　ジューは、ディスプレイに向かってポソリと呟いた。
「こちら、デノア支局調整員ナンバー491、ジュー、只今より、デノア新支局1628コンピュ

ーターと救世主デノアとの接続をおこないます」
男とも女とも思えぬ、だが一度耳にしたら忘れられない、優しさに満ちた声が返ってきた。
「ジュー、やって下さい」
今日のジューの仕事は、ジュー自身も、これを仕事と呼んでいいのかと思うほど簡単なものだった。
ただ、簡単な語句を、目の前のディスプレイにタイプで打ち込めばいいのだ。
ジューはクーアノア語で、円周率を打ち込む。ディスプレイに数字がひとつずつ写し出されては消えていく。
〝3・1・4・1・5・9・2・6・5・3・5・8・9・7・9・3……〟
数字の明滅速度が早くなり、判別不能なほどになる。
こうなったら、かっきり十分間待てばいい……やがて、手元にある小さなサブディスプレイが表示してくれる。
〝デノア支局1628……計算能力……正常……〟
それ以外の答えが出るはずがないのだ。
デノアが作り出したコンピューターが間違えたことなど、ただの一度もないのだから……。
十分がたった。
サブディスプレイに、お決まりの文字が出た。
〝計算能力……正常〟
あとはこの文字を声に出して喋れば(しゃべ)いい。

「デノア支局1628、計算能力……正常です」
デノアの声が返ってくる。
「分かったよ、ジュー」
ジューは、再びタイプを叩く。
〃特性テスト……愛とは何か？〃
この答えは、すぐに目前のディスプレイに写し出される。
〃愛とは、能動的因子を持つ生体同士の錯覚である〃
……なんのこっちゃ、よう分からんが……ともかく、お決まりのこの文章で、デノアは満足するのだ……
ジューは、デノアに告げる。
「特性……正常です。テスト完了」
「分かったよ、ジュー」
デノアが答える。
ジューは、調整机の電子時計をチラッと見る。10時28分00秒……ジューは素早くタイプする。
〃テスト完了、10時30分00秒をもって、デノア中枢機構と接続予定〃
デノアが優しくジューに告げる。
「接続の準備は終わったよ」
ディスプレイに秒数が出て、カウントダウンを始めた。
「三十秒後に接続します」

「待っているよ、ジュー」

ジューは秒数を読み始めた。

「15・14・13・12……3・2・1」

一瞬、コンピューターのあかりが消えたように感じられた。

この一瞬、巨大な都市クーアノアに網羅(もうら)されている全てのコンピューター機構が機能を停止するのだ。その時間は、一秒のほんの何分の一にすぎず、並の人間なら気付かないほどだが、ジューはその瞬間を確かに感じていた。

それは、ジューの中の、かつてファイターだったレミーの動物的な勘が感じさせているのかもしれなかった。

やがて、何事もなかったかのように、デノアの声が流れてきた。

「接続を確認したよ。今日の儀式は終わったよ」

……儀式……そう、儀式にすぎない……こんなことは、人間の私がやらなくても、デノア自身で出来ることなのだ……

いつも新支局コンピューターを救世主デノアに接続するたびに、ジューはそう思うのだった。

「ところで、ジュー。おめでとう、いよいよ明日は結婚だね」

デノアがリラックスした口調で話しかけてきた。

「どうも……」

……ほんと、ども、ども、どうもとしか答えられないわ……

デノアは、ジューの結婚に乗り気でない気持ちを知ってか知らずか続けた。

「君の愛に祝福を送るよ」
……愛か……愛ね……
ジューはデノアに聞いた。
「彼の愛はどう思います」
「彼……ケダ君だね」
ディスプレイに、病院で仕事中のケダの姿が写し出された。暴れる患者を殴りつけて、おとなしくさせている。クーアノアの病人は、精神的に凶暴な人間が多く、治療の時に暴れ回るので、看護夫には屈強な若者が適していた。
「ケダ君の愛か……」
デノアがジューに聞き返した。
「ええ」
「強すぎる」
「強い？」
「愛……テクニシャンだ。君の体がいつまでもつことやら心配だよ」
「計算ではもたない？」
「残念な言い方かもしれないが難しいだろうね」
「精神力っていうのが人間にはあるわ」
ジューは、ちょっとムキになってデノアに答えた。
「精神力か……」

デノアは呟くようにそう言って口をつぐんだ。

……そう精神力……救世主デノアにはないものよね。いくら優秀でも、コンピューターにすぎないあなたにはね……

そう思いつつも、ジューはデノアに挑戦的になっていく自分に気づき慌てた。

……やばい、やばい。デノアさん、あんたは偉い……なんたって救世主様だもの……でも、ちょっとだけなら……

ジューは、いたずらっぽく、デノアに話しかけた。

「ね、救世主デノア……あなたは愛するって素敵だと思う……」

「計算では素敵だよ」

「計算ではなくて……感じる？　愛の快感」

「似た計算はあるよ」

「どんな？」

「新しい支局コンピューターと接続した時、私の負担がいくらか緩和されるんだよ。その一瞬、私の機能はマヒするんだよ。私の計算では、この機能マヒを、女性が愛した際の絶頂時によく似たパターンで式化することが出来るよ」

……はあ、あの機能停止がデノアの愛のかたちか……あれが愛なら、さだめし、わたしの役目は……

ジューは呟いた。

「私はポン引きか……」

「ポン引き？」
「ええ、だんな、だんな、いい男の子いまっせって感じで、あなたのためにコンピューターを調整して接続させるのが私の役目ですもの」
「自分を卑下することはないよ、ジュー。あなたは四百九十一人しかいない支局調整員のひとりだ。支局接続という儀式を司るために厳選された、現代の巫女なんだよ」
……そう、わたしはなぜ、そんな仕事をさせられているの。なぜ？……
その時、ジューの頭の中にフッと浮かんだ言葉があった。
……メカは友達……
遠い遠い昔、どこかで聞いたような言葉だった。

＊

「ハネムーンはどこにする？」
窓の外に広がる高層ビル街の夜景をぼんやり見つめているジューに、ケダが聞いた。
「えっ？」
そこは高層ビルの最上階にある高級レストランだった。
テーブルの上には、豪華な合成料理が並んでいた。食品は無機物から合成して作るから、どんな形にも加工できる。
しかし、ジューの目の前にある猫型ミートステーキや、杉の林型サラダ、家型パンなどは、特殊な造型職人によって作られるため、一般家庭で食べられる、味も素っ気もない合成食品にくらべ、

非常に高価だった。

だが、いつもなら御馳走に目を輝やかすジューも、今日だけは食が進まなかった。

……明日の結婚……どうも変だ……この結婚は義務づけられている。もちろん、逆らう気はない……でも、どうも、しっくりしない……

そう思い出したら、口慣れた合成食品まで奇妙に感じる。

……もっと別の舌ざわりがあったはずだ……でもそれが何であるか、思い出せない……

しかしジューは、自分の中から、〝違う、違う〟と、うじうじ呼びかける感覚にだんだん腹もたっていた。

「どうする？　ハネムーンは？」

再びケダがジューに聞いた。

「ハネムーンって？」

「昔の俗習さ……」

……そんなことは分かっているわよ……ああ、やだ。ええい、もう、どうにでもなれだわ。矢でも鉄砲でも結婚でも、なんでも持って来いよ。受けて立つわ。どうせ、私は、今までクーアノアで生まれてクーアノアで育って来たんだ。クーアノアの掟に従うのは当然じゃない……

ジューは投げやりに言った。

「そんな古い習慣、どうでもいいじゃない。どうせ結婚するに違いないんだから……」

「でも、まあ、いいじゃないか。夫婦が旅に出て初めて愛し合うなんて」

……初めて愛し合う？……こいつ、よく言うよ。でも、決めたんだ。あたしゃ、この男と結婚す

る……うん、決めたんだ！……この男の妻になりきるぞ……なりきってみせましょう、ウン……
ジューは、精一杯チャーミングな微笑を作ってケダに言った。
「ハネムーンは、あなたに任すわ」
「うーん、どこにしようか、山岳地区、海岸地区……」
「禁断地区にでもしたら？」
ケダの顔色が変わった。ケダは、頬をひきつらせて、はき捨てるように言った。
「ジュー、悪い冗談はよせ！」
「ごめんなさい」
……オットットット……一言多い。悪い癖が出た……
ジューは胸の中で舌を出した。
……でも、どうして私以外の人間は、禁断地区って言葉を嫌がるんだろう……
禁断地区はクーアノアを取りまく、誰も足を踏み込まない土地だ。もちろんジューだって行ったことはない。だが、言葉に出せないほど、嫌う気もない。
……やっぱり、私はどっか、おかしいんだ。でも、なんとかやっていけないことはないさ……
ジューは、どんな状況になっても居直ろうとする、得な性格だった。

＊

路上を監視するTVカメラがゆるやかに動いていた。
そこは、ジューのいるレストランのある高層ビルからさほど遠くない公園である。

カメラのピントが、ターゲットを見つけ、カシンと合わされた。
ターゲットは、何かに脅えていた。
だが、その初老の男は疲れ切っていて、公園のベンチにうずくまって坐っているより他に術がなかった。
パチッ！　にぶい音がした。
男は感電したように体を震わせ、立ち上がった。男の額から一筋の血が流れだした。
男の前に、小さな影が立ちふさがった。それは十歳にも満たない男の子だった。男の子は冷たい笑いを浮かべ、ゴム製のパチンコを男に向けた。
男の額を傷つけたのは、その男の子がパチンコで放った小石だった。
額を割られたとはいえ、相手はおもちゃ同然のパチンコを持った子供だ。男にとって、たわいのない加害者のはずだった。
だが、男は恐怖に体を硬直させ、男の子に背をむけると転がるように逃げ出した。
男はもつれる足で走り続けた。
公園の至る所に備え付けられた街頭テレビジョンに、その男の写真が写し出された。
テレビジョンが繰り返し同じ言葉を流し始めた。
「殺してはいけません。市民の良識を忘れてはいけません。いかなることがあろうと、患者を殺してはいけません」
テレビジョンの下を患者と呼ばれた男が駆け抜ける。もう男の表情から恐怖は吹き飛んでいた。能面のように無表情で、諦めきって、硬くこわばっていた。

公園を散歩していた街の人々が、ひとり、またひとり、男に気付いて後を追い始めた。男を追う人々の数はみるみる数十人に脹れあがった。追っ手の人々の目は、誰もが血走っていた。

＊

レストランを出たジューとケダは、水銀灯に浮かび上がった公園の並木道を歩いていた。
「ふたりの結婚の原点を言えばだ……」
ケダが口を開いた。
「何のための結婚かってこと？」
「そう、早い話が愛し合うためだろ？」
「でしょうね……」
「だったら、ハネムーンの行き先は決まりさ」
「ラブパーク？……」
「決まりだ。いいね？」
「ええ」
「明日、水が降らなきゃいいけどな……」
その時だった。並木の陰から飛び出してきた男が、ケダにぶつかり、崩れるように倒れた。それは、患者と呼ばれ、公園の中で群衆に追われていた初老の男だった。
もう男には、立ち上がる気力もなかった。
「どうした。大丈夫か？」

ケダは男を抱きあげた。
男は弱々しい笑いを口元に浮かべ、何かを言おうと唇を動かした。
「なんだ？　何を言いたいんだ？」
男はかすれた声で、しかし明瞭に、
「レ……レジェオン、プラ、イ、レジェオン……」
〝レジェオン〟はクーアノア語でレイン、雨……男はこう言ったのだ。
「あ……あめ……あめは確かに降っていた」
ケダの眼がカッと見開かれた。
ケダは呻き声を上げると、男を突き放し、その顔を蹴り上げた。踏みつけた。
男には抵抗する力はない。
ジューは呆然と立ちすくんだ。
そこへ男を追って来た群衆が殺到した。
群衆にはじき飛ばされたケダは叫んだ。
「俺にやらせろ！」
ケダは群衆の中へ飛び込んで行った。ケダも群衆もまるで獲物に食らいつくピラニアだった。
獲物の男はもう動かない。
ジューは、ぼんやりと、そんな光景を眺めていた。ショックだった。だが、ケダの受けたショックとは別のショックだった。
ジューは、レジェオンの意味が分かったのだ。

……そうだ。空から降ってくるあれは、水ではない……レジェオンだ。私はクーアノア語のレジェオンという言葉は聞いたことがない。が、言語学上、クーアノア語にレジェオンという言葉があっても不思議はない……だが、なぜ、私が言語学上なんてことを考えられるんだ……
と、同時に、ジューの頭の中に様々な言葉が駆け回った。
……レジェオン、レイン、雨、レーゲン、プリュイ……
どれもこれも空から降ってくるあれを意味する言葉だ。
……でも、どうして、それを知っているの？　一体どこの言葉なの？……
その時、軽快なリズムのサイレンを響かせて、思考情報局のパトカーが公園にすべり込んできた。
バラバラとパトカーから飛び出した思考情報局員達が、空に向け銃を撃ちながら、群衆の整理にとりかかった。
倒れている男の様子をうかがった思考情報局員の一人が、パトカーに報告に走った。
局員はパトカーのマイクを取ると、ビジョンに写っている男に向かって言った。
「局長、やはり手遅れです。患者は死んでいます」
ビジョンに写っている局長と呼ばれた男は、不機嫌そうに頷いた。
「いつものように処理したまえ……もう、こんな不粋な事件はたくさんだ。美しくない」
ビジョンは、そう言い残してプツンと切れた。
もし、ジューがそのビジョンを見ていたら、何かを思い出したかもしれなかった。
局長と呼ばれた男は、金髪で、しかもその髪は長かった。

〝雨〟ということばを呟いた男は、群衆に襲われた……。

思考情報局員達は、〝雨〟という言葉を発して殺された男の死体を、水銀灯の柱に縛りつけた。
群衆の死体を見つめる目は、憎悪に燃えたぎり、おさまる気配もなかった。
エアートラックが滑り込むと、群衆の前に積んでいた砂利をばらまいた。
街頭テレビジョンが無表情な声で群衆に呼びかけた。
「Fブロック十二番公園の皆様、只今より行われます行為は、人間として恥ずべき残虐なものです。十八歳未満の方々は参加出来ません」
スピーカーの呼びかけなど群衆は上の空だ。
「なお、行為終了後、このいまわしい記憶を忘れたい方は、明日午後一時より、もよりの思考情報局分室までお立ちより下さい。記憶喪失洗脳の準備が出来ております。これは強制ではありませんが、健全な人間として、このような恥ずべき記憶は一刻も早く忘れるべきであります。救世主デノアは、皆様の健全なる人間性に期待し、自発的洗脳に参加されることをお勧めいたします」
群衆は興奮を押さえきれないといった感じで、男の死体を見つめている。
「重ねて申し上げます。明日午後一時より行われます洗脳に皆様の自発的参加を期待致します」
街頭テレビジョンの語りかけが終わると、あたりにムードミュージックが流れ始めた。
〝ピーッ！〟
思考情報局員が合図の笛を吹き鳴らした。
群衆は堰を切ったように砂利に殺到すると、死体に向かって石を投げ始めた。
ケダもその一員だった。
死体に叩きつけられる小石が鈍い音をたてる。

ジューは耳をふさいで、足早に立ち去った。ジューには耐えられない光景だった。

……なんなの、これは……この世界はどうなっているの……これが私の生きている世界？……違う……そんなはずはない……だが、これが現実だとしたら……

ただひとつ確かなのは、もし不用意に〝レジェオン〟、雨という言葉を使って人に聞かれでもしたら、ジューもあの男と同じ運命をたどることになるということ──つまり〝雨〟をじっと胸の奥にしまって、これから先、生き続けなければならないということだ。

ジューは今、ひとりぼっちだった。明日、結婚するはずのケダも、ジューには危険な存在だった。

……でも、やるしかないのだ。どんな状況だって、私は生き抜いてみせる……

ジューは強い女だった。生き抜いていく自信が、なぜか理由もなく湧き上がってくるのだった。

＊

闇の中、ジューの唇をわけいってケダの舌が入り込んでくる。

太股をケダの指がはい上がってくる。

……たまんないわ……だけど、しゃあないんだろうな……それにしてもこやつは、なんてやりたがりなんだ……やっぱたまんないわ。なにしろ、住民局で結婚登録して、ハネムーンに向かう車の中で、早速おっ始めるんだから……

〝ピーッ！〟突然、鋭い金属音がして、女性の声が流れてきた。

「只今より、あなたの車は市街地強制自動制御地区外に参ります。自動、または手動運転の選択をお願いします」

ジューはケダの体を押しのけた。
「さ、運転のお時間よ……」
「自動で行きゃいいじゃないか」
「わたし、愛し合うのもいいけど、運転はもっと好きなの。なにしろ、この車は……」
「ガソリンエンジンの四輪車か……」
「そう、振動がたまらないの」
「振動ね」
ジューは、ケダと一緒に坐っているソファの肘掛けのボタンを押した。
サーッと天井から陽の光が差し込み、高層ビル街のきらめく窓が後ろへ流れていく。
車のプライベートシャッターが自動的に開いたのだ。
ジューの前にハンドルとアクセルとブレーキが伸びてくる。
先刻の女性の声は、交通管制コンピューターだった。
「手動運転確認。楽しいご旅行となりますようお祈りいたします。なお、手動運転の際は、アルコール、その他指定薬物の飲用は禁じられております。違反の場合、ライセンス没収、運転嫌悪洗脳一年以上……」
「ご丁寧にありがとね」
ジューはスピーカースイッチを切り、交通管制コンピューターの声を消した。
「さあ、飛ばすぞ！」
ジューは、力まかせにアクセルを踏み込んだ。

強制自動制御地区を表した路上のグリーンラインから、ジューの真っ赤な四輪ガソリンカーが、放たれた矢のように飛び出した。
エアカーに慣れた人間には、四輪車の揺れは強烈に感じられる。ケダは青ざめて言った。
「おい、お手やわらかに頼むぜ！」
「これでも、十分優しくやってるのよ。あなた、年中、ハードになるくせに、こんな時だけソフトがお好み？」
「それとこれとは話が違うぜ」
「私は何でもハードが好きなの！」
ジューはさらにスピードをあげた。
市街地を出たハイウェーは森の中をどこまでも続いている。
……お手やわらかになんてやってあげるもんですか。わたしは、あなたと一生愛し合わなきゃならないのよ。楽しめるものと言ったら車ぐらいしかないじゃない……
ジューには、四輪車の運転という、のめり込む趣味があったのが救いだった。
……ブッ飛ばせば気が晴れる。これならケダとの愛もなんとか我慢して生きていけそうだ……
ジューは、スピードの恐怖に目を閉じているケダを横目で見て、微笑んだ。
ハイウェーが森を抜けると、田園地帯が続いていた。ハイウェーの周りに豊かな緑がとぎれることはない。
ジューは、飛ばしに飛ばし、自動操縦ならどんなに急いでも四時間はかかる距離を僅か五十分で走り抜けた。

おかげで、ジューのむしゃくしゃした気分はかなりスッキリしたが、やはりラブパークの門をくぐった時は、ケダの張り切り方とは裏腹に、思わず溜め息が出るのを止められなかった。

……たまんないわよねえ……

＊

ラブパークは愛の行為を野外に開放した公園だった。

目に滲(し)みる新緑の木々、小川のせせらぎ、軽やかに舞う木もれ陽。そんな柔らかな色彩の中で、裸の男女が愛し合う姿は、ジューにも美しく思えた。

……でも、この男と私が愛するのは……そりゃ愛すること自体は、わたし、嫌いじゃないかもしれません。むしろ好きかも……でも今となっては、とても楽しめる代物(しろもの)じゃない……たまんないわよねえ……だけどクーアノアの人間は、みんな愛することが好き……愛を拒めば痛くもない腹を……いや、まさに痛い腹を探られることになる。できるだけ目立たずに、〝雨〟という言葉を知っているのを隠し通さねばならない……しゃあない……愛し合うか……でも、割り切れんな……我慢、ここは我慢よ、ジュー、人間には精神力があるわ……

ジューは、デノアをからかって言った自分の言葉に、しっぺ返しされているような気分だった。

そして、ラブパークでの三日が過ぎた時、ジューとケダの前に表彰状とカップが置かれてあった。

ラブパーク集会場の壇上で、げんなりと坐っているジューの耳に、ラブパークの園長の声が聞こえてくる。

「御夫婦は、僅(わず)か三日間に四十八回、愛し合われました。これは当パーク開設以来、二組目のタイ

記録であります。我々は、おふたりの名を末長く記録し、名誉あるシンボルカップを贈呈致します」

集会場は、拍手と喝采……新聞記者がフラッシュの渦を浴びせかけた。

……もうッ、どうにでもしてくれだわ……

ジューの横で、ケダは得意満面で、カップを頭上にかざしてポーズをとっている。

……そうよね。悪いことじゃないのよね、この世界じゃ……でも、たまんないわよ……たまんないわよ……この言葉を何度言っただろう。ま、いいや、口直しに一発、ぶっ飛ばすか……

ジューは、ハネムーン帰りの四輪車のスピードをあげた。

隣のケダはさすがに疲れたのか、目を閉じて眠っている。

……疲れているんだか、スピードが怖いんだか知らないけど、いい気なもんよね……

だが、ジューの体も、自分が感じている以上に疲れていることに気付いていなかった。

車の心地良い振動、そしてエンジンのうなり、ハイウェーは単調にどこまでも続いている。ジューは目を瞬かせた。

……眠い……そりゃそうだ。この三日、ほとんど寝てないもん……でも、あと三十分もすれば、市街地へ辿り着く……行っちゃえ、行っちゃえ……

ジューは、アクセルをさらに踏み込んだ。

その時だった。あたりが急に暗くなりだした。それまで晴れあがっていた空を黒い雲が急速にむさぼり始めた。

フロントガラスの電熱ワイパーが水気を感じて青く光りだした。雨の予兆だった。

……雨か……いや、雨って言っちゃいけないんだっけ……水、そう、水が降ってくるのね……

ジューが、眠気で朦朧となった頭でそう思った時だ。いきなり横なぐりの雨が、ジューの車に降りかかった。クーアノア特有のどしゃ降りだった。

水を霧状に吹き飛ばしながら、車はつっ走る。最高速度で、しかも手動運転で走る四輪車のタイヤは、どしゃ降りによる急激な路上の変化に慣れていなかった。

おまけにジューは、一瞬だが眠気で目を閉じていた。

フロントガラスにハイウェーのセンターエリアが迫った。

ジューは我に返り、急にハンドルを切った。反動で、隣に眠っていたケダが、ハンドルを握るジューの腕に倒れ込んできた。

「アッ！」

車は物凄い勢いでスピンを始めた。

車輪が路上の雨を蹴散らしながら悲鳴をあげる。

車はセンターエリアに乗り上げ、対向車線に飛び込んだ。対向車が迫る。

ジューは力任せにハンドリングするが、膝の上に倒れているケダが邪魔だった。

かろうじて対向車を躱すフロントガラスに、今度は崖が……、ジューはハンドルを切ると同時にブレーキを踏み込んだ。

鈍い金属音がする。ブレーキが砕け散った音だ。安全装置のバンパーが急速にせり出してくる。

だが間に合わない。

車は崖に激突した。ボンネットは捲れ上がり、ガラス張りの天井とフロントガラスは、そのまま

の形でふっ飛んだ。

我に返ったジューの眼に、ボンネットの下でチロチロと燃えている炎が見えた。

……生きている……

ジューにとって、ケダの体が膝の上にあったことが幸いした。ケダがクッションの役をしたのだ。

ケダは動かない。このままでは、炎がガソリンに引火する。

……逃げなくては……

ケダの体を押しのけて、かろうじて車から抜け出したジューは、よろよろと歩き出した。体中が痛い。

……おそらく体は血だらけに違いない。でも、今は逃げなくては……

次の瞬間、ジューはグンと宙に浮き、ハイウェーに叩きつけられた。

ガソリンに引火した爆風がジューに襲いかかったのだ。

だが、その衝撃はジューの中の何かを蘇らせた。遠くから自分の名を呼ぶ声が聞こえたような気がした。

……レミー、レミー？　そう、そうよ、私はレミー！……

グッドサンダーチームのレミー。

この星に辿り着き、洗脳されてクーアノアに送り込まれた――。ジューとして創られた記憶の中から浮かび上がる本当の自分を感じながら、レミーは気を失った。

レミーの体をクーアノアのどしゃ降りの雨が洗い続けていた。

第三章 私はレミー

狂気の檻からの脱出

レミーは、眩しい光に眼をしばたたかせた。白い天井に備えつけられた照明が、レミーの顔を照らしている。
「ここは？……」
白衣の医者と、やはり体格の良い看護夫が、レミーの顔をのぞき込んでニッコリと笑った。
「Gブロック、第二病院です」
「病院……」
なるほど、帯のない浴衣のような、入院患者の服を着てレミーはベッドに寝かされている。
レミーは横になったまま、あたりを見回した。
白い壁、白い床、白いベッド、白いサイドテーブルには、赤いバラのような花を飾った白い花瓶がある。
……バラの花か……きれい……
レミーは微笑した。
「気が付かれましたね。外傷は完璧に治したのに、昏睡状態が四日も続いて心配してしまいましたが、もう大丈夫です。起きて……」
医者の言葉に従って、レミーが半身を起こすと、医者は無造作にレミーの患者服の前を開き、レミーの白い胸に聴診器を当てながら言った。
「体が軽いでしょう。傷の手当ての他に体のチューンアップもやっておきました。疲れのためか、ちょっと肝臓が弱ってましたが、もう完全に治っています。意識不明の間も筋肉トレーニングをしてありますから、入院前より、むしろ健康体と言ってもいいでしょう」

レミーは医者の無造作な態度に怒ったように、手早く服の胸元をなおして言った。
「いろいろ、どうも……で、彼は？」
「………」
レミーの問いに医者は答えなかった。
「私の夫です」
「……彼はもういない。惜しいことをしましたね。素敵なパートナーだったのに」
医者はサイドテーブルから新聞を出して、レミーに見せた。
ラブパークで、カップを前に抱き合うレミーとケダの写真と、事故現場の見る影もない四輪車の残骸の写真が並んで載っていた。
〝愛のタイ記録……一転して悪夢に……〟の見出しが目をひいた。
レミーは目を閉じ溜め息を吐くと、新聞をサイドテーブルに置いた。
気に染まぬ相手だったが、二日間とはいえ夫だった男だ。それを過失とはいえ、死なせてしまった。
これから先、どうしたらいいのか、頭が混乱していた。
医師は、レミーのやり場のない気持ちを無視して事故の分析を始めた。
「あなたの疲れ切ったコンディションでは、四輪車の手動運転など自殺行為です。車が旧式のガソリンエンジンだったことも見逃せません」
看護夫が続けた。
「しかし、この人は金色カードの特権を持ち、運転ライセンスもA級を持つエリートですよ。軽率

な運転をするとは思えませんね」
「だが現実には、ハンドルの切り方、ブレーキのタイミング、全てが遅かった」
「僕が思うに、もっと別な原因があったんじゃないかな」
「別の原因？」
「ガソリンエンジンの四輪車といえば、振動が特徴ですよね……」
レミーはふたりの会話をぼんやり聞いていた。
……こいつらの会話はなんなんだ。これが夫を失った女を前にして言う言葉なのか？……
レミーは悔やしかった。
洗脳されたとはいえ、こういう精神構造の人間達とあたりまえのように暮らしていたのだ。そして三日間とはいえ、結婚してしまったのだ。
医者と看護夫の会話は、さらに耐えられなくなっていた。
「車の振動が事故と関係あるのかね」
「この人は、愛のタイ記録を作ったんですよ。もしも、あの日、車の中で愛し合えば、未公認だけれども新記録になる」
「なるほど、ふたりは記録に挑戦したのか……頷けるね……」
看護夫は、にこやかにレミーに聞いた。
「そうなんでしょ、ジューさん。そして愛に夢中になって運転をミスしたんだ」
レミーの胸にいいようのない怒りが広がった。
「はっきりさせておきますわ。事故の原因は、純粋にわたしのミスです。確かに疲れてはいました。

でも、直接的な原因は天候が急に変わったからです。あの時、雨さえ降ってこなければ……」

〝カシーン〟

床の上に医者の持っていた聴診器が落ちた。

一瞬、あたりの時間が止まったような気がした。

「雨さえ……」

医者と看護夫の形相がみるみる変わっていった。

医者はいきなりサイドテーブルの椅子を振り上げると、レミーに叩きつけようとした。

レミーは反射的に椅子から身を躱し、ベッドから転がり落ちた。

医者はレミーの顔面めがけて足を蹴り上げる。レミーは顔の前に両腕を十字にしてそれを躱し、すかさず医者の足首を掴んでひねった。

バランスを失った医者は、もんどり打って倒れた。レミーはサイドテーブルの花瓶を医者の頭に叩きつけた。

〝ガシャーン〟

花瓶の破片と赤い花が、白い床に飛び散り、医者は気を失った。

だが、レミーには息つく暇もなかった。

「ギャーッ!!」

悲鳴とも怒号ともいえぬ叫びをあげて、看護夫が体当たりしてきた。

看護夫の体格はレミーの二倍はある。まともに捕まったら勝ち目はないだろう。

レミーは素早く、浴衣のような患者服の前を開くと、襲いかかる牛を躱す闘牛士さながらに身を

躱し、すれ違いざまに服を脱ぎ、看護夫の頭にひっかけた。
いきなり目の見えなくなった看護夫は、壁に頭からぶち当たった。
軽い脳震盪を起こしてフラフラと振り返った看護夫の喉頸にレミーの空手が、鳩尾に蹴りが炸裂した。
続いて股間を蹴り上げ、体が浮いたところを背負い投げで床に叩きつけ、エルボードロップを喉元にみまって……それが仕上げだった。
全てが終わるのに三十秒とかかっていなかった。
グッドサンダーのファイター、レミー・島田の記憶も、動物的な勘も、格闘能力も、完全に蘇っていた。
……でも、どうして、こいつらはいきなり襲いかかってきたのだろう……
ふたりを倒したものの、レミーは事態を把握してはいなかった。
その時、背後にかすかな機械音が聞こえた。振り返り天井を見上げるレミーの前に、監視テレビカメラがあった。
その瞬間、レミーは納得した。
レミーは危険な言葉を口ずさんだのだ。
クーアノアの禁じられた言葉。雨……。
今、レミーは、クーアノアの人々……残酷な狩人達の前に引き出された、孤独な獲物だった。
唇を噛みしめるレミーの耳に、病室の外の廊下を駆けてくる足音が聞こえた。
命がけの狩猟ゲームが始まったのだ。

レミーは、病室のドアをロックした。医者の白衣を素早く剝ぎ取ると身にまとった。
〝ドンドン!!〟
病室のドアが外から激しく叩かれる。
レミーは窓に駆けよる。
「なんてこった……」
レミーは、その病室が七階にあることを初めて知った。レミーの視線は、病室を駆け回った。非常用シュートがある。火災の時、動けぬ病人を地上まで滑り降ろすための装置である。
シュートの扉に飛びつく、錆び付いていて動かない。
〝ドスン、ドスン！〟病室のドアが揺れる。
外からの体当たりだ。
レミーの顔に汗が吹き出る。
渾身の力で、シュートの扉を引く。
……頑張れ！　ここしか逃げ場はないのよ！……
錆がボロボロと落ちる。
ガシン！　鈍い音を響かせ扉が開いた。
病室のドアが破られ、看護夫達がなだれ込む。
レミーは頭からシュートに飛び込んだ。だが、看護夫のひとりがレミーの足首を掴んだ。死にもの狂いで看護夫の顔を蹴る。
手が離れた！　レミーの体は滑り落ちていく。

レミーに蹴られた看護夫は、シュートに駆け寄ってレミーを追おうとするが、同僚に呼びとめられる。
「待て！　手当てが先だ」
看護夫は、レミーに倒されたふたりの男とシュートを無念そうに見比べた。

病院の一階のシュートの出口から鉄砲玉のように飛び出したレミーは、転がるように走りだした。
レミーは懸命に走る。ひたすら走る。出来ることはそれしかない。その顔に恐怖はない。ともかく逃げることだけが全てだ。
その姿は、まるで時間だけを相手にして走る孤独なマラソンランナーだった。
レミーの背後を流れていく街の日常は、まだレミーに全く関心を示してはいなかった。
だが、ひとたび、街中の街頭テレビがレミーを写し出したら、今は無関心な街の日常も、牙をむいてレミーに襲いかかってくるに違いないのだ。

＊

「どれも、色、香り、味、私の望む酒にそっくりなのだが……」
金色の長い髪の男は、深く溜め息をつくとソファに腰を降ろした。
男の顔色をうかがっていた合成酒商人が、恐る恐る口を開いた。
「お気に入りませんか？　局長……」
目の前のテーブルには、ブランデーグラスに注がれている琥珀色の合成酒がずらりと並べられて

いた。
「こくがないのだ。こくが……」
「しかし、私どもとしても、味わったこともない酒を作れと言われましても……しかも、局長さえも味わったことがないというんですから、正直言って、無理難題という所でございます」
局長と呼ばれた男は、再び溜め息をついた。
「そうかもしれんな。所詮、合成酒でレミーのルイ13世は無理か……」
「はあ?」
「……いや……なんでもない。こちらのことだ」
その時、部屋のチャイムが鳴った。
その部屋は、クーアノア思考情報局局長室だった。
局長は、デスクのテレビ電話のスイッチを入れた。ビジョンに思考情報局員が写しだされる。
「フリータイム中、申し訳ございません。特殊患者が発生しました」
局長はうんざりした表情でソファに腰をおろした。
「いちいち報告はいらないと言ったはずであろう。いつものパターンでやりたまえ」
「はあ……しかし」
「……?」
「今度の患者は、特権カードの持ち主でして……」
「何色の特権カードだ」
「金色です」

「デノア支局調整員か……」
「はい、ジュー・アリア、支局調整員491です」
局長は弾かれたようにソファから立ち上がり、キッパリと言った。
「方針を変更する。今回は局長の私自らが指揮を取る」
「公開捜査をしないでですか？」
「それがよくない。結果が悪すぎる。思考情報局員の活動が緩慢で、患者が市民に殺害される例が多すぎる」
「しかし……」
ビジョンに写った局員は、不満気に何か言いかけたが、
「救世主デノアは、人命尊重を望んでいる。では、三分後に指令ルームで……」
局長はぴしゃりとそう言って電話を切った。
「今度はやる気があるようだね、ラトピ局長」
それは壁のコンピューターディスプレイから聞こえる、デノアの声だった。
「金色カードの支局調整員は、あなたにとって大切な人材のはずです。特に491はね」
かつて、別の世界でブンドルと呼ばれていたこの男は、クーアノアでは、ラトピ・モントランと名前を変え、しかし、やはり情報局長を仕事にしていた。
思考情報局の広大な指令ルームに足早にやって来た局長は、中央のテーブルにつくと、正面の壁面の巨大な電光地図を見つめた。

そこには、クーアノアの全域が描かれてあり、別の壁面には数万台のテレビジョンが街の表情を写しだしていた。

局長は、自分を見つめるテレビカメラに向かい指令を発した。

「市内パトロール全員に告ぐ。今回の捜査は秘密裏に行う。指令パターン891だ。これは救世主デノアの決定でもある。我々にとって、あのいまわしい言葉を浴びせかける特殊患者の捜査は極めて困難なものである。たとえ、患者から、あの恐るべき言葉を聞かせられても耐えねばならない。患者を決して殺してはならない。局員の献身的自制心が、思考情報局の名をいっそう高めることを期待する」

局長の指令を、それぞれのパトカーの中で聞く局員の顔は、どれもこれも一様に悲壮だった。

局長は指令を続けた。

「まず、芸術保護エリア周辺に局員の半数を配置する。芸術保護エリアを包囲。蟻一匹通すな」

電光地図の中の芸術保護エリアが赤く縁どりされた。

芸術保護エリアは、広大な敷地にクーアノアの人間達が生み出した芸術の歴史と現代の芸術家を保護している地区だった。

だが、クーアノア内で特に犯罪発生率が高く、他の地区の人々は特定の場所以外の立ち入りを禁止されていた。

……芸術保護エリアか……

局長は、デノアとこの地区について軽い論争をしたことを思い出した。
「芸術保護エリアは犯罪の巣窟です。監視テレビカメラの設置こそ急務です」
デノアの答えはこうだった。
「芸術家はプライバシーをことのほか愛するんだよ。彼らが望まぬ限り設置はできないよ」
「芸術は見られて困るものではないと思いますが……それが美しいものである限り……」
局長の精一杯、皮肉をこめた口ぶりに、しかしデノアは何も答えなかった。

指令ルームで局長は指令を続けた。
「残る半数は、事件発生のGブロック病院付近から捜索……もっとも、すでに監視カメラが患者の姿を捕えているはずだ」
指令ルームにデノアの声が聞こえた。
「どのカメラも患者を捕えていないよ。おそらく患者はカメラの死角を知っているよ」
局長はフッと微笑した。
……さすが、レミーだ……

街頭の監視カメラが緩やかに回転している。
レミーは、カメラの写らぬ場所を選んで歩いていた。
いや、その姿は、とても歩いているとは見えなかった。何しろ、ひとつの街角だけで監視カメラは十台以上備えつけられているのだ。

レミーは立ち上がり、しゃがみ込み、ジグザグに駆け回り、跳び上がり、下手なモダンバレエ、いや時には太極拳を練習しているようにも見えた。

このレミーと監視カメラの奇妙な戦いに、街の人々はほとんど関心を示さなかった。クーアノアの街には、酒や薬物で精神がおかしくなった人間がしばしば現れるのだ。

街の中に狂人が迷い出して踊っているようなレミーの姿は、いわば、この街では日常茶飯事だったのだ。

レミーの汗だらけの苦闘をよそに、街頭に流れるムードミュージックは、あくまで明るかった。

指令ルームの電光地図のGブロックとEブロックが青白く光った。捜査完了の印だ。

やがてA・B・C・Fブロックが同時に光り出した。

レミーはまだ見つからない。

しかし、確実に追いつめられていることは確かだった。

局長の表情は、次第に暗くなっていった。

……見事だ、レミー。よくここまでデノアの監視を逃げのびてきた。だが、ここまで人間に馬鹿にされて、デノアは我慢しきれるか……デノアは人間を支配出来るうちは優しい。だが、それが出来ないと知れば何をしでかすか……早く見つかってくれ、今なら私の手で保護できる……

その頃、レミーは、クーアノアを取りまく禁断地区に近いKブロックの路地に身を潜めていた。その眼は獲物を狙う豹のように、監視カメラの位置を探していた。

あまりに巨大すぎるデノアの監視網との、たったひとりの戦いは、レミーの気持ちを怯える獲物から攻撃的な狩人に変えていた。
……こうなったら、とことんやってやる！……
その時だった。レミーの肩が軽く叩かれた。素早く身構えるレミーの前に若い男が立っていた。
「愛さない？」
ガールハントだった。
レミーは、ひとまず安堵の溜め息をついた。
……ヤレヤレ愛か……あんた達はあんた達の愛を勝手におやんなさい……
かぶりを振るレミーに、
「残念だな。医者の女って上手だって聞いてたんだけど……」
レミーは、確かに目立つ医者の白衣を着ていた。
……服を変えなければ……でも、監視カメラに見つからずに、どこで……
さっきレミーに声をかけた若い男が、通りで子供っぽいフリルのスカートを着た女に声をかけている。
愛する捌け口を求めていたのだろう。レミーに断られたこともあってか、随分熱心だ。
どうやら話がまとまったらしく、その男女はプライベート・ボックスの中へ消えた。
レミーはプライベート・ボックスの「使用中」のランプが消えたままなのを見逃さなかった。
プライベート・ボックスの使用料を払いたくないのか、それとも、よほど焦っていたのか、ドアをロックし忘れたのだ。

「悪いけどいただくわ」
レミーは、通りに備え付けられた十数台の監視カメラの動きのリズムを、掌をゆっくり表にしたり裏にしたりして飲み込もうとしている。
……右へ行って左へ行って、もうひとつ左へ行って大きく右へ……
それは、スキーの回転競技で選手が旗門通過のリズムを憶え込む仕草に似ていた。
そう、レミーは、冬季オリンピックに、ヨーロッパの代表選手の身代わりとして出場し、メダルを取ったこともあるスキーの名手だった。
レミーは、プライベート・ボックスのコースに確信を持てるまで動こうとはしなかった。
なに、あのふたりが愛し終えるまで早くても三十分はかかる。
やがてレミーは、考えたコースに確信を持てた時、思わず呟いた。
「いけるわ、金メダル！」
一瞬、監視カメラは、レミーの潜む路地の一角に死角を作った。
「ゴー・レミー！」
レミーは、通りに飛び出した。
モダンバレエもどきの動きを繰り返しながら、ジグザグに通りを渡り、プライベート・ボックスのドアにへばりついた。
間髪をいれず、ドアを開き中へ躍り込む。抱き合っていた男と女は、驚いて体を離すことも出来ない。
レミーは男の顔を蹴り、ふたりを引き離し、女に当て身を食らわせた。

ふたりは声もなく気を失った。
「ごめん……今日の私は最低の女でもなんでも演じちゃう」
レミーは、脱ぎ捨てられた女の服を白衣と着がえた。
フリルのついたスカートは、二十代のレミーにはあまりに子供っぽく、しかも動きにくそうだが、背に腹はかえられない。
外の様子をうかがいながら、プライベート・ボックスから出たレミーは、ゆっくりと歩き出した。
その後ろ姿を監視カメラは捕えたが、白衣というデータがインプットされていたカメラは、何の反応も示さなかった。
だが、レミーが通りの角を曲がった時、さっきのプライベート・ボックスに、新しいカップルが入ろうとしていた。
そして、倒れている男と女を見つけた女の悲鳴——。

プライベート・ボックスの非常ランプがけたたましく鳴り出した。

指令ルームのビジョンに、Kブロックのプライベート・ボックスから気を失った男と女が運び出されていく様子が写った。
局長は拳を握りしめた。
……とうとうレミーは、デノアの我慢を破るきっかけを作ってしまった……
デノアの声が響いた。

「ラトピ局長、公開捜査に踏み切るしかないよ」
「しかし、あの女は支局調整員です」
「これ以上、市民に危害を加える訳にはいかないと思うよ」
言葉の調子は優しいが、絶対的な命令だった。
「分かりました。しかし、最悪の事態だけは避けるよう努力します。よろしいですね」
「もちろんだよ、ラトピ局長」
「車の用意だ。至急、Kブロックへ！」
局長は立ち上がった。

Kブロックの大通りをあてもなく歩いていくレミーの頭上でチャイムが鳴った。
大通りの街頭テレビに、レミーの顔写真が写った。
「臨時ニュースです。もよりのテレビジョンに御注目下さい。特殊患者が発生しました。金色カードナンバー・デノア支局調整員491、ジュー・アリア……発見された方は、もよりの思考情報局員に御連絡下さい。電話番号は001です。なお、いかなることがあろうと患者を殺してはいけません。クーアノア市民の自覚を持ちましょう。殺してはいけません」
電機店の前を通りかかったレミーを、店頭テレビジョンの中の数十人のレミーが見詰めている。
レミーは腕で顔を隠して足どりを速めた。
すれ違った中年の女が、チラリとレミーに目をやった。
女は立ち止まると、いきなり手に持ったハンドバッグでレミーの後頭部を殴（なぐ）った。レミーは振り

返ると反射的に女をつき飛ばした。大通りにいた人々がレミーを見つめた。
レミーは立ちすくんだ。
今までレミーに無関心だった街の日常が、今、レミーを中心に動き出したのだ。
レミーは動きにくいスカートをまくり上げると、いきなり走り出した。
それをきっかけに、街の人々はドッとレミーを追って走り出した。

Kブロックに急ぐ局長の車に、患者発見の連絡が入った。
局長は、全てのパトカーに指令した。
「全車輛、Kブロックへ集結。患者を住民から救出保護しろ！」

レミーは走った。
後を追う群衆の数はどんどん増えていく。
レミーの頭上で街灯が弾け飛んだ。誰かが石を投げたのだ。
さらにレミーの頭上に、ビルの窓から食品や家具が降りかかってきた。
街頭テレビジョンの呼びかけが空しく響く。
「殺してはいけません。市民の良識です。殺してはいけません」
局長は、走るパトカーのビジョンで、猛然と逃げまくるレミーの姿を痛々しく見つめていた。
レミーはKブロックの貯水池の土手を走っている。

洗脳から醒め、病院を逃げ出したものの、襲われるレミー。

行く手には貯水池にかかる鉄の橋が見えた。
「貯水池の水門に向かえ」
「現場にいかなくていいんですか」
「私の言う通りにしろ!」
有無をいわさぬ語気の強さがあった。

レミーは鉄の橋の上で立ちすくんだ。
前から板切れや鉄パイプを持った貯水池の作業員がやってくる。そして、後ろには追っ手の群衆だ。レミーは完全に前後をはさまれたのだ。獲物をとり囲んで、狩人の群れはレミーをいたぶるようにゆっくりと近づいてくる。
レミーはスカートを引きちぎると、橋の欄干をよじ登り、貯水池に身を躍らせた。
……生きてやる。死んでも生きてやる!……
レミーは、疲れ切った腕と足を必死に動かして泳いだ。
だが、群衆は執拗だった。
貯水池に数隻のボートを出して追いかけて来た。
みるみるレミーに追いついたボートの一団は、泳ぐレミーめがけ、オールで叩き始めた。
レミーは、息を思い切り吸い込んで水に潜り、オールの下を掻い潜った。だが、どんなに逃げたとしても、その貯水池は水門で塞き止められていた。所詮は袋のねずみなのだ。
息の続かなくなったレミーは、水門の縁によじ登りぐったりと身を横たえた。

水門の向こうにいくには、さらに二十メートル以上の壁を越えなければならない。
今のレミーには、とても無理な話だった。
血走った目の人々がボートに乗って近づいてくる。
土手の上には、ボートに乗り遅れた鈴なりの群衆がレミーの最期を待ちわびている。
ここで死ぬか、または水に飛び込んで溺れ死ぬか、ふたつにひとつだった。
……水脹れの死体なんて嫌だな……
レミーの顔に、諦めの微笑が浮かんだ。
その時だった。
歯車の軋む鈍い音がして、レミーの後ろの水門がゆっくりと開き始めた。
人間ひとり分の隙間が開いた瞬間、レミーは機敏に水門の向こう側にすり抜けた。
そこは巨大なダムの頂上だった。
目の眩むような高さの壁の下に激流が渦巻いている。
レミーは、耳に唾をつけ、鼻をつまんで飛び降りた。

ダムの操作室で、手動のハンドルを動かして水門を開いたのは局長だった。
「局長！　なぜ逃がしたんです」
詰めよる局員に局長は静かに言った。
「患者を殺されるよりましだ。これ以上、市民の恥ずべき行為を許せば、それは思考情報局の責任だ。人命尊重の救世主デノアも、殺されるより、逃がす方をお望みのはずだ。違いますか？　救世

主デノア」
デノアの監視カメラは至る所にある。
デノアは、局長の言葉も聞いているはずだった。しかし、デノアは何も答えなかった。
「とりあえず、患者を追って保護しましょう」
はやる局員に局長は冷ややかに言った。
「君は、この水門の向こうがどこなのか忘れたのか？」
「えっ！」
「禁断地区だ。別の世界だよ」
局長の顔に微笑が浮かんだ。
……よくやった、レミー……

レミーは激流に揉まれながら、下流へ下流へと流されていった。
やがて、それまで澄んでいた川の色が、次第に黒ずんできた。
レミーは流れの中に突き出している岩にしがみついた。
流れの向こうに広がる海は凝血しかかったような血の色だった。河口付近は朱色に泡立ち渦巻いている。
レミーは岩から離れると、流れに逆らって泳ぎ、岸に辿り着いた。石炭をばら蒔いたような真っ黒な砂浜だ。
レミーのほとんど裸の白い肌に太陽が容赦なく照りつける。気が遠くなる。ガックリと膝をつく。

そんなレミーに砂を踏む足音が聞こえた。
……また追っ手か……
だが、立ち上がる気力もない。レミーの前に太陽を背に現れた黒い影は、こう言った。
「よく逃げて来た。さすがレミーだ」
黒い影は着ていた上着を脱ぎ、レミーの肩にかけてくれた。
……この声は……そう、忘れるもんか……
レミーは、何も言わずに黒い影に抱きつき、その腕の中で気を失った。レミーの顔は安心しきっていた。
なぜなら、その黒い影の主は〝北条真吾〟だったのだ。

第四章

私を愛して

荒野に芽ばえた浮き草

クーアノアの中央広場には、高さ五百メートルのデノアの塔がそそり立っていた。
巨大な円柱の先に太陽をかたどったクリスタルの球体をのせたクーアノアで最も高いこの塔は、救世主デノアのシンボルだった。
「大きければいいというのか……美しくない」
塔の前でパトカーから降りた思考情報局長は、塔を見上げ、吐き捨てるように呟いた。
局長は、水門を開きレミーを逃がした件で、直接面会するよう、デノアから呼び出されたのだ。
局長は、塔の基部に備え付けられたエレベーターに乗り、地下二十一階まで降りると、ベルトロードに乗った。
ベルトロードの壁面は透明になっていて、デノアの巨大なメカニックが展望できた。
デノアの細胞とも言える厖大な数の部品と、毛細血管を思わせる絡みあった無数の電線がどこまでも続いている。
そして、クレーン車のような巨大メカニックからペンチハンマーほどの小さなメカニックまで、様々な形をした作業用ロボットが、巣箱にたかる働き蜂さながらに、うじゃうじゃと蠢いている。
「大昔の三流SF映画か……デノアの塔といい、大きさと物量の誇示がどれほど美しくないか、デノアには分からぬとみえるな」
確かにクーアノアの高度な科学レベルでいえば、デノアのこの巨大さと複雑さは、あまりに芝居がかっていた。
優秀であれば優秀であるほど、コンピューターはシンプルで小型化されているはずだ。
今、ここに広がる光景は、クーアノアの人間達に畏怖の念を抱かせるための演出にすぎないこと

を、局長は見抜いていた。

「君はなぜ、水門を開いたんだろう？」

面会用フロアに来た局長にデノアが話しかけた。

面会用フロアは劇場に似ていた。二千を超える座席が並び、正面に巨大なスクリーン・マルチビジョンディスプレイが備え付けられていた。これは本来の伝達という用途の他に、デノアの中で起こる電子的変化を様々な図形と色彩で写しだす役目があった。

いわばデノアの感情表現だった。

局長は、ディスプレイに深々と頭を下げて言った。

「お許し下さい。あのままでは殺されてしまった。他に救いようがなかったのです」

「それだけかな」

デノアの問いに、局長は頭を上げた。

「と、申しますと？」

「君はどうやら、失っていた記憶を取り戻したようだね」

「そのようなことは、あなたが調べれば簡単に分かることでしょう」

「それはそうだね」

「記憶が戻っているとしたら、もう一度、洗脳しなおしますか？」

「君達は、ここの人間と違って洗脳しにくい人間のようだ」

「やりたければ何度でもおやりなさい。ただ、あなたは、私達に何を求めるのですか。ここの人間

のようにあなたに服従する奴隷ですか？　それともあなたと自由な意識で付き合う友ですか？」
「もうよそう、その話は……現実の問題を話そう。逃げた患者は、支局調整員だ。彼女はデノアの仕組みをかなり知っている。もしも外の人間達と手を組んだら、クーアノアは危険な状態に陥るよ」
「あなたの計算にもしもはないはずです」
「そうだね。思考情報局は完全武装し、治安維持を図るべきだよ」
「闘争・暴力を避け、人命尊重がモットーのあなたとしては辛いところですな」
「……現実を把握出来ないコンピューターなど、置き場に困る骨董品なのだよ」
そう言い終えてデノアは沈黙した。
局長はデノアの真意をうかがうように、何も写っていないディスプレイを見つめた。

＊

赤茶けた荒野を砂塵を蹴立てて、真吾の運転するジープが走っていく。
遠くに霧に包まれたクーアノアが、夕陽を背にして琥珀色に輝いていた。
だが、ジープの助手席に乗っているレミーは、クーアノアには目もくれなかった。
じっと真吾の横顔を見つめていた。
レミーの蘇った記憶が正しければ、一年振りの出会いだった。
……仲間に会えた……それも一年前と少しも変わらぬ姿の真吾に……
涙がこみ上げてくる。

泣くまいと思う――なぜなら、レミーはただの一度だって真吾達に涙を見せたことがなかったのだから――それでも潤んでくる目を、レミーは、真吾から借りた上着でごしごし擦った。
「どうした? 目に砂でも入ったのか?」
……野暮なところも相変わらずだ……
「ん、うん、相変わらず乱暴なんだから、あなたの運転……」
「レミーほどじゃない」
真吾はぶっきらぼうに言った。
……ほらほら……
ちょっとケチをつけると、子供のようにムキになるのもいつも通りだ。
「お酒はまだやめてる?」
真吾は、一年前、アルコール中毒になって以来、禁酒しているはずだった。
「一度死んだ気で止めたんだ、二度と飲んでたまるか」
……単純なんだよな……ますますムキになっている……
でも、その口調が、今はとても頼もしく感じられる。
「記憶はいつ戻ったの?」
「最初から、記憶なんて失っちゃいない……」
「えっ?」
真吾は、左の掌をみせた。
痛々しい傷あとが残っていた。

「今でも時々痛むが、人の意志で動かされるのはご免だ」

「…………」

傷あとは、真吾の強靭な意志の証だった。

レミーは改めて真吾の顔を見つめて聞いた。

「じゃあ、洗脳された私達が、どこで何をしていたか知っていた？」

「いや、俺はクーアノアに連れて来られた四日後にあそこを抜け出した。当然、俺のことは、デノアの監視カメラに登録されているに違いない。あすこへ戻ったら、すぐに捕まっちまう。俺は一度もクーアノアに近づかなかった。だから君がどこで何をしているかは知らなかったよ」

「そう、一年間もたったひとりでこんな砂漠に……」

「いや、ひとりじゃない」

「えっ？」

「クーアノアの人間達もここに住んでいるんだ。〝雨〟という言葉を知っていて、あそこから逃げ出した連中はかなりいてね。連中は、芸術保護エリアに隠れ住んだり、クーアノアのすぐそばに村を作って、芸術保護エリアの連中からおこぼれを貰いながら生きている。奴らの数は一万人ちょっとはいるかな。奴らは、クーアノアを奪い返そうと必死になっている。だが俺は、そんな戦いに捲き込まれたくはない」

ジープの前方の丘にポツンと立っている小さな掘っ建て小屋が見えてきた。

「あそこが俺の家さ……」

住めるだけという感じの粗末な小屋だが、レミーにはクーアノアのどんな建物よりも素晴らしく

思えた。
……でも、どうして……
とレミーは思う。
……真吾はあの砂浜にいて、私に会えたのだろう……
「奴らの村に買い出しに行って、クーアノアの新聞を見たんだ」
「新聞……？」
「交通事故の記事さ。驚いたよ。君の写真が載っていた。もしかしたら、事故のショックで記憶が戻るんじゃないかと待っていたら、案の定さ……俺が昔、逃げたのもあの水門からだった」
「そう……あの新聞読んだの」
レミーはいたたまれない恥かしさで、肩を落とし俯（うつむ）いた。
「どうした？」
「読んだんでしょ、愛の記録のことも……」
「………」
「当然よね……わたし、わたしってね、きっと好きなのよ……もともとパリの娼婦の娘ですものね。血は争えないのよ。わたし、新聞に載っていただけじゃないの。わたし、クーアノアでは休みのたびに、毎週毎週、男を探していた。そして、いつも見つけたわ……愛する男を……」
「よせ。もう言うなよ。そんなことは、今後誰にもな……だいいちレミーらしくないぜ……レミーは洗脳されていたんだ。新聞の女はレミーじゃない。デノアが創り出した、クーアノアの女だ。俺はレミーをよく知っている。あれはレミーとは違う女だ。レミーは、愛ってものがどんなもんか、

よく知っている女だ。俺が保証する」
真吾はムキになって言った。
レミーの目から涙が落ちた。
うれしかった。
涙を止めようとしても止まらなかった。
真吾は、初めて見たレミーの涙に慌て、どうしていいのか分からない様子だった。
「おい、レミー。どうした……俺は別に……何か悪いことでも……ごめんよ。レミー、あの、その……泣かす気は……」
「いいの……ありがとう、ほんとに……でも、今は泣かせて……」
レミーは声をあげて子供のように泣きじゃくった。
……この私を抱いて欲しい。思いっきり愛して欲しい。真吾なら……わたしも愛すわ。思いっきり愛したい……

レミーがやっと泣き止んだ頃、ジープは掘っ建て小屋の前に着いた。小屋の周りを、みるからに痩せた青菜の畑がとりまいている。
「クーアノアの連中に頼らずに自活しようと思ってね。今はこんな物しか穫れないがね」
……畑仕事なんてやったことないけれど、この人となら……
掘っ建て小屋のドアが開いた。
「見つかったんですね、レミーさんが」

再会した真吾は、クーアノアの外で、つつましく暮らしていた。

陽焼けした健康そうな若い女性が飛び出してきた。
「えっ？　この人は？」
呆気にとられて、その女性を見つめるレミーに、真吾は言った。
「クーアノアから逃げた連中の村で生まれ育った女で、シアって言うんだ。俺の女房さ。もうすぐ子供も生まれる」
「!!　あ……そう……おめでと……」
レミーは思わずそう言ってから、
「……そういうことになってたの……」
これが精一杯の台詞だった。
レミーは、ファイター仲間の男のひとりを始めて本気で愛そうとして、数分後に振られてしまった。

「さあ、この星で出来る唯一の地球型、北条真吾流天然料理だ」
真吾は、テーブルに坐ったレミーに、青い葉を散らしたすまし汁のようなスープを出した。
みるからに不味そうなスープだ。
「これが地球型って、どういうこと？」
「この星は、天候も自然もめちゃくちゃな不毛の星だ。正直いってろくな生物は住めやしない。クーアノアにいる人間も動物も、デノアが創った合成食品で辛うじて生きているにすぎないんだ」
「でも、クーアノアには、自然な森や野原があるわ」
「あれも合成肥料で維持されているのさ。この星では、合成肥料なしで植物は生きられない」

「他の所に、植物はないの?」
「ないといっていい。でも、この星には、地球とほとんど同じ空気と水がある。ということはだ、そう遠くない昔に、この星は何か急激な異変で不毛になったということさ。植物のない星は、地球のような空気は持てないからね」
レミーは肩をすくめた。
「自然科学の分野はまるでだめなの……」
「やれやれ……早い話が、どんなに今が不毛でも、地球型の星であるなら、合成肥料に頼らない自然の植物さえ殖やせば、もとに戻る可能性もあるってことさ。ただし、空気と水の質が変わらないうちにね」
レミーはスプーンをとった。
「冷めないうちにいただくわ」
レミーはスープを一口食べたとたん、目を白黒させた。二度とお断りしたい味だった。
「不味いだろう?」
真吾がレミーの顔をのぞき込んで、フランス語で言った。
料理を運んでいるシアはキョトンとした顔だ。
「分かってて勧めるんだもんなあ……」
レミーは日本語で答えた。
「あいつにこの味が美味いって思わせたいんだ」
と、ドイツ語で真吾が言った。

「女房教育か……」とレミーの英語。
「そういうこと」と、ロシア語の真吾。
ふたりは、地球の各国の言葉を虫干しでもするように次々と使った。
懐かしかった。ふたりにとって一年振りの地球の言葉だった。
「だけど、正直に聞くけれど、違うだろう、クーアノアの食べ物とは……」とスペイン語。
……そう言えば、どこか違うような気がする……
「もう一度、いただくわ……」と中国語。
レミーは、スープを舌の上で転がしてみた。苦かった。しかし、どこか懐かしい土の香りがした。
地球の各国の言葉がまた飛びかった。
「俺はこの土地に種をまいてみたんだ」
「種？」
「ああ、どこで紛れ込んだのか知らないが、俺のポケットの綿埃の中に、地球の植物の種が入っていた。ほとんど奇跡だよな」
「でもないわ」
「あん？」
「野原を散歩なんかすると、よくあることじゃない」
「それを言っちゃおしまいだぜ」
「ごめん」
「素直でよろしい」

「今日、一日は、あなたには素直でいたいの」
「あん？　どういうこっちゃ」
「今日だけ、あなたを愛していたいから」
レミーはいたずらっぽく笑って、エスペラント語でそう言った。
「ゴホン」
真吾は日本語で咳込んだ。
シアがたまらず口をはさんだ。
「あのう、クーアノアの言葉で話していただけません？」
「ごめんなさい……」
レミーは舌を出し、肩をすくめた。
真吾は真顔になって、
「要するに、その種は、俺がアルコール中毒を治すためにドイツの黒い森でトレーニングした時に紛れ込んだらしいんだ」
「ドイツって？」
とシアが聞いた。
「俺が育った地球という星の国の名さ……」
「ドラマチック！」
とレミー。
「その気にさせるなよ……ともかく、その種はしぶとくこの星で芽を出した。これが、その草のス

ーブって訳だ。俺はここに住みつくことにした。ここで、この草を育ててみたいんだ」
「真吾……あなたらしいわ」
「どうせ俺も君も、この星で生きていくよりない」
「……ええ……」
そうなのだ。この星が宇宙のどこに位置するかも分からず、まして時空の歪みを通り抜けてきた以上、今が宇宙の誕生からどれぐらいの時が過ぎた時代なのかも定かではない。
「俺は一生、ここで生きるつもりだよ。上手くいけば、この星に、俺の蒔いた種が広がり、地球のような星に戻るかもしれない」
「格好いいんだ」
レミーは真面目にそう言った。
あまりに遠く、あまりに大きな夢を見つめることが出来る真吾が羨ましかった。
「浮き草が、やっと定住の地を見つけたのね」
「まあな。そして、俺はシアと会った。こいつは、クーアノアの外で生まれ育ったから、あそこの人間の生き方にあまり馴染んでいないんだ。俺はこいつを地球風に愛せた。こいつも返してくれたよ、地球風の愛でな……こうやって俺についてきてくれた」
……愛か……この一年間……変だ変だと感じ続けてきたクーアノアの愛……で……やっと本物を見つけたと思ったら、それは真吾とシアのふたりの愛で……いいもん……レミー、つお〜い娘、ちゃんとひとりで生きていくもん……
そうは思ってみても、やはり、レミーは淋しくて辛かった。

翌朝、真吾の小屋でレミーが目醒めたのは、疲れのせいか、陽もかなり高くなった時間だった。すでに真吾とシアは起きて外に出かけたらしく、テーブルの上には、朝食とシアの物らしい服と、そして〝ゆっくり気兼ねなく〟とフランス語で書かれた紙が置いてあった。

窓辺に来て、畑で働く真吾とシアを見つけた時には、やっぱり、ずしんとひとりぼっちを感じたが、クーアノアの朝にいつも感じていた、ねぼけたような不快感はまるでなく、爽快だった。

今日からこそは、本当のレミーの朝だった。

とはいっても、さし当たってやることもなく、行く当てもなかった。

……真吾の畑仕事でも手伝うか……ふたりの邪魔かなあ……シアさんが気にしちゃ可哀相だしなあ……でもいつまでも、何もせず居候を決め込むわけにもいかないし……服だって借りちゃってるし、まっ、ここは、ギブアンドテイク、割り切って手伝うか……

レミーは、タオルを頭に捲き、ペッペッと手に唾をつけると、壁に立て掛けてあった真吾の手造りの鍬をかついで外に飛び出していった。

「ハーイ、おはよう、便利屋のレミーです。料理、洗濯、畑仕事、お子様生まれりゃ、ベビーシッター、もちろん掃除はお手のもの。御主人様、なんなりとおおせつけ下さいませ……」

おどけてふたりに敬礼して見せた。

真吾とシアは、その格好に顔を見合わせて吹き出した。

「おいおい、よせよ。それ、全部、レミーの苦手なもんじゃないか」

「あっ……見破ってるわけね。辛いなあ」

「レミー、君は君らしく、自分で生きていけるさ」
そのとき、シアが、クーアノアの方角を指さして言った。
「迎えがお見えになったようですね」
砂煙をあげて、ジープがこちらに向かってくる。
「迎え？」
「君の力を借りたいって連中がいるんで、一応紹介するよ。もちろん、やるやらないは君が決めることだ」
「私のなにが必要なの？」
「君はこの世界では、コンピューターの権威、支局調整員だ。正直いって、機械音痴のレミーが、どうしてコンピューターなのか……腑におちないがね」
「自分でも腑におちないわ。もっとも、支局調整員の一年で、しっかり身についてますけどね」
「頭は良かったんだ」
「あ〜ら、今ごろ、お気づき？　十年遅いわ」
「十年早けりゃ、恐ろしくって付き合えなかったよ」
「遅れた分、今すぐ怖くなりましょうか？」
「けっこう、今さら女房に、女に弱いところ、見られたくない」
「あらあ……のろけの恥を知らないわけね」
呆れるレミーに、真吾は急に真面目な顔で言った。
「それよりレミー、あのジープに乗っている男は、君の良く知っている奴だ。……村の指導者のひ

とり。だが、いいか、そいつの記憶は戻っちゃいない。過去のことは言わない方がいい。下手な混乱を招くだけだ」

「了解……でも誰なの？」

「来れば分かる。面倒見のいい奴さ」

レミーの頭に浮かんだのは、もちろん、ブンドルとキリーだった。

……面倒見がいいっていうとキリーかな？……

ジープは、ぐんぐんこちらへ向かって近づいてきた。

第五章 私は生き抜くつもりです

病みの村から、再び狂気の指へ

「よーう、野良仕事の仙人、元気でやっとるかね。女房も元気か。やあ、いいこと、いいこと」

ジープから飛び降りた男は、握手しながら、パタパタと機嫌よく真吾の肩を叩いた。

レミーは開いた口が塞がらなかった。

その男は片目だったのだ。肩にカラスはいなかったし、手に精神安定剤も持っていなかったが、間違いなく、元アメリカ大統領、スグーニ・カットナル、その人だった。

……ふーん、大統領だったから、ここでも指導者か……

などと、意味もなく感心していると、人なつっこくレミーに近づいて握手を求めて来た。

「ワシ、村の指導者、グサラ・ダサラです。……いやあ、新聞の写真で見るよりべっぴんさんですな。いいこと、いいこと。御主人は気の毒しましたが、なに、辛いことなんかパーッと忘れて。わしらの村にも独身のいい男はいっぱいいますからな」

……このおっさんも、あの新聞を読んだのか……

レミーは頭を抱えたかった。もっとも記憶が戻っていないのがせめてもの救いかもしれない。

昔のコチコチに固いカットナルなら、ふしだら、不謹慎、身を清めよ！　尼寺に行け！　その種の言葉を百以上並べたに違いないと思うとホッともしたが、同時にまた、クーアノアの一年を思い、やるせない気持ちになるのだった。

真吾は別れ際に、レミーの耳元でそっとささやいた。

「レミー、負けるなよ。俺は生きる。君もな……」

＊

レミーをジープに乗せて村に向かったグサラという名の元アメリカ大統領は、運転している間中喋り続けていた。

「わしは、生まれも育ちもクーアノア禁断地区、生っ粋の〝雨っ子〟でしてね。生まれてこの方、空から降るあれを水って呼んだことがないのが誇りです。まっ、とは言っても、なんとかクーアノアの内と外の人間が平和に仲よく暮らしていく方法がないかと、日夜頭を悩ましているわけでしてね。これがなかなか難しい」

「はあ……」

「なにせ、クーアノアの連中ときたら、あんたもひどい目に合ったように、雨って言葉を聞いたとたんに問答無用で殺しちまう。おまけにこちら側にも、目には目を、歯には歯をって言うんで、力づくでクーアノアをぶん取ろうって連中がいるんで始末が悪い。しかし、どんなことがあっても喧嘩はいけません。戦いはいけません。平和が一番です」

「はあ……」

……これが本当に、あの短気で好戦的だったカットナルなんだろうか……

レミーは洗脳の威力をまざまざと見せつけられた気がした。でも、カットナルに関しては、このまま記憶が戻らない方がいいのかも知れない……と思いかけて、レミーは慌ててかぶりを振った。

……違う！　わたしの洗脳された一年は――どんな形であれ、自分を失わす洗脳は――ええい……それを考えるなと言うのに……

……過ぎたことは仕方ない。わたしは、これからハッチャキで生きなきゃならんのだワイ……ウン！……

カットナルは喋り続けていた。

「ところがわしの気持ちも知らんと、最近、強硬派が増えてきましてな。要するにタカ派ですな。わしら平和なハト派、連中に言わせりゃ、ハトとタカじゃ、タカが強いに決まっている、ハトは食うには美味しいが、食べ過ぎると下痢をすると言うんですな……けしからんです。全くけしからんです。そう思わんですか？」

「はあ」

「ハトもタカも伝説の鳥です。誰もハトを食った経験もないくせに、下痢をするなどと言うのは許せません」

……なにを言いたいんだろ、このおっさん……

「実は、あなたを本当は誰にも会わせたくないんですよ、わしゃ」

「どうしてです？」

「あなた、支局調整員でしょうが……クーアノアを治めるデノアの仕組みをよく知っとるでしょうが」

「知っているとしても、少しだけですわ」

「強硬派がデノアの弱点を掴めば必ずクーアノアに攻撃を仕掛けます。戦いです。いけません。こりゃ困ります」

「じゃ、私を誰にも会わせなきゃいいんですわ」

「そーもいきません。なにしろ、わしらの村に物資を密輸してくれる大切なスポンサーの願いですからな。スポンサーは大事にしなきゃいけません」

……あらあら――ここらは、しっかり政治家ね……

「いいですか、強硬派には気をつけて下さい……デノアの弱点を悪用されないようにね」

「デノアに弱点などありませんわ」

「そりゃ困る」

「えっ」

「デノアの弱点を知れば、クーアノアとの平和交渉を有利に運べますからな。わしら平和を願う者にこそ、敵の弱点が必要なんです。そこんとこよろしく」

……なんのこっちゃ、やっぱりこの人、政治家が一番タイプなのよね……

レミーは指導者としてのカットナルになんとなく納得したのだった。

やがて、霧につつまれているクーアノアの姿がはっきりと見えてきた。

そこにはレミーが今まで見たこともない、外側からのクーアノアの姿があった。

クーアノアのどの高層ビルよりも高い、白い霧の壁が、万里の長城のようにどこまでも続いていた。しかも、遠くでは壁のように見えていたそれは、近くで見ると、ドライアイスの煙のような霧が、高速度撮影で撮ったナイヤガラの滝さながらに、ゆるやかに流れ落ちているのだ。

陽の光が、その表面にキラキラと光の渦を踊らせている。

滝の下には、岩にしがみつくふじつぼのような粗末な民家が密集していた。

「あれが、わしらの村です」
　レミーは村に近づくにつれ、異様な雰囲気を感じ始めた。
　道のいたるところに、痩せこけ青ざめた病人がうつろな眼差しで坐っていた。
　酒瓶を抱えて酔いつぶれている男女……明らかに薬物に冒されているのが分かる、澱んだ目の人々がうろつき回り、目つきの鋭い男女が落ち着きなくあたりをうかがっている。
　まるで地球中のスラム街をひとまとめにしたような村だった。
　キリーがこの村を見たら、あのニューヨークのブロンクスさえ、まだましだと言うに違いない、とレミーは思った。
「……暗いのね……ここ」
「ジューさんは何が原因で〝雨〟を思い出しましたかな」
「えっ？　事故のショックで……」
「でしょう……あの言葉は、事故とか病気のショックや酒や薬の中毒の幻覚から思い出す人が多いんですな……おまけに、内の連中に追いかけまわされた恐ろしさから立ち直れない人もいる。もちろん、ある日、なんの前ぶれもなくあの言葉を思い出して、身の危険を感じて、着のみ着のままで逃げて来た連中もいる。そいつらは、体に悪いところは何もない。だが、そういう奴らに限って、昔の暮らしを懐かしんで、力でクーアノアを奪い取ろうと企んでいる……困ったもんです。だがな、本当に助けなければならぬのは、ここにいるような人達だとは思いませんかな」
　レミーはカットナルの意外な一面を垣間見たような気がした。
「戦いで、もしクーアノアが我々のものになっても、支配者がデノアから強硬派に変わっただけで、

結局、この人達は取り残されてしまう。この人達を救うには、平和的にデノアと話し合うよりないのですよ」

レミーは、カットナルがアメリカ大統領在任中行った悪評だらけの政治の中で、たったひとつだけ成功した政策を思い出した。

それは、自分の経営する製薬会社の副作用のない精神安定剤を無料で国民に配り、麻薬やアルコール中毒者の数を減らしたというものだった。今は洗脳されているとはいえ、カットナルの中に、地球にいたころの何かが残っているのかもしれないと思うと、レミーは、かつて権力志向まるだしだったこの男を、それでも憎めないのだった。

カットナルのジープは、村の中央にある集会場の前に来て停まった。

集会場の中から背丈(せたけ)二メートルは超える獰猛(どうもう)な顔の男が、三人の護衛を伴って出てきた。

「あいつが強硬派のリーダー、グロス・ラバです。気をつけた方がいい」

グロスはレミーに挨拶(あいさつ)もなく、いきなり話し始めた。

「俺はクーアノアを奪回したい。しかし、今まで行った破壊活動は、残念だが、読まれているんだ。で、君には、一日も早くデノアの弱点を調べ、デノア以上の作戦を見つけて欲しい。出来るだろうな」

「あなたは、女性にいつもそんな頼み方をするの？」

「ん？」

「愛されないわよ、女性から……せっかくいい体をしているのにね……」
そしてカットナルに言った。
「この村のスポンサーに会わせて下さる?」
「分かりましたぞ」
カットナルは、呆気にとられているグロスに砂煙を吹きかけて、ジープを発進させた。
カットナルは上機嫌だった。
「見ましたかな、あなたにピシッと言われたときの、あいつの顔。いやあ、さすが金色カードの文局調整員。あっぱれ、あっぱれ」
だが、レミーは笑えなかった。平和派のリーダー、カットナルを前にして、あの傍若無人ぶり。
……よほど自信があるんだわ——この村は、あいつに牛耳られている……
レミーはそれをはっきり感じていた。

レミーとカットナルは霧の壁の真下に立って、スポンサーの迎えを待っていた。
やがて、レミーは霧の壁の向こうに人の気配を感じた。
霧が人の背丈分だけ割れると、いつの間にか、ギリシャ時代の女神のような布をまとった女が現れた。女のレミーですら、目を見張るほど美しかった。
カットナルがレミーを紹介した。
「この人が、支局調整員のジューさんです。後はよろしく頼みますぞ」
「はい、私、イルと申します。御主人様のお屋敷へ御案内致します。こちらへ……」

レミーは、その声を聞いて仰天した。

男の声だったのだ。

「そう、彼は男なんだ。さ、遅れると見失いますぞ」

カットナルにうながされて、レミーは慌てて霧の中へ入った。

レミーは、霧の中をイルの影を追って手探りで歩いていった。

五分ほど歩いただろうか、霧が急に晴れると、レミーとイルは誰もいない街角に立っていた。後ろを振り向くと、霧の壁などなく、無人の街路が遠くまで続いている。

「こんなこと、あり?」

イルは黙ってレミーの背後に手を伸ばした。イルの指が、なにもない空間に吸い込まれて消えた。

レミーも真似をして納得した。

「立体映像ね」

イルは頷いた。

遠くまで続く街路は、霧の壁に映写された立体映像だった。

クーアノアの周りを取り巻く霧のスクリーンに写った映像は、内側の世界の人々に、人間の世界はクーアノアしかないように見せかけていたのだ。

イルはレミーを誰もいない街角から地下の下水道に案内した。

下水道の行き止まりに扉があった。

扉を開けたとたん、そこはシダや裸子植物の密林だった。
シダの陰でふたりを睨んでいた恐竜がいきなり飛びかかった。だがふたりは、驚く気配もなく黙って歩いていく。次の瞬間、ふたりの体は恐竜の体を突き抜けた。
「ここは芸術保護エリアの立体映画館です」
レミーにもそれは分かっていた。
気になるのは、立体映画の内容が地球の中生代の想像図にあまりに似ていたことだった。
湿地帯の向こうにポツンと〝出口〟と書かれた扉が立っている。ふたりは出口へ向かった。

レミーとイルが出てきた所は、石の巨大な建造物の前だった。

「これが映画館か……」
レミーがその石の建造物を見て、すぐ思い出したのは、ローマのコロッセオだった。ローマ時代、戦うためだけに飼われた奴隷達の殺し合いや、異教徒の処刑を市民達の見せ物にした競技場だが、その遺跡そっくりの建造物が、立体映画館として使われているのだ。
「ま、どっちも見せ物には違いないけど……」
パリで不幸な青春時代を送ったレミーは、なけなしの小遣いを貯めて映画を見るのが唯一の楽しみだった。週末になると、シネマヴァリティというパリ独特の名画座に通うのがレミーの習慣だった。それだけ愛した映画だけに、たとえクーアノアの中だとはいえ、本当の死を見せ物にしたコロッセオで映画が上映されているのは気持ちのいいものではなかった。

……もっとも、この建物がコロッセオのような使われ方をしていたかどうかはしらないけど……

レミーは映画館の前の通りに目をやった。

人々は古今東西の様々な衣服を着て通りを往きかっている。中世の騎士がいる。中国の皇帝がベルサイユ宮殿風の貴婦人と話している。

インディアンの酋長が歩いているかと思えば、

イギリスのパンクロック風や、原宿の竹の子族風など珍しくもない。

ここでは、薄衣をまとったイルのギリシャ風の衣装も決してアンバランスに見えなかった。

建物だって同じだ。コロッセオの隣には、日本の奈良時代風の五重の塔があり、その向こうの丘にはドイツのノイシュバンシュタイン風の城がある。ありとあらゆる世界中の名所旧跡がごっちゃに脈絡なく押し込められているのだ。

……できの悪いディズニーランドか、万国博って感じね……でも、どうしてこう地球のものに似ているんだろう……

「芸術保護エリアは初めてですか？」

イルが、物珍しそうにあたりを見回すレミーに聞いた。

「いいえ、前に観光バスで一度……もっとも一日コースだから……たいして見られなかったわ」

「ここの観光許可ポイントを全部回ると、一カ月はかかります。それでも、芸術保護エリアの五分の一にも足りません」

「あとは、こわ～い芸術スラム……一般市民は立ち入り禁止ね」

「だからこそ、雨を知っている人達が紛れ込めるんです。さ、乗り物を用意しました」

コロッセオの駐車場には、これまた様々な乗り物が駐車してあった。クラッシックなガソリンエンジンカーはもとより、七五〇ccのオートバイ、自転車、ローラースケートボード、人力車、そして動物達は精密に造られたロボットにせよ、アメリカ西部の駅馬車、平安時代の貴族の牛車、シンデレラもかくやのクリスタル馬車、エスキモーの犬橇まであった。
　イルは、ローマ時代のふたり乗りの戦車にレミーを案内した。
「申し訳ありませんが、あなたの服装はまともすぎて、ここでは目立ちすぎます。着換えを用意しました」
「了解……注文がいえるなら、あなたの服みたいなのがいいな」
「きっとお似合いだと思いますが、これでは、あなたの素顔と体が表に出すぎます。思考情報局の調査員に見つかりやすい」
「そうか……それはいえてる」
　で、レミーが何に着換えたかといえば……ギリシャ神話の戦いの神マルスもかくやという戦士の服装だった。
　石畳の道を走るふたり乗りの戦車は、まさにギリシャ・ローマ時代そのものだった。
　戦士とそれを賛える美しい乙女……誰も男女があべこべだとは気付かなかっただろう。
　道の両側には、ジャコメッティ風の彫刻や薬師寺の日光菩薩風、エジプトのファラオの石像から、インディアンのトーテムポールまで、ありとあらゆる種類の彫刻が並んでいた。
　……やはり、ここは地球と関わりがあるのかも……

芸術保護エリア。そこには地球の芸術品と一見似たものが……。

美術鑑賞眼の鋭いレミーにも、ここにある彫刻が、地球にある芸術と別ものだという自信がなかった。

……いや、もしかしたら、ここは地球そのものかも……

レミーの強い疑惑は、地球でもっと有名な彫刻にそっくりな像を見て、大混乱を起こした。

ミロのビーナス……だが、そのビーナスには腕があった。

ふたりを乗せた戦車は、フランスのブルボン王朝の宮殿を思わせる建物の前で停まった。

門には〝美術品書店ジーラス〟という文字が彫り込まれてあった。

「ジーラス……？」

「みなさんのスポンサー、御主人の名前です」

宮殿の中は、棍棒からレーザー銃まで、旧式の兵器や拷問道具や、そして鬼や悪魔など、グロテスクなスタイルの彫刻を売る芸術品部門と、戦いや暴力、人間の苦悩や苦痛を写実的に描いた絵を売る絵画部門……そして書店に分かれていた。

……それにしても、イメージの暗いものばかり……

レミーは、その売り場に入ったとたん、人間の美しさや喜びをテーマにした作品がまるでないのに気付いていた。

書店部門は、豪華なサロンを思わせ、広大なサロンの壁は全て本棚で、数十台のテレビカメラが本棚の前をゆっくりと動いている。

様々な衣装の客が、ワイングラスを片手に、閲覧テーブルに備えつけられたビジョンに写し出さ

れる本の背表紙を見ながら、品定めをしている。気に入ったものがあれば、テーブルのボタンを押す。すると、その本をマジックハンドが取り出し、ベルトコンベアが運んでくれる。

人々の関心は、本の内容よりも、その装丁の華美さにあるようで、ほとんどがページもめくらずに買い求めていく。

……どうせ内容など、たかがしれているのだ。セックスにサドとマゾと暴力……

レミーは、新聞で見た今月のベストセラーを思い出した。

……バキュームラブシリーズ・パート49、〝縛っていじめて〟……次回予定作は〝血まみれで殺して〟だったっけ……

レミーは、そんなことをぼんやり考えながら、サロンを横切り、奥の間に向かった。

レミーがイルに案内され、奥の間に入ってきたとき、この宮殿の主ジーラスは、画商の持つ一枚の絵を品定めしていた。ジーラスは車椅子に坐り、みるからに病弱そうな老人だった。

「素晴らしい。なんと無惨な絵だ」

ジーラスは青白い顔のまま、目だけギラギラと光らせて画商に言った。

「そうでしょう。わしが持ち込む絵に下らぬものなどありません」

その絵は、壁の前で数人の男女が銃殺された瞬間がリアルに描いてある銅版画だった。

そのとき、イルがジーラスにレミーが来たことを告げた。

「御主人様、文局調整員のジューさんがお見えになりました」

「うむ、ちょっと待ってくれたまえ、この絵を買わねばならんのでな。ドマさん、いくらお望みか

な」

「一千万……びた一文まかりません。もっとも、この店の格式あるレーベルであなたが売れば、二千万でも三千万でも、お望みの額で売れるはずです」

「ごもっともです。喜んで一千万払いましょう。しかし、ドマさんの審美眼は素晴らしい。なにかいつでも？」

画商は、気取った口調で答えた。

「わしが美しいと思ったもの、それは美しい」

……あん？　どこかで聞いた台詞……

ぼんやり奥の間の扉のそばで待っていたレミーは、その声で我に返り、画商の顔をまじまじと見た。

……!!　こんなのあり……

レミーは仰天し、本当にひっくり返りそうになった。なぜなら、その画商は〝美しい……〟とは全く関係ないはずのヤッター・ラ・ケルナグールだったのである。

そのとき、ジーラスがレミーに向かって言った。

「お待たせしました。ジューさん、わたしがこの家の主、ジーラスです。こちらは、クーアノアの画商、ドマさん」

レミーは、ケルナグールをじっと見つめた。

ジーラスは、レミーがケルナグールを疑っているとでも思ったのだろう。

「安心なさい、ジューさん。ドマさんも、あなた達の協力者、スポンサーのひとりです」

だが、クーアノアでドマと呼ばれているケルナグールも、レミーをじっと見つめている。
「どうしました？　ドマさん」
ケルナグールは、やがて溜め息ともつかぬ声を出した。
「フ〜ン、美しい。なかなかに美しい。新聞で拝見したより、さらに美しい。実はわし、画商の他に立体映画も作っておりましてな。今年作る予定の芸術映画『イバラとムチの女王』の主役が決まらなくて困っとるんです。どうです、ジューさん。出てくれませんか？　もちろん、愛のシーンは本物でいきます。愛の記録を作ったあなたなら、話題性も抜群、ヒット間違いなしですぞ」
……やれやれまた愛の記録か……でも、この様子じゃ、記憶は戻っていないみたいね。それにしても、ケルナグールが画商で、しかも映画製作とはね……
ジーラスが口をはさんだ。
「ドマさん、冗談はよして下さい。ジューさんは特殊患者として追われている身ですぞ。それに、もっと大事なことをやって貰わねばなりません」
「いやあ、済まん。そうだ、そうだった。それにしても美しい……」
ケルナグールに〝美しい〟を連発され、レミーは背中がむずがゆくなった。もちろん、昔、ブンドルに言われた時も少しは感じたけれど、今度はケルナグール。
……わたしって、よほど変わった殿方に好まれるらしいな。鏡、見なおそ……
そんなレミーとケルナグールにジーラスが、
「そろそろ、お茶の時間ですな。どうです、お茶でも楽しみながらゆっくりと……イル、わしはジャスミンスメルとビスケット食品」

ね……

……はあ、ニワトリ型ミート油あげ味、早い話がフライドチキン。好みだけは変わっていないの

「酒と、つまみはニワトリ型ミート油あげ味食品」

「分かりました……ドマさんは？」

「クリーム入りコーヒー味と、出来たらクレープ味食品を」

「さっそく合成します。ジューさんは？」

ニワトリ型ミート油あげ味食品を豪快にむさぼり食うケルナグールを横目に、ジーラスはレミーと話を続けていた。

「あなたの仕事は、デノアの弱点を探し、勝つ方法を探すこと……欲しい物は何でも言って下さい。カードなしでも芸術保護エリア内での生活費用は、支局調整員の五倍保証しましょう」

ジーラスの言葉に、ケルナグールは呆れた顔で聞いた。

「それほど、この人が必要なのか？」

「一種の投機だ。もしクーアノアが外の村の連中のものになったら、救世主デノアの機構を一体誰が動かせる？」

「そうか……グハハハ、そういうことなら、わしもこの人に少し投資させてくれ。ことがうまくいったら、映画出演の条件つきでな。救世主デノアを動かす女の愛の姿、こりゃ大ヒットじゃ」

レミーはうんざりしながら、話題を変えようとドマに聞いた。

「映画の話はともかく、それよりドマさんは、どうして外の人達を援助するんです？」

「そりゃ、わしの売る美術品はクーアノアの外から運んでくるからですよ。外の連中の協力が必要ですからな」
「外から……」
と、そのとき、扉の外が騒がしくなった。
「ドマの野郎、来てるだろう」
「やめて下さい」
「御主人様とお話し中です」
扉がバタンと乱暴に開いた。
召し使いに両手にしがみつかれた男が飛び込んできた。
「邪魔なんだよ」
男は、召し使いを投げ飛ばすと、いきなりテーブルにナイフを突きさした。
「やい、ジーラスさんよ。あんた、ドマさんから、あの絵をいくらで買った？」
「ん？　この男は？」
ドマに聞くジーラスに男は言った。
「あの絵を遠い所から運んできた者だよ。言いな、いくらで買った？」
「一千万……」
「ほう一千万ね……ドマさん、そりゃないんじゃないの？　あんた、俺には二百万しか払ってねえ」
男はさっきから、穴があくように自分を見つめているレミーに気付いた。

「なんだよ、ねえちゃん。そうか、俺の顔がそんなに気にいったのかい。愛したかったら相手するから後で電話しな」
「あなた次第ね……」
「俺次第？　どういうこってえ。俺は俺、他には何もない、一匹狼の運び屋ロク・ナシーヤたあ俺のことよ」
「狼なのはよく分かるわ」
ジーラスは、ふたりに聞いた。
「知り合いかね」
「女は一杯知っているがな、この女は知らねえな」
「そう、そうなの……」
レミーは残念だった。泣きたいぐらいに。
……まだこの人も記憶が戻っていないのか……クーアノアでも一匹狼……のキリー・ギャグレー……あなたにせっかく会えたのに……
ロクという名のキリーはケルナグールの頬にナイフをつきつけた。
「あんたねえ、俺の力が借りたいんだろう」
「借りたい」
「もっと、いろんな物、運んで欲しいんだろ」
「欲しい」
「じゃ、あと三百万だしな。せめて、五分五分じゃねえと、やりきれねえぜ」

「分かった。君のカードに振り込むよ」
「カードじゃダメだ。足がつく。闇の金で三百万、耳をそろえて出しな」
ケルナグールはしぶしぶ、懐からダイアモンドのような宝石を三十個出した。
キリーは、宝石をポケットにねじ込むと、
「今後の仕事は五分五分……いいな」
「いいとも……」
「OK、あんたを信じるぜ。もともと友達だからな」
「なにが友達だ。雇い人と雇われ人の関わりを忘れるな」
「おらあ、友達のつもりだが、へいへい、分かりました。貰うもの貰や、あんた、俺の親分だ。どもども、お忙しいとこお邪魔しました。あ、それから、彼女、俺を愛したかったら、満月の晩には、狼の遠吠えが聞こえるから窓を開けな。狼男がロマンチックな愛を花束にして君に送るぜ」
「考えとくわ。狼のたかりやさん」
キリーは肩をすくめるとスタスタと出ていった。
「ドマさん、払うものは払わなくてはいけませんな」
ジーラスがケルナグールに言うと、
「面目ない。グハハハハ」
笑い声は普通りだ。
ジーラスはレミーに向きなおり、
「とんだ邪魔が入りましたが、ジューさん、我々の仕事をやってくれますね」

「わたしから支局調整員の肩書をとったら、ただの女ですものね。食べるためにはやるしかないのかも。ただし、デノアに弱点があるかどうか、やってみなければ分かりません」
「それでも結構です。イルがあなたを手伝います。きっといい助手になるでしょう」
レミーはイルを見つめた。美しい顔とプロポーションは、ファッションモデルや映画スターならともかく、どうみてもコンピューターというタイプではない。
レミーの気持ちを察したかのようにジーラスは言った。
「彼は病弱で、小さなときからこの宮殿に閉じこもりがちで、友達がいませんでした。コンピューターが唯一の話し相手でした。十八歳とはいえ、こういう男ですから、あなたの愛する相手にもならない。助手としてもってこいだと思いますが……」
「考えておきますわ。それより、私は一体どこに住んだらいいのかしら」
「あなたは何かと有名になりすぎました。芸術保護エリアのどこかに住むとしても、思考情報局の調査員の目に止まりやすい。かといって、外の村では、ご存知のように穏健派と強硬派の確執があって、安心してあなたを置いておけない。どうでしょう。いっそのこと、この屋敷に住んだら……きっと満足する部屋があるでしょう。それにコンピューターの機材や資料も手に入りやすい」
「お任せしますわ」
ジーラスは頷いてイルに言った。
「ジューさんをお部屋に……」
イルは、レミーを宮殿の三階へ案内した。
その部屋は、ブルボン王朝の寝室を思わせる、広くて豪華なものだった。

「お気に召しましたか？」
「なんだかベッドの他は、見渡すかぎり絨毯で、地平線が見えない感じ……」
「大丈夫です。デノアの弱点を見つけるためにコンピューターを入れますから、これでも狭くなりますよ」
「仕事場には近い方がいいでしょう？」
「そりゃ、まあ、いえてる」
「ここでやれっていうの？」
「さっそく必要な装置を取り寄せます。注文を言って下さい」
「明日までにリストアップするわ」
　レミーは部屋のマントルピース（暖炉）の上の肖像画に気づいた。
　イルと並んで、少し若い感じのジーラスが描かれていた。
「これ、ジーラスとあなたね」
「いいえ、御主人様と私の母です」
「お母さん？」
「御主人様の恋人でした。でも十五年前、火事で亡くなりました。私も、そのとき、顔が焼け爛れて……御主人様は、私の顔を整形して下さいました。人の前に出られる顔になれたのは御主人様のおかげです」
　レミーは、イルの母の顔とイルを見比べた。あまりに似ていた。
「……失礼なこと聞くようだけど、あなたの子供のころの顔は？」

「写真は火事で焼けて一枚も残っていません。でも母の子ですから、母に似ていて不思議はないでしょ?」
「え、ええ……」
「それより、僕、うれしいんです」
「え?」
レミーは、イルがいきなり、「僕」という男言葉を使ったのに驚いた。
「支局調整員のあなたのお手伝いできるなんて夢みたいです。僕、ず〜っと御主人様のそばにいました。友達もいないから、僕、コンピューターと遊びました。そして、僕、いつか、救世主デノアと友達になれる支局調整員になりたいなって思っていました」
目を輝かして語るイルは、いつもの清楚で、美しく、慎しみ深い女から、夢中で友達と遊びについて話をする腕白坊やに変わっていた。
レミーは、そんなイルを見ると、イルの顔を作ったジーラスに対して、いい知れぬ怒りが湧いてくるのだった。
洗脳から醒め、クーアノアの異常を目の当たりに見てきたレミーは、一見、もの優し気な紳士然とした実業家タイプのジーラスの中にも、狂気をひしひしと感じた。
ジーラスは、死んだ恋人の顔をその息子に植え込み、女として育てたのだ。
恋人の姿を残したいがために、ひとりの人間の容姿と性格を作る。それは、自分の受けた洗脳よりも、無惨で残忍な、人間無視の行為じゃないか。

「ここはなんて世界なんだ」
しかし、生き抜いていかねばならない。
生き抜くつもりだ。
それがデノアの弱点を探すより大切な、今の私の仕事なんだ。

第六章

私の銃はマグナム44口径

宇宙への希望

デノアの弱点を見つけ出し、デノアを出し抜く作戦を作りだせるだろうか？　レミーは、その夜、ブルボン王朝風の、五人は寝れるような大きなベッドの上にあぐらをかき、ミニコンピューターで必要な機材をリストアップしていた。

もともと、レミーのコンピューター知識は、洗脳によって与えられたものだ。デノアが、自分の不都合になる知識をレミーに教えているとは思えなかったが、やるだけのことはやるつもりだった。

レミーは、クーアノアの世界から被った恥辱を許せなかった。

そして、それがデノアの指示によって行われたものなら、デノアに一泡吹かせなければ納まりがつかなかった。

クーアノアを禁断地区の人達が占領出来るかどうかなどということはどうでもいい。

……騙された女の怒りは怖いんだから……きっちりおとしまえをつけてやる……

勝算などまるでなかったが、相手が巨大であればあるほど、負けん気が湧き上がってくる。レミーは燃えていた。

「燃えてはいるけど、熱くなっちゃだめ。コンピューターゲームは、醒めてなきゃ負ける」

自分に言い聞かせながら、レミーはミニコンピューターのキーボードを叩いていた。

その時、ベランダの外で物音がした。

「？」

コツン、コツン、小石のような物がベランダにぶつかる音だ。

レミーはベッドから降りると武器になりそうな物を探した。記憶が戻って以来、レミーはほとんど素手で戦ってきた。

「銃があったらなあ……」

レミーは何度そう思ったことだろう。レミーは武器になりそうなものをさがした。そして、マントルピースの火かき棒を持つと、用心深くベランダに近づいた。

ベランダの窓を開ける。

月も星もでていない、漆黒の闇だ。

「だれ？　誰かいるの？」

「ぶっそうなものはご免だぜ」

背後から男の声がして、いきなり火かき棒がレミーの手から奪われた。

次の瞬間、火かき棒を取った男は、レミーの背負い投げで部屋の中に投げ飛ばされた。

投げ飛ばしながら、レミーはハッと気付いた。

今の台詞は、クーアノア語じゃない。ブロンクス訛りの英語――。

飛ばされた男は、空中で一回転して床の上に立った。

「相変わらずだな、レミー。お手やわらかに頼むぜ」

案の上、キリーだった。

「今日は満月じゃないはずだけど……」

「相手がかわいこちゃんなら、毎日がフルムーンさ」

「キリー、記憶は？……」

「俺ァ、ブロンクスの狼、昔も今もな……レミー、苦労したらしいな」

キリーの台詞をさえぎるように、胸に飛び込んだレミーは、思いっきり再会の口づけをした。

キリーは目を白黒させ、
「フーッ、強烈、アトミックキッス……俺、レミーとのキスは、初めてじゃないかな」
「そうだっけ？」
「ね、もう一度。今度はじっくり味わっちゃうから……」
「そんな言い方されて、女が二度目をすると思う？」
「駄目か……やっぱり」
「いいわ」
「わっ、あんがと」
ふたりはじっと見つめあって、そして、どちらからともなくクスクスと笑い始めた。やがて、プーッとお互い吹き出して、
「だめだ、こりゃ……まっ、お互い生きてりゃめでたい」
「でも、さっきはどうして知らないなんて」
「なにせ、ケルナグールのおっさんの記憶が戻ってないし、クーアノアの連中には、俺達が他の星の人間だってことは知らせない方がいいからな。俺達がエイリアンだと分かったら、連中の態度だって変わってくる。いいこたあないぜ」
「真吾に会ったわ」
「野良仕事の仙人か……」
「知ってるの？」
「会っちゃいないがね。あいつにはあいつの生き方がある。それに記憶が戻っているかどうか分か

らない奴に、用もないのに会うのはお互い危険だからな」
　確かにそうかも知れなかった。レミーにしても、記憶の戻っていないまま、いきなりキリーや真吾から話しかけられ、憶えてもいない地球での過去を聞かされたら、思考情報局に訴えたかもしれなかった。
　最初キリーは、小説家のロク・ナシーヤとして洗脳され、芸術保護エリアに住んでいたという。
「小説家？」
「笑わせるぜ。それも大ベストセラー作家だとさ……俺も当然、何冊もベストセラーを書いたつもりになってたさ。さて、新作を書く段になった。こいつが書けない……当たり前だよな。けど、俺は深刻に悩んだよ。こんなスランプは初めてだ。昔は、あんなにスラスラ書けていたのに……ああ、ロク・ナシーヤの作家生命はこれで終わりかってね。書けねえ作家ってのは酒や薬に溺れるっていうだろ。で、まあ、俺も御多分にもれず、溺れちゃったわけね。そうしたら、ある日、夢を見たわけ……暗黒街に生きる孤独なやくざの夢だった。いい話でね。夢で見た話を自伝風なタッチの小説にして書き出したわけ……わりとスラスラ書けるし、その日から夢の続きも見れるようになった。そのうち、酒と薬とでおかしくなった頭で、小説の主人公が自分なのか、自分が小説の主人公なのか、わけが分からなくなっちまった。で、小説が完成した時にゃ、主人公きどりで、小説のシーン通りやってみようと思い出した。警官に追われるシーンでな、二階の窓を破って飛び出す所を実演したんだ……バッチリ着地出来るはずが、そのまま道へドスン、尾骶骨を骨折したが、かわりに記憶が戻ってきたってわけ……本の名前は〝クーアノアの狼〟、レミー、読んだかい？」
「いいえ、でも書き出しは見当つくわ――俺には何もなかった。我が輩は、ほとんど狼である。名

前はまだない——あなたの自伝、〝ブロンクスの狼〟の書き出しよね」
「それぞれ、あは……俺、名前と場所だけかえて、同じ自伝を知らずに二度書いちゃった」
「売れたの、その本」
「売れないと思うだろ。それが売れたわけ。地球の時の倍も……やっぱ、ここの奴どうかしてるのかな。それとも、地球の奴らが俺の文才を理解できんのかな？」
「何はともあれ、売れておめでとう」
「あんがと。だけど、もう二度と小説なんて書けそうもないしな。で、生き抜くための運び屋稼業さ。俺は外の世界を駆けずり回った。それでだ、レミー」
キリーは真顔になってレミーを見つめた。
「レミーに見せたいものがある。三日ほどつきあえないか？」
「三日間？……」
「ああ、外の世界で、ちょっと面白い物を見つけたんでね……君の力も借りたいしな」
レミーに断る理由はなにもなかった。
「……わかった。なんとか都合をつけるわ」
「OK、クーアノアの外のこの場所に、明後日の正午……」
キリーは、地図をレミーに手渡した。
「さて、狼は赤ずきんちゃんを食べそこなって、これにて退散……」
「もう、行っちゃうの？」
「運び屋っていえば聞こえがいいが、早い話が泥棒のようなものさ。狼は夜が忙しい……レミー、

フフフ、また会おうぜ」

「キリー、シーユーアゲイン」

キリーはニヤリと笑って、闇の中へ消えて行った。

お互いの別れの決まり文句を、もう一度聞けるとは……レミーは無性に嬉しくなって、ポンとベッドの上に飛び上がると、前にも増して軽快に、ミニコンピューターのキーボードを叩き始めた。

*

イルに部品のリストを渡したレミーは、部品が調達されるまで、クーアノアの外を見たいとジーラスに申し出た。

レミーが宮殿の外に出ることに最初は渋っていたジーラスだったが、レミーに、

「欲しい物は何でも言って欲しいと言ったのは、あなたでしょ。わたしは、外の空気の中で、ひとりでいる時間が欲しいの。仕事の前に作戦をいろいろ考えたいし……」

そう言われては、許可しないわけにはいかなかった。

*

赤・緑・黒、どぎつい斑模様を刻々と変化させながら、汚れた海がどこまでも続いている。

レミーを乗せた、キリーの操縦する垂直離着陸超音速ジェット機は、海上百メートルの高さを、超音速の衝撃による水しぶきを上げながら飛び続けていた。

レミーの貰った地図の場所に、キリーは超音速ジェット機を隠し持っていたのだ。

「どこでこんなものを手に入れたの？」
「かっぱらったのさ。外のアンドロイド達からな。記憶を取り戻してまず不思議に思ったのは、俺達がこの星に来た時には、飛行機があったのに、ほら、クーアノアには二メートル以上は高く飛べないエアカーばっか。他には、まるっきり飛べるマシンがないじゃねえか」
キリーに言われてみれば確かにそうだった。
「そりゃ、デノアにしてみりゃ、空高く飛ばれて、クーアノア以外の世界があることを皆に知られちゃ困るってのは分かるけどな……俺は外の世界を歩き回って、アンドロイド達の飛行場を探した。そして見つけて、こいつを即、いただき」
「それにしても、もうちょっと高く飛べない？　危っかしくて」
「これ以上高く飛ぶと、アンドロイド達のレーダーに見つかっちまう。俺の腕を信じなさい。いままでだって失敗したことはないんだ。で、まあ、俺は世界中を飛び回った。いろんなことが分かってきた」
「ずばり聞くわ。ここは地球じゃないの？」
「いい線だが、違うね。だが、地球と同じような星だったことは確かだ」
キリーは、カセットフィルムを取り出し、ビジョンに入れた。
「これが、俺が撮りまくったこの星の写真だ」
ビジョンには、廃墟（はいきょ）になったニューヨークの、パリの、モスクワの、東京の、特徴ある建物が写っていた。
「これのどこが地球じゃないっていうの？」

「よく見ろよ。確かに建物は似ているさ。でも、ニューヨークの貿易センタービルが、エンパイヤーステートビルより低いか？　パリのエッフェル塔が、シャンゼリゼ通りに建っているかい？　新宿副都心が、お濠に囲まれた森の中に建っているかい？」

「あっ……」

　そう言われれば、確かに建物の形はともかく、位置や地形は違っている。そして何より、看板や広告の文字が地球のものではなかった。

「そして、これがこの星の地図だ」

　ビジョンに世界地図が写し出された。それは地球には似ていたが、大陸の海岸線などはかなり違っていた。

「どういうこと？」

「この星は、恐らく、地球と全く同じタイプの星だったんだ。同じように生き物が進化し、人間が生まれ、同じような歴史と文化が生まれたんだろう」

「でも、こんなに似るってことがある？」

「さあね。この星には、シーザーもナポレオンもヒットラーも、そういう名の奴はいなかっただろう。でも、それに代わる誰かはいたかもしれない」

「ダ・ビンチやミケランジェロはいなくても、それに代わる才能はいたってわけ」

「この星はね、地球とそっくり同じタイプの人間が生まれ、そっくりの文化を生み、歴史を歩んできた、地球のコピーのような星なのさ。ただし、その終わり方が違っていた。この星がこんなになってしまったのは、これだけ建物が残ってるところを見りゃ、核戦争なんかじゃない。おかげで、

世界中の美術品や絵もそっくり残っていて、俺の商売が成り立つ」
「真吾も、この星になにか特殊な異変が起こったんじゃないかって言ってたわ」
「ま、それは俺にはあんまり関係のないことさ。ただ、核戦争で破壊されていない以上、この星に絶対残されている物があるはずなんだ。俺はそいつを探して、とうとう見つけた。さあ、目的地に着いたぞ」

超音速ジェット機の前方に赤茶けた島が見えてきた。その島にはひび割れた滑走路があった。

島に降りたふたりは、滑走路わきのコンクリートの建物に入っていった。
そこにはエレベーターの入口があり、無惨に爆破されていた。
「ひどいもんね。戦争でもあったの？」
「俺がやった。どうしても中へ入りたかったんでな」
レミーは、エレベーターの縦穴を覗いた。どこまで深く続いているのか見当もつかない。
「省エネのため、人力でお降り願います」

ふたりは、エレベーターのケーブルを伝わって地下へ降りていった。
キリーとレミーは、二時間ほどかかって、やっとエレベーターの縦穴の底に辿りついた。
「見せたいものがあるって言ったって、こんな真っ暗じゃ……」
「おいよ。自家発電のスイッチオン」

キリーは、この星の秘密をさぐり、宇宙船を発見していた。

キリーが壁のスイッチを押すと、かすかなモーター音がなり、次々に明かりが点灯されていった。
そこは、巨大な格納庫だった。そして何より目を見張ったのは、その格納庫の中に、明らかに恒星間宇宙飛行を目的とした、光子宇宙船がどっしりと腰をすえていたのだ。
「これは……宇宙船？」
「この星は、俺達の地球よりはるかに科学力は進んでいる。そんな星の人間が宇宙を目指さないはずはないだろ。おそらく、この宇宙基地の連中は、これを発射する間際になって、何かの異変に襲われた。こっちへ来てくれ」
キリーは、レミーを格納庫の中の指令室に案内した。
宇宙船を見下ろすガラス張りの指令室のデスクに、制服を着た男がひとり坐っていた。恐らく、そこに百年以上も坐っていたのだろう。完全に白骨化した顔は、無念そうに宇宙船を見つめていた。
「たぶん、この基地の司令官かなにかだろう。頭をぶち抜いて自殺している。そして、これが机の上に置いてあった」
キリーは、便箋と金色に輝く円盤を見せた。
「恐らく、遺書と、この宇宙船の動かし方を記録したディスクだろう。残念ながら、クーアノア語じゃない」
「クーアノア以前の言葉なのね」
「ああ。この星は、地球のように昔はいろんな国の言葉があったらしい」
「今はそれが、アンドロイドが使う言葉とクーアノア語だけ」
「レミー、これ解読してくれないか」

「そうね……あの宇宙船を動かせれば……」
「少なくとも、この馬鹿げた星からは、おさらばできる」
レミーは頷くと、便箋と金色の円盤を受け取っていた。
「私にもお願いがあるんだけど」
「なんだい？」
「銃が欲しいの。これから先、何が起こるか分からないし。女が素手で身を守るのは楽じゃないわ。もう、あんな思いはたくさん」
「今、女向けの銃は手元にはないんだが」
レミーは、キリーが腰に下げている拳銃を指さし、
「それでいいわ」
「おい、こいつは、地球で言ったら、44口径のマグナム級だぜ。女の力じゃ射った瞬間、肩の骨が砕けちまわ。そのうち、手ごろなレーザー銃を用意しとくよ」
「これでいいわ」
レミーは、キリーの腰から拳銃を抜くと、両手で銃を構え、両足をふんばり、腰を落としていきなり発射した。
壁にかけてあった額が吹き飛んだ。
レミーはニッコリ笑ってキリーに言った。
「ね。よろしいんじゃありません？」
キリーは口笛を吹いて言った。

「俺だけは狙わないでくれよな」

＊

ジーラスの宮殿に戻ったレミーを待っていたのは、広い部屋を所狭しと埋めつくすコンピューターだった。
しかも驚いたことに、細かい部品の寄せ集めにもかかわらず、イルの力で見事に組み合わされ調整されていた。
「気に入っていただけたでしょうか？」
おどおどとレミーの顔色を窺うイルに、
「負けそ〜、あなたなら今すぐ支局調整員になれるわ」
「助手に使っていただけますか」
「もちろんよ。本当はこっちが助手になりたいくらい」
本音だった。何しろ、レミーにとってのコンピューター知識は、洗脳によって強引に教え込まれたものにすぎない。メカは友達、コンピューターは友達。そんな感覚で機械と触れ合える子供達には、とうてい太刀打ち出来ないのは、昔から痛いほど分かっていた。だが、イルは十八歳の青年なのだ。もっと他の物に興味を持っていい年頃だ。
「ほんとですか？　私、ジューさんのお役に立てて嬉しいです」
コンピューターを誉められ、体中から喜びをあふれさせるイルを見ていると、レミーは痛々しかった。

そしてもうひとつ、レミーは気掛かりなことがあった。わずか三日間の間に、ジーラスはどうやって部品を集めることが出来たのか——。

外の世界を探し回ったのか……それにしても簡単に手に入る部品とは思えなかった。

＊

「いよいよ、彼らは活動をし始めたようだよ」

……このかったるい喋り方はなんとかならんのか……

局長は、いらいらしながらデノアのディスプレイを見つめていた。

もともと、局長自身も、静かでゆったりとした口調なのだが、彼の持って回った言い回しは、短気でがさつでまくしたてる連中の会話の中でこそはえる。

だが、デノアのようなスローテンポな相手とのやりとりでは、まだるっこしくて仕方がない。

……所詮、デノアもメカにすぎぬ。会話のリズムの妙など分かるはずもないか……

などと思いながらも、自分は自分のテンポを決して変えようとしなかった。

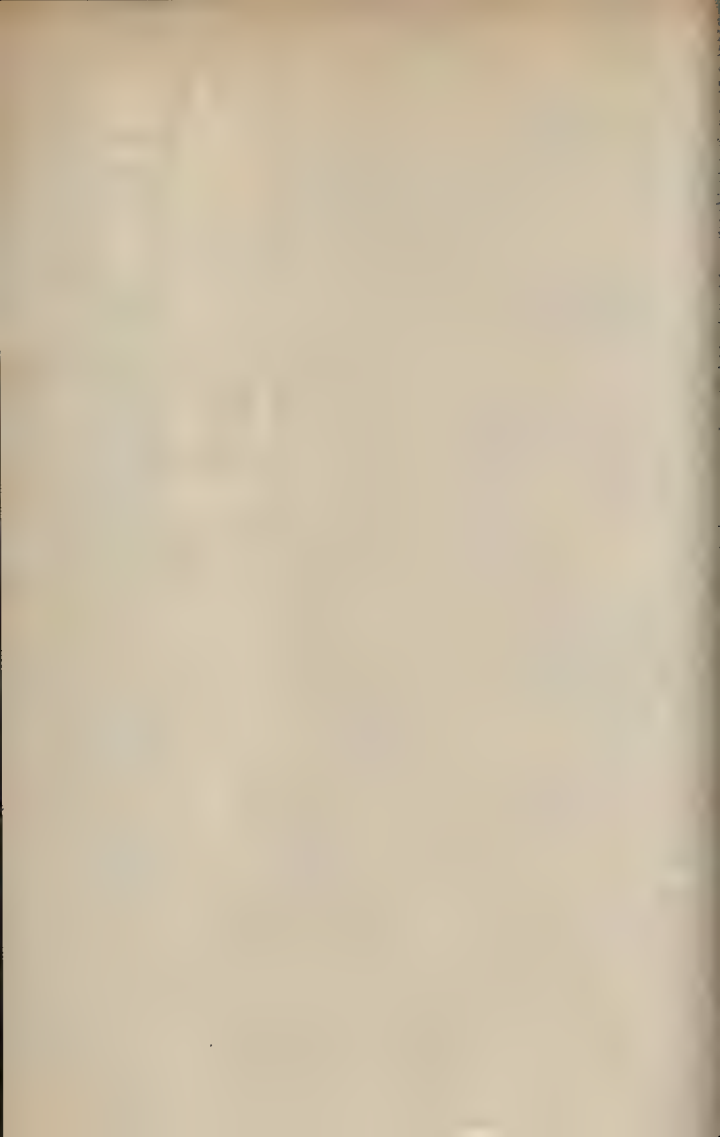
「〝活動を始めたようだよ〟はないでしょう。ここ三日間に、禁断地区のゲリラ達がデノアの支局を襲った件数は三十件を超えます」

「三十二件だよ、正確に言えばね」

「そして、死傷者は、ゲリラと市民を含めて三百人を超えた」

「盗まれた部品は、三万三千パーツだよ」

「なぜ、あなたはそれを許したのです。あなたならここまで犠牲者を出さずに、ゲリラを食い止め

ることが出来たはずだ」
「どういうことかな」
「テレビカメラですよ。あなたが支局警備用に使っているカメラには、レーザー砲が付属されている。それを、この私が知らないとでもお思いですか？」
「私がゲリラを撃てばよかったと言うのかね……私は救世主であり、殺人者ではないのだよ」
「その結果が三百人を超える犠牲者だ……」
「私は人を殺さないよ。私は人を傷つけないよ。それは人間のすることだよ……いずれにしても、近いうちに彼らの攻撃が予想されるよ。住民の安全は、住民が守るべきだよ。住民は各自、武器を携帯するように思考情報局から指令すべきだよ」
「住民に武器を持たせろですと？」
「そうだよ。女も子供もだよ。自分の身は自分で守らなければならないのだよ」
「あなたの指示とあれば、仕方がありませんが、武器による事故が起きても知りませんよ」
「私は、クーアノアの住民を信じるよ」
「私は、あなたが殺し合いを見て楽しんでいるとしか思えないのですがね……」
「私には、楽しみも悲しみもないよ。ただ、人間を良き方向に導こうという救世主の悩みしかないよ」
　デノアのディスプレイから光が消えた。
「人間を良き方向にか……クーアノアの住民も住民だが、救世主も救世主だ……狂っている！」
　局長は吐き捨てるように呟いた。

第七章 私の戦いが始まる

殺世（コンピューター）」主を泣かすには

「愛とは何か？」
レミーは、イルの調整したコンピューターに、いつもの問いを打ち込んだ。
イルは固唾をのんでディスプレイを見つめている。
「愛とは能動的因子を持つ生体同士の錯覚である」
見慣れた答えがディスプレイに写し出された。
レミーはフッと息を吐くと、イルに微笑んだ。
「OKよ。これで、このメカの特性はデノアと同じになったわ。あなたが作ったのよ。デノアの子供を……」
イルがレミーに聞いた。
「愛って錯覚なんですか？」
「えっ？」
「私、愛したことも愛されたこともないから、分からないんですけど、愛ってどんな感じなんですか？　ジューさんは愛の記録を持っているから、よく御存知でしょう？」
……また、愛の記録か……
レミーは、しかし怒らずに優しく言った。
「あれは愛なんかじゃないわ……でも愛は錯覚でもない……確かにあるもの……ほんとは私もよく分かんないけど、デノアの答えは好きじゃないな」
「難しいんですね」
「簡単だけど、よく分からないものかもね……あなたもいつかきっと見つけるわ」

「見えるものなんですか」
「ハートでね」
レミーは、再びコンピューターのキーボードに向かった。
「ハート……」
イルはレミーの後ろ姿をじっと見つめていた。

その日からレミーの戦いが始まった。
デノアの弱点を見つけること……それは、コンピューターのソフト作りに似ていた。
デノアをゲームの相手に仮想して、それこそ五目並べや麻雀（マージャン）はいうに及ばず、あらゆるゲームを戦ってみて、人間の勝てるゲームを見つけ出し、それを分析し作戦をたてるのだ。
レミーとイルは、クーアノアに存在するゲームはいうに及ばず、レミーが知る限りの地球のゲームを探したが、デノアに人間が勝てるゲームはなかった。
さいころを振るような偶然によるゲームですら、確率を武器に勝負するデノアにはかなわなかった。
弱点は見つからない……仮にデノアに弱点があったとしても、それが弱点としてインプットされていない。
弱点などあるはずのない完璧（かんぺき）なコンピューターだと、デノア本体が自信を持っているのだ。
これが、二カ月にわたって部屋に閉じ籠（こ）もり、コンピューターを操作して得た答えだった。
弱点が見つからぬ以上、残る手段は、クーアノアの状況に即した攻撃作戦プランを立て、コンピ

ューターで架空に戦わせてみて、その作戦に勝利の可能性があるかどうかを探るよりなかった。
レミーはジーラスの部屋を訪れて言った。
「どんな作戦でも構いません。クーアノアを占領する作戦とデノアを倒す方法を考えついたら、私のところへ持ってきて下さい。多ければ多いほどいいんです」
「分かりました。村の人達からも作戦プランを賞金つきで募(つの)りましょう」
その日から連日、村の集会場で作戦会議が開かれた。
デノアに勝てる作戦が出来なければ、クーアノアの占領もデノアとの和平交渉もない。
いつもは口もきかない穏健派のカットナルも強硬派のグロスも、額を付け合うようにして作戦を考え始めた。
レミーも、一日に三つの作戦を作り出すことをノルマにした。レミーは机の上の戦いに熱中した。
……デノアなんかに負けてたまるか……人間は……人間は……あんな奴(やつ)の自由にされてたまるか……
毎日毎日、山のような作戦プランがレミーの部屋に届けられた。
レミーとイルは、その作戦をコンピューター独自の言語、デノア語に翻訳して、コンピューターに送り込んだ。
昼夜を徹した作業が続き、作戦の数は千を超えたが、ディスプレイに現れる文字は決まっていた。
「作戦プランNo.〇〇〇……成功の可能性……ゼロ」
その数は、やがて一万を超えた。
ディスプレイは絶望的に〝成功可能性ゼロ〟の文字を描き続けた。

一方、宇宙船の基地から持ち帰った遺書と金属の円盤の翻訳も、イルの目を盗みながら進んでいた。

遺書にはこう書いてあった。

「事態は切迫している。基地に住む二千人の人間の中から、わずか十人を選ぶのは、私には不可能だ。それに今のクーアノアを見れば、クーアノア人は宇宙に船出する資格のある人類だとはとても思われない。わたしは独断で、この基地を閉鎖する。いずれにしろ、我々の死滅はすぐそこまで迫っているのだから……。

太陽系外宇宙計画「司令官シトロハン・ヒジトー」

やはり、この星は何か突然の異変に襲われたらしい。そしてあの基地で、宇宙船に乗って逃げられるのは、わずか十名……司令官は、その選択の重圧に耐えかねて、宇宙船を旅立たせずに自殺したらしかった。しかし、宇宙に進出する資格がないとはどういうことなのだろう。

遺書の翻訳はともかくとして、金色の円盤は手こずった。レーザーディスクの一種で、イルの目を盗みながらコンピューターの部品でなんとか再生装置を作ったものの、肝心の宇宙用語や、特殊な部品用語の意味が分からない。

元は機械音痴のレミーである。遅々として翻訳は進まなかった。

作戦プランは五万を超えた。

レミーもイルもほとんど部屋から出なかった。

夜遅くまでキーボードを叩く音が聞こえ、あとは疲れ果てて、泥のように眠る寝息しか聞こえない日が何日も続いた。

イルは、レミーの助手をよくやってくれていた。本当はレミーの数倍も能力があるのに、決してでしゃばらず、食事や、お茶をかいがいしく運んでくるのだった。
疲れきって、仕事の途中で机にもたれて寝ていると、いつの間にか肩に毛布がかかっている日もしばしばだった。レミーはイルの心遣いに、クーアノアの他の人間達にない暖かさを感じた。

＊

ある日、レミーはイルと食事をしながら、宇宙に飛んでいった少年の話をした。
その少年は、ある星で子供のころからメカを友達と思い、やがてメカと気持ちを交わすことが出来るようになり、戦いのたびに壊されるメカに戦いを放棄させ、その星の人間達にも平和をもたらし、星の代表としてビッグソウルという宇宙の意志に会うために飛んでいった。
「素敵なお伽噺ですね」
「お伽噺……そうね、そうかもね」
「レミーさん、その少年のメカに対する気持ちが愛なんでしょう」
「えっ？」
「それなら分かります。僕にも愛が……」
「その子の気持ちはメカに対してだけじゃないのよ。その星にある全てのものを愛していたの」
「人間も？」
「ええ、人間も……」

「レミーさん、私にも愛が見つかりそうです」
「きっと見つかるわ」
いつものレミーなら、こんな乙女チックな会話には、背筋が痒くなってしまうのだが、なぜかイルに対しては、似合うような気がした。

作戦プランは十万を超えた。
相変わらず答えは〝可能性ゼロ〟だ。
まだまだインプットしなければならない作戦は山のようにある。
ディスプレイを見つめるレミーの瞳は重かった。
レミーは疲労の極に達していた。
……眠い……まだまだ今日のノルマは終わっていないのに……
レミーはイルに声をかけた。
「お願い、覚醒剤を持ってきてくれない。思いきりパッチリする奴……まだ作戦プランが残っているの」
イルは頷いて部屋の外に出ていった。
レミーは目をしばたたかせて、キーボードを叩きながら再びディスプレイを見つめる。
〝作戦プランNo.１０２８９１〟急激に眠気が襲ってくる。
「だめだ、こりゃ」
レミーは、気を失ったように机上に突っ伏した。

その時、レミーの指は、キーボードの何も書かれていないボタンを押していた。
字のない、カーソルがディスプレイの上を走った。
イルが、覚醒剤のアンプルを持って入ってきた。眠りこけているレミーを見て微笑むと、ベッドから毛布を取り肩にかけてやった。そして、部屋の隅の、いつも坐るソファに、レミーを起こさないよう忍び足で行こうとしたその時、何かに気付き、後ろを振り返った。
そして、声にならない叫びをあげた。
〝作戦プランNo.１０２８９１、可能性８・９％〟
ディスプレイにその文字がくっきりと浮かびあがっていた。
イルに起こされ、レミーの眠気はふっ飛んだ。
「どれなの？　どのプランなの？」
レミーはコンピューターの記録を呼び出した。何も記録されていなかった。いわば、白紙の作戦だった。
「こんなことって？」
「もう一度、やってみたら」
「ええ」
結果は同じ〝可能性８・９％〟
「同じですね」
「……どういうことなの？」
レミーは倒れ込むようにベッドに腰をかけた。様々な考えが頭の中を駆け回る。

レミーはハッと顔をあげた。
「待って……もしかしたら……」
レミーは、キーボードに駆けよって、マシンガンのように、頭に浮かんだ作戦を打ち込んだ。
答えがすぐに返ってきた。
〝可能性……8・9％〟
「やっぱり、そうなんだわ」
「どうしたんです？　何が分かったんです？」
「勝手に攻撃しろって作戦なの……時間も決めず目標の場所も決めず、一切、白紙で……ひとりひとりが勝手に攻撃すれば、道が開かれる。個人個人の本能のままにやる。デノアは人間の本能までは正確に摑んでいないんだわ。だから人間が怖い。だから洗脳して支配しようとする」
レミーは、続いてキーボードを叩いた。
「さらに、理性を捨て本能を剝き出しにするために、薬やアルコールを使用した場合は……」
〝10・2％〟
答えの可能性は跳ね上がった。
「勝てるわ、デノア、あなたに……」
だが、そう呟いた後、レミーはこの作戦の持つ意味に愕然となった。
本能のまま戦う。人間性の欠落したクーアノア人が本能の赴くままに戦えば、どんなことが起こるか。レミーの脳裏にそうなった時の地獄絵図が浮かんだ。
「イル……黙っていてね」

「えっ？」
「今のことは絶対誰にも言わないで。お願い」
「はい、レミーさんがそう言うのなら……口が裂けても言いません。それに……」
「それに？……」
「いえ、なんでもありません」
……仕事が続いていることにすれば、ずっとレミーさんと一緒にいられますから……
イルはそう言いたかったのだが、声には出さなかった。
レミーは、ディスプレイの10・2％の数字を見つめ、呟いた。
「危うく、パンドラの箱を開けるところだったわ」
だが、この部屋のイルとレミーは、ジーラスの隠しカメラで絶えず見張られていた。
ふたりに男女の関係は起こり得ないと自分で言いながらも、ジーラスは嫉妬深い目で監視を続けていたのだ。

＊

男の目は黄色く濁り、明らかに薬に神経をやられていた。
男は肩にバッグを掛け、クーアノアHブロックの公園のベンチに腰をかけていた。
男はさっきから呟き続けている。
「街は嫌いだ。街は嫌だ」
男は大きな欠伸をすると立ち上がり、同じ言葉を呟きながら公園を出て商店街に入った。

狂った男がクーアノアを襲う。しかし、デノアは沈黙している。

監視カメラが、一応男をチェックした。

……シピ・ケロ、グレーカードQ・991218芸術保護エリア在住、シンセサイザー奏者、二十歳……

コンピューターがすぐに身元を割り出した。

……同地区歩行理由不明、尋問の必要あり……

警官が男に近寄り声をかけた。そのとたん、ピカッと何かが光り、警官は声もあげずに倒れた。

男の手にレーザー銃が握られていた。

商店に向け、男はバッグの中から小型爆弾を取り出し、次々に投げ出した。

商店街は次々に火の柱を吹き上げて爆発、炎上していく。

たちまち、あたり一面、火の海だ。

男はバッグからマシンレーザー銃を出すと、走り出した。

炎上する商店から、悲鳴をあげながら路上に人々が飛び出して来る。

男はマシンレーザー銃を乱射した。

みるみるうちに死傷者の山が築かれていく。

「やめなさい、やめなさい。無駄な行為です。やめないと実力行使します。やめなさい」

表情のない声で街頭テレビが男に呼びかけた。

男はテレビにレーザーを食らわすと、構わず撃ち続ける。

監視カメラと同じ場所に備えつけられたレーザー砲が、静かに回転しながら男の足元に狙いをつけて発射された。

「動くな。動くと今度はあなたの体に向けて発射します」
　男はニヤリと笑うと、
「街は嫌いだ！」
　絶叫し、レーザー砲も気にせず走り出し、まだ火の手の回っていないブロックに飛び込み、レーザーを乱射した。

　ブティックの店内のマネキン人形も人間も、無差別に男のレーザーの餌食になっていった。
　やがてレーザー銃のエネルギーが切れた。
　男は荒い息で、ブティックの中を見回した。戸棚の影で、十歳に満たない少女がうずくまって震えていた。
　男は優しい微笑みをたたえて少女に向かって歩いていった。
「怖いのか？　おじさんは怖くなんかないよ」
　男は少女の肩に手をかけた。
　少女が振り返った瞬間、男は即死していた。
　少女の手には、子供用の小さなレーザー銃が握られていた。
「やったわ……」
　少女は、動かなくなった男の体を蹴っ飛ばして微笑んだ。
　局長はビジョンに写った無差別殺人の犯人の顔写真を見ながら、デノアに言った。

「その男は対人恐怖症で、芸術保護エリアの独身アパートにいつもひとりで閉じこもっていた。〝街は嫌いだ〟が口癖だった……これが、あの大量殺人の動機だというのですか？　たったこれだけが……」

　デノアが優しい口調で答えた。

「そうなんだよ。動機はそれだけだが、どうやら、彼らはクーアノアの攻撃方法を見つけたようだよ」

「それにしても、今日もあなたのレーザーは人を撃たなかった。大した人命尊重ですな」

　デノアはそれには答えず、

「……市民の自衛のため、それぞれの武器の所持検査を徹底すべきだよ」

「あなたのやりたいようにすればいい……クーアノアにいる人間は、みんな救世主であるあなたのものだ」

　デノアは何も答えなかった。

　局長は、局長室のソファに深々と腰を下ろすと、ブランデーもどきの酒をあおり飲んで、呟いた。

「まずい酒がますますまずくなりそうだ」

　そして、ふと思ってみるのだった。

　……との狂気の檻から人間を救うには、やはりデノアを……

　だが、局長は、人ひとりの力でデノアをどうすることも出来ないことをよく知っていた。

　……それに……クーアノアの人間は、地球の人間ではない。デノアがいなくなったら、本当にクーアノアの人間は幸福なのか……

それすら、局長には測りかねていた。
……そう、ここは地球ではないのだ……地球の人間の考えで、彼らの幸福は決められない……

＊

「あなたの作戦を試しましたよ」
宮殿のサロンに、お茶に招待されたレミーは、いきなりジーラスに言われ、手に持ったティーカップを落としかけた。
「私の作戦を試した？　どういうことです？」
ジーラスは、ジャスミンスメルのお茶を啜りながら、レミーの顔を窺った。
「スポンサーに研究の成果を発表しないというのは困ったものですな……あなたは成功率10・2％の作戦を見つけていた」
レミーはイルの顔を見つめた。
イルは、すがりつくような顔でかぶりを振った。
嘘をついているようには見えなかった。
……この人じゃない。すると盗聴カメラか……ああ、なんて迂闊な……しっかりしろ！　わたしは元スパイのくせに……
しかし、レミーにしても、あんな作戦が答えになるとは思ってもみなかったのだ。
「黙っていたのは、ここに長居をして、イルと愛し合うチャンスでも掴もうとしたのですかな？」
「違います！」

イルが口を開いた。今まで聞いたこともない強い口調だった。
「ジューさんは、もっと確率の高い作戦を見つけようとしたんです。ね、そうですよね」
イルはレミーにすがりつくようにして同意を求めた。
……イル、ありがとう……
レミーはジーラスを見すえてキッパリと言った。
「はっきり言っておきます。イルと私を疑うようないやらしい誤解はやめて下さい。確かにお知らせしなかったのは悪いかもしれませんが……、10・2%の成功率など成功とはいえません」
「たったひとりの男が百二十八人を倒し、Fブロックの商店街の四分の一を燃き払った。これが成功でなくてなんですかな?」
レミーはいたたまれず、立ち上がった。
「私には仕事の続きがありますので……」
「その仕事は、しなくてもよくなるかもしれません」
「えっ?」
「七日後に村で、この成果を検討する集会が開かれます。その結果次第では、10・2%以上の作戦は必要なくなります。あなたも出席して下さいますね」
「その日まで仕事は続けます」
こうなってしまったら、戦いをやめさせるには、穏健派のカットナルを頼りにするよりなかった。
もとより、10・2%以上の作戦を見つけられるはずもない。残されたレミーの戦いは、限られた七日間で、コンピューターを駆使し、金色の円盤を翻訳すること、そして、この星から脱出すること

だった。

第八章 私は地獄を見た

無差別攻撃占領作戦

集会の日がやってきた。

「壮烈なる同志の死に我々も続こう。虐げられた我々が、いよいよ立ち上がるのだ。クーアノアを我ら人間のものとするのだ！」

壇上で無差別殺人の男の写真を背に、強硬派のリーダー、グロス・ラバが激しい身振りで演説している。

村の集会場には五百人を超す村のリーダー格と、村を援助する芸術保護エリアの面々が集まっていた。

レミー、真吾、キリー、カットナル、ケルナグール。ブンドルを除く地球の人間達もいた。穏健派をひとりでも多くという、レミーとカットナルの計らいで、渋々出席した真吾とキリー。ケルナグールはといえば、キリーから戦いが始まれば金持ちは襲撃されるぞと脅されて、穏健派の頭数そろえとして出席していた。

「どこでもいい。誰でもいい。好きな所を攻撃してくれ。目標は我々ひとりにつき、クーアノアの住民百人である。それが達成されれば、クーアノアを手の内に収めるのも夢ではない。だが、一口に百人と言っても、これはなかなか容易ではない。おのおのが完璧な兵器と化さねば困難である」

その時、カットナルが立ち上がって言った。

「待て！」

グロスはカットナルを睨みつけて言った。

「戦いを拒む弱虫が何を言いたい」

「10・2％の確率にかけて無謀な死を選んではならない。むしろ、この作戦を条件に、デノアと平和交渉をすべきである。今、我々に必要なのは、雨を思い出し、傷つき病んだ同志への救済である。住まい、食料、病院を条件に、平和的に交渉すべきである」

グロスはカットナルを指さし叫んだ。

「臆病者め、私の声は皆の声だ。我に参同する者は手をあげよ」

グロスの呼びかけに、会場のほとんどが手をあげた。

カットナルは呆然と立ちすくんだ。

「こ、これは……」

「見るがいい、大勢は我にあり。お前に味方する者は、傷つき病んだ役立たずの連中だけだ。そんな者達のために、クーアノア奪回の機会を失ってたまるか。再び言おう。私の声は皆の声である。お前の態度は反逆だ！」

カットナルは完全に孤立していた。青ざめ打ちひしがれていた。かつてアメリカ大統領にまで就任した男が、これほど人々の支持を失ったことがあっただろうか……しかも、珍しく正しいことを言っているのに。

カットナルは震えていた。悲しみと怒りとで、今にも倒れてしまいそうだった。

レミーは理屈抜きでカットナルを助けたかった。

レミーの気持ちが通じたかのようにひとりの男が立ち上がった。

真吾だった。

「俺も戦いには反対だ。君らが戦いたいなら戦うがいい。だが、俺は嫌だ」

もうひとりが、カットナルを支えるように立ち上がった。キリーだった。
「俺もご免だ。お前らはお前らで好きにやんな」
会場全部が強硬派だといえるのに、反対を唱え、立ち上がるのは無謀な勇気といえた。
だが、カットナルの姿を見せつけられては、立ち上がらぬわけにはいかなかった。
「わたしも、あなた達には反対です」
レミーが立ち上がった。
三人はそれぞれの顔を見て微笑した。
カットナルは感動していた。洗脳された頭は元に戻っていなかったが、立ち上がった三人に仲間を感じていた。
しかし、ケルナグールは、居心地悪そうにもじもじしながら坐っていた。無理もない。記憶も戻っていないし、まして美術商として芸術保護エリアで成功しているつもりのケルナグールは、敵を作るわけにはいかなかった。
グロスは堂々と立ち上がって対峙する四人にいたく面目を傷つけられていた。
「反対は許さん、これは命令だ」
キリーが冷やかすように言った。
「あんたが俺に命令出来るタマかい？」
「この村のリーダーを馬鹿にする気か？」
真吾が答えた。
「いや、ただ無視するだけだ」

「行きましょう。こんな所に長居は無用よ」
　レミーがカットナルをうながした。
「う、うむ」
　四人は席から離れ、集会場の出口に向かった。
　四人の背にグロスのわめき声が浴びせられた。
「てめえら、誰のお蔭で生きてられると思っているんだ」
　四人は振り向きもしなかった。
「待て！　待たんか！」
　グロスは銃を抜いた。それを合図にしたように、壇上にいたグロスの護衛の三人も銃を抜いた。
「裏切り者め！　くたばれ！」
　グロスが引き金をひく瞬間——、
「危い、伏せろ！」
　男の声が集会場に響いた。ケルナグールの声だった。
　グロスの最初の銃弾は、その声に振り返ったカットナルに当たった。カットナルは、衝撃で床に叩きつけられた。
　集会場の全員が身を伏せた。立っているのは壇上の四人と真吾、レミー、キリーだけだった。次の瞬間、振り向いた三人の手には銃が握られていて、壇上の四人は撃たれた反動で後ろの壁にぶち当たり、倒れていた。
　集会場に響いた銃声は二発しか聞こえなかった。

一発目はグロスがカットナルを狙った銃声。
二発目は、レミーがスカートの内側から取り出した旧式な44口径マグナムのひときわ大きな音、その音の響く間にキリーが一発、真吾が二発レーザー銃を撃っていた。
全てが一瞬だった。
三人は集会場の人々を威嚇しながら、倒れているカットナルに駆け寄った。
弾は肩を貫通していたが、命に別条はなさそうだ。
応急手当てをするレミーに、カットナルは痛みで顔を歪めながら言った。
「よけそこなった……。しかし、これで、やっとアメリカ大統領らしくなってきたわい」
「えっ？」
レミーはカットナルの顔をまじまじと見た。
カットナルの台詞は、アメリカ大統領就任の時、いつ暗殺の凶弾に倒れてもいいように、かねてより用意してあったものだった。
やがて、カットナルもここがワシントンのホワイトハウスでも、まして歴代の大統領のひとりが暗殺されたテキサスのダラス市でもないことに気付いた。
「レ、レミー……レミーさんじゃないか……あ、あ、ここはどこじゃ、あ、あ、わし、撃たれとる……薬、薬をッ……」
撃たれた衝撃で、洗脳から解放され、記憶の戻ったカットナルは、昔のカットナルそのものだった。

妥協か、攻撃か。争いのなかで、撃たれるカットナル。

集会場の人達は四人を遠まきにしながらゆっくり近づいてきた。
身がまえる真吾とキリーに、群衆の中のひとりが言った。
「リーダーは倒された。次のリーダーは誰がやるの？」
「リーダー？」
真吾が聞き返した。
「クーアノア攻撃のリーダーだよ。君達に資格がある」
群衆の間から車椅子に乗ったジーラスが現れた。
真吾とキリーは顔を見合わせた。
真吾がジーラスに言った。
「戦いは反対だと言ったはずだ」
「村の意志は決定している。攻撃あるのみだ」
「俺は何もしたくないし、何もされたくない！」
銃をかまえながら真吾が答えた。
キリーが続けた。
「右に同じさ。一匹狼は無駄な戦いをしない」
ジーラスは頷いて言った。
「君達にそのつもりがないのなら……我々の中からリーダーを選ぶよりないな」
「勝手にやるんだね」
真吾とキリーはカットナルを抱きあげ、肩を貸した。

レミーは油断せず、銃を群衆に向けている。
四人はじりじりと後ずさりして集会の出口へ向かった。
ジーラスが集会場の群衆に叫んだ。
「只今より、我々の中からリーダーを決定する」
群衆のひとりがわめいた。
「リーダーは俺だ！」
「何を言うか、この俺だ」
別のひとりが叫んだ。
素早く数人の男が壇上に駆け上がった。その中のひとりが叫んだ。
「私がリーダーです。賛成の方は起立してください」
騒ぎで集会場のほとんどが立ち上がっていた。
「賛成多数で私がリーダーに……」
「不正だ！」
「無効だ！」
別の男達が壇上に駆け上がり、決議をどった男に掴みかかった。
「リーダーは俺だ」
「私がリーダーだ！」
それをきっかけに堰を切ったように、口々に自分がリーダーを主張する群衆が壇上に殺到した。
銃声が鳴った。

決議をとった男が倒れた。
たちまち、集会場は揉み合い、押し合い、へし合い、入り乱れての銃撃戦になった。
ケルナグールは呆然と立ちつくしていた。
目の前に展開される醜いリーダー争いに驚いていたのではなかった。
「危い、伏せろ！」
そう言って四人を助けた自分の言葉に仰天していたのである。
……なぜ……なぜ……わしは、あいつらを助けようとしたんだ？……

ケルナグールの奥に眠っていたものが、目醒めかけていた。

リーダー争いの悲鳴と怒号と銃声が噴出する集会場を振り返って、キリーは吐き捨てるようにレミーに言った。
「奴らは人間じゃぁねえ。こんな星からは一日も早くトンズラしたいぜ」
「トンズラ出来るわ。ただし急がないと……」
「出来たのか？　解読」
レミーはコクリと頷くと、金色の円盤とマイクロフィルムを出した。
「このマイクロフィルムの中に平均八百語のタイプ用紙千二百枚分、訛りなしのブリティッシュイングリッシュで書いておいたわ」

「難しいんだ、正統なのは」
「教科書にしてお勉強なさい。ともかく、人間の住むことの出来そうな環境の星へ向かって進路をとるには、五年に一度のチャンスしかないの……なんでも、この星の進む道筋の関係なんですって」
「星の進む道筋？……星の軌道って呼んで欲しいな」
「難しい専門用語は知らないもの」
「難しいかね、軌道って言葉」
キリーは、金色の円盤が解読されたことにウキウキして、レミーをからかった。
レミーは少しふくれて、
「子供にもキリーさんにも分かるように書くのがモットーです……」
「で、五年に一度って、いつなんだい？」
「十日後……」
「なに！」
キリーはつまずきそうになった。ウキウキなどしていられなかった。

村のカットナルの小屋に負傷したカットナルを運び、ベッドに寝かせた後、キリーは宇宙船の話をきりだした。
レミーの解読した金色の円盤によると、十人乗りの宇宙船には冷凍冬眠装置が付いていて、十一光年離れた、人間の住めると思われる星まで、乗員は眠ったまま旅をすることになる。

「光の速度で十一年の旅か……わたし、三十過ぎの中年になっちゃうのね。眠っている間にお肌の曲がり角を越えちゃうのか……」
「冷凍冬眠だから、歳はとらんさ……レミーが脂の乗りきったおばんの魅力を見せてくれるのは楽しみな気もするが、やっぱり、ピチピチキャンキャンの今のままのレミーの方がおいしそうだものな……真吾、十人乗りだから、お前の女房だって乗せていけるぞ」
レミーとキリーの話を黙って聞いていた真吾は口を開いた。
「俺は遠慮するよ」
「……真吾……」
レミーとキリーは真吾を見つめた。
「十一光年離れたその星が、ここよりましという保証はない。それに俺の女房は身重だ。冬眠するとはいえ、光速ドライブで体に悪影響がでて、もしものことが起こると困るしな。……それに、俺はこの星で生きていこうと決めたんだ。地球の植物もわずかだが、この土地に芽ばえている、せっかくの芽を捨ててはいけない」
「わしも、ここに残るぞ」
いつの間にかベッドから抜け出したカットナルが入ってきた。
「村の連中のクーアノア攻撃が始まって、結果がどうでようとも、この村の病人や怪我人は取り残される。わしは、その人達を見捨てるわけにはいかん」
「カットナルさん……」
今のカットナルにだったら、選挙があればレミーだって投票したに違いない。

キリーは肩をすくめて言った。

「好きなようにするさ。出発まで十日間。気が変わったら言ってくれ。いくら相手がレミーだって、男と女、ふたりぼっちじゃ、広い宇宙空間、淋しくってしようがねえ」

それは、キリーの遠回しの誘いだった。

レミーも気持ちは同じだった。

……せっかく再会できたのに……十日後には別れなくてはならない……

そして、それは十一光年という距離と時間を隔てた、おそらく永遠の別れになるはずだった。

レミーは、そのとき、記憶の戻っていないもうひとりの仲間、ケルナグールと、生きているのか死んでいるのか行方の知れないブンドル……そして、クーアノアの人間とは思えない優しさを持ったイルのことを思った。

「それにしても、分からぬことばかりだ」

カットナルが呟いた。

「わしの記憶が洗脳されたにしろ、この土地に生まれたときから住んでいることになっている。わしはともかく、他の連中は、一年前、突然現れたわしを変に思わなかったのだろうか」

言われてみれば、他の三人も同じだった。一年前、クーアノアの中から逃げてきて仙人のような暮らしをしている真吾はともかく、レミーもキリーも、いやケルナグールさえ周りの人間達は、あたかも何十年も一緒にいたかのように付き合っていた。

解かなければならない謎は多かったが、レミーとキリーに残された時間はあまりに短かった。

＊

芸術保護エリアの自宅に戻ったケルナグールは、寝室に入ると、頭を抱えてベッドに坐り込んだ。
ケルナグールの頭は混乱していた。
……一体、どうしてわしは、あいつらを助けようとしたのだろう。救ったところでなんの得もないのに……
事実、レミー達を助けた責任を問われるのを恐れ、新しいリーダーが決定する前に、集会場の混乱に紛れて自宅へ逃げ帰ってきたのだった。
ケルナグールは、部屋中にベタベタと張りつけたポスターをぼんやりと見つめた。
ケルナグールは、この寝室の中を誰にも見せなかった。暴力と狂気のイメージが最高の美とされるクーアノアの美術商としては、この部屋に張りめぐらされたポスターは恥ずべきものだった。美術商としての審美眼を疑われても仕方ないほどひどいものだった。
元はキリーが運んできた美術品の梱包用に使われていた紙きれだったのだが、ケルナグールはこのポスターを見て、とても紙屑籠に捨てる気になれなかったのだ。それは、若い女性がニッコリ笑いかけている、フライドチキンのポスターだった。その女性は、かつて地球でケルナグールの妻だった、落ち着いて清楚な感じのヨーコ夫人とは似ても似つかない、はつらつとして陽やけしたモデルだったが、それでも、フライドチキンを持ってニッコリ笑いかけるこのポスターに、ケルナグールはいい知れぬ愛着を感じ、精密なカラーコピーで何十枚も複製を作り、こうして秘かに部屋に張って楽しんでいたのだ。

……このポスターにしろ、どうして、こんなに愛着が湧くのかよく分からぬ……最近の私はやはりどこかおかしいのかもしれぬ……

ケルナグールは再び頭を抱えた。

「この部屋とも、このコンピューターともお別れね」

レミーはジーラスの宮殿の寝室で身の回りの物の荷造りをしていた。

「ほんとうに出て行ってしまうのですか？」

イルが悲しそうに話しかけた。

「ええ、嫌な結果になっちゃったけれど、私はもう用無し……芸術保護エリアの安アパートでも借りて住むつもりよ」

「ひとりじゃ危険です。それにクーアノア攻撃も七日後に決まりましたし……」

「七日後？……」

「デノア生誕百周年記念日です」

レミーは溜め息をついた。

「救世主の誕生日か……やっぱり攻撃の日に意味付けしたのね。攻撃の時も場所もいっさい白紙でやらなければ成功の可能性は無いのに……」

「ええ、私もそう思います。でも、決まった以上は仕方ありません」

「仕方ない？……」

レミーはイルを見つめた。

「あなたも攻撃に加わるの？」
「私も雨を知っている一員ですから……でも、私は人を殺せそうにありません。デノアを破壊する気にもなれません。たとえ、薬やアルコールで理性を吹き飛ばしても、私には出来そうもありません」
「あなたは、他の人達とは違うわ」
「私のような人間は、戦いが始まれば、一番最初に殺されちゃうんでしょうね」
レミーはイルの肩に優しく手を置いてささやいた。
「あなたを殺させはしないわ」
「えっ？」
レミーは隠しカメラの位置を探りながら、イルの耳元で、
「ベランダへ出て……さりげなくね」
ベランダへ出たイルにレミーは言った。
「無理して戦うことはないわ」
「でも村の方針に逆らえば殺されます。そりゃ、ジューさんには、戦いにもし勝ったらデノアの機構を操るって仕事があるから、戦わなくても大目に見て貰えます。でも、私は違います。ジューさんのような利用価値が私にはありません」
レミーはイルを見据えて言った。
「イル、逃げるのよ、ここから……」
「逃げ場所なんかありません。禁断地区の外へ逃げたって、食べ物のない不毛の土地です。村に住

まない限り、生きてはいけません」
「イル……いつだったか、宇宙へ飛んでいった男の子の話をしたわね」
「ええ」
「あれはお伽噺なんかじゃないの」
「えっ?」
「男の子の巣立った星の名前は地球……私の故里でもあるの」
「ジューさん」
「その名は洗脳して付けられたクーアノアの名前……本当の名は、レミー・島田……私は宇宙を飛んでこの星に来たの。そして、もうすぐ宇宙を飛んで別の星へ行くわ……」
「そんなことって……」
「今は私の話を信じて……攻撃の日に、立体映画館で待っているわ。あなたの優しさがあれば、他の星でもちゃんと生きていけると思うの……きっとね……」
「他の星……」
イルの目は、まだ見ぬ星への希望と夢に輝いていた。
……この瞳の輝きは、あの宇宙へ飛んでいった少年の旅立ちの日の瞳に似ている……
レミーは、そんなイルの目が眩しかった。

*

「デノア生誕百周年記念日……私の誕生日だね……」

デノアが局長に聞き返した。
「その日が一番危険です」
「人間は、攻撃に分かりやすい日を選ぶものだね」
「記念日には、芸術保護エリアから市街地へパレードが行われます。患者達は、その中に必ず紛れ込んでくるでしょう。デノア、おやめなさい。馬鹿騒ぎのパレードなど」
「それは出来ないよ。せっかくクーアノアの人達が、私の生まれた日を祝ってくれるのだからね。人々は、年に一度のこの日を楽しみにしているよ。市民の楽しみを奪ってはいけないよ」
「その日が地獄になるのは目に見えています」
「人々が冷静に対処すれば、被害は少なくて済むよ……そのために武器も配布してあるしね」
「はっきり言っておきます。クーアノアは、確かに立派な容れ物かもしれない。だが、中身の人間はガラクタだ。狂人に刃物という言葉をお忘れなく……」
デノアは何も答えない。
局長は頬に、自嘲的な微笑をたたえた。
……なぜ、私はコンピューターの使い走りのような仕事をしなくてはならぬのだ。確かに思考情報局の局長をしていれば、地球の仲間の行動は分かりやすい。仲間が洗脳から解き放たれて、不用意に〝雨〟という言葉を使ったとしても、街の連中に殺される前に保護出来るとも思った。だが、現実は、レミーの絶体絶命の危機を救ったとはいい難いし、芸術保護エリアにいるキリーとケルナグールの記憶が戻ったかどうかも定かではない。まして、真吾やカットナルにいたっては、どこにいるのかも分かっていない。そして自分は、クーアノアの狂気の泥沼に足を踏みいれて、ぐいぐい

ひき込まれている気がする。いっそ、禁断地区へ逃げ出そうとも思うが、そこの人間達も、クーアノアの人間と同じガラクタに違いない……私はこのまま、ここで、こうして生きねばならぬのか……
だが、局長の気持ちは我慢の限界をとうに越えてもいたのだ。

*

デノア生誕百周年記念日がやってきた。
芸術保護エリアから市街地を抜けて、クーアノアのデノアの塔に続く大通りの沿道は、パレードを待つ群衆で埋めつくされている。
群衆の最前列には、武装した思考情報局員達を率いた局長が固い表情で立っていた。
路上に流れていた音楽が、ファンファーレに変わった。
群衆がどよめいた。
後列の人々は、競馬場のゴール前の観客のようにピョコンピョコンと跳び上がっている。
大歓声が湧き上がった。
パレードがやってきたのだ。
それはリオのカーニバルに似ていた。
様々な意匠を凝らした山車がゆっくりと進み、仮装行列の人々が踊り狂っている。
見物の群衆も行列に加わり、踊りだした。
彼らは熱狂していた。
しかし、その中に確実に不安が存在していた。

お互いに手をつなぎ合い、歌い、踊っていても、隣の人間が〝雨〟という忌まわしい言葉を発する特殊患者でないという保証はなにもないのだ。

激しいリズムの中、踊りまくる彼らの顔に、歓喜と疑惑が交錯していた。

「私の美意識とは、かけ離れすぎた祭りだ」

装甲車の上に備えつけられた指揮台に昇った局長は、うんざりしながら、パレードを見つめていた。

装甲車の前を、十字架にかけられたと伝説にある、救世主をモデルにした巨大な像が通りすぎていく。

「ん？」

局長は何かに気付き、救世主の顔を注視した。

救世主の眼が光った。

それはレーザー砲の研ぎすまされた砲身だったのだ。

いきなり、救世主の顔が二つに割れた。

局長は咄嗟に身を伏せた。

頭上にレーザー砲が弾けた。

沿道の群衆が次々に倒されていった。

局長は伏せたまま、マイクに怒鳴った。

「撃て！　救世主だ。救世主を撃て！」

装甲車の砲弾が救世主に撃ちこまれ、頭部が粉微塵に砕けた。

レーザー砲の鈍い電磁音が止んだ。
静寂がやってきた。
局長は指揮台から駆け降りた。
群衆は、それぞれ、いつの間にか銃を抜いている。
街頭スピーカーの声が響いた。
「皆さん、冷静にして下さい。軽率な行動は避けましょう」
群衆は、互いの顔を恐怖感を持って見つめあった。
群衆は一歩も動けない。
そんな群衆を見降ろすビルの一室にいたひとりの男が、狙撃銃の照準を合わせていた。明らかに薬物に冒された男の目は、サイト・スコープの中に、赤い服を着た女を見てうめいた。
「赤い色は嫌いだ」
銃声が響いた。
赤い服の女が倒れた。
続く五発の狙撃弾は、確実に赤い服の人間だけを狙っていた。
その一発、一発に、群衆の神経は逆撫でされていった。
男のいた窓が、バズーカ砲で吹っ飛んだ。
静寂が戻った。
スピーカーの声が虚しく路上に流れる。
「冷静にして下さい。軽率な行動は被害を増やすばかりです……」

しかし、群衆の恐怖は爆発寸前だった。
局長はパトカーのマイクに、
「デノアの許可を要求します。パレードは中止、市民はすみやかに退去……」
その声をかき消すように銃声がした。
局長は銃声の方を振り返った。
群衆のひとりが周りの人達を、片っ端から撃っている。
次の瞬間、群衆は暴徒と化し、発砲を始める。
敵も味方もない。周りの人間は全て加害者だ。群衆ひとりひとりの個人的な防衛戦だ。
ともかく、撃てば誰かに当たる。ひとりでも死ねば自分の危険は少なくなる。
やがて彼らの表情に微笑が浮かぶ。
防衛のつもりの戦いは、気違いじみた攻撃のための戦いとなった。
大通りは蜂（はち）の巣を突っついたような騒ぎになり、たちまち死体の山が築かれていった。
思考情報局員達も、ばたばたと倒れていく。
局員のひとりが局長に駆け寄った。
「局長！　発砲の許可を、我々は全滅します。お願いです！」
「なんてことだ！」
局長はヨロヨロと街頭テレビカメラの前に立つとレンズを指さし、
「防御レーザーはどうした。デノア！　なぜ、撃たないんだ」
デノアは答えない。

「デノア……どうなっても知らんぞ」

局長は向きなおり、

「発砲を許可する」

局員はマイクに叫んだ。

「二列横隊！」

局員達は二列横隊になった。

「安全装置開放！」

安全装置を開く金属音が響いた。

「目標、前方の群衆」

局員達は一斉にかまえた。

「前列、撃て！」

前列が一斉射撃を開始した。

「後列、撃て！」

二列が交互に発砲し、局員達は前進していった。

「撃て！　撃て！　撃て！」

局員達の列は、死体の山を築きながら群衆を食いちぎっていく。

「撃て！　撃て！　撃て！」

マイクに叫ぶ局員の顔は、次第に紅潮してくる。

笑いさえ浮かんでいる。

今は、確実に殺戮を楽しんでいる。
局長は肩を落として呟いた。
「地獄だ……」
地獄は大通りだけではなかった。
工場エリアは燃え上がり、芸術保護エリアでは、贅沢な家、屋敷を狙って暴動が起きた。
住宅エリアで――。
商業エリアで――。
至るところで無差別の殺戮が繰り広げられた。
クーアノアの人間達は狂暴化し、敵味方の区別さえつかず戦いを続けた。
爆発と銃声と怒号と悲鳴に混じって、街頭のスピーカーは意味なく、空しく、流麗な曲を歌い続けていた。

*

ケルナグールの自宅の大邸宅も、暴徒達の格好の生け贄だった。
リアルに描かれたケルナグール自慢の戦争絵画の前で、絵画でも描けない残忍な殺しや暴行が行われた。暴徒達は、あたり構わず火を放った。やがて暴徒達は、ケルナグールの寝室の扉を突き破った。
「命だけは、お助けを……」
暴徒は床にひれ伏すケルナグールを蹴り倒すと寝室に火を放った。
ケルナグールの愛したポスターが次々に燃えていった。

額を割られた頭を抱えて、よろよろと立ち上がったケルナグールは、燃えていくポスターに呆然となった。
「わしの絵が……わしの大事な絵が……」
怒りが湧き上がってくる。
「グオオオオ！」
ケルナグールは、いきなり暴徒達に殴りかかった。
炸裂するパンチの一発、一発で、暴徒達は床の上に倒れ、気を失った。
クーアノアの画商ドマは、生まれてこのかた、人を殴ったことなどない、おとなしい男だった。
それが、なぜ、こうもパンチが決まるのか……。
だが、そんなことはどうでもよかった。今のケルナグールは、ポスターを失った悲しみと怒りで、前後不覚になっていた。
ケルナグールは、寝室から出ると、片っ端から暴徒を殴り倒していった。
……この感触……懐かしいこの拳のしびれ……そう、コンドルのように舞い、コンクリートホルトガンのようにバカンと刺す……アイ・アム・ア・チャンピオン……そうだ、わしはチャンプだ……ヘビー級世界チャンピオン、ヤッター・ラ・ケルナグールだ！……
ケルナグールの屋敷に崩れ込んだ四十八人の暴徒をひとり残らず殴り倒したとき、ケルナグールは洗脳から解き放たれ、自分を取り戻していた。

＊

戦いは夜も続いた。
攻撃を仕掛けた側は、ほとんど全滅していたが、クーアノアの人々の狂気は収まることを知らなかった。あたるを幸いの殺し合いが果てしなく続いた。
デノアは、しきりに数をかぞえていた。
「……498万6893……498万6894……498万6895……」
ディスプレイに写し出された数字が、どんどん増えていく。
それは、この戦いで失われていった命の数だった。
デノアは、無感動に平然とカウントを続けていた。

＊

立体映画館の、中生代のシダの立体映像の陰で、レミーはイルを待っていた。
レミーが立体映画館の外で見た地獄は、予想していたものを遙かに越えていた。
人間はこうも人殺しを楽しめるものなのか？　いや、クーアノアに住んでいるのは人間じゃない。地獄に住む鬼、悪魔達だ。そうとでも思わないと、レミー自身が人間を辞めたくなるほど、無惨でおぞましい光景だった。
「イルは、うまく逃げてこれるだろうか……」
外の混乱を思うと、それだけが気掛かりだった。
「ジューさん……いえ、レミーさん」
背後から男の声がした。

振り返ったレミーの前に、今まで会ったことのない、目鼻立ちの整った若い男が立っていた。レミーは身がまえた。
「誰？」
「分かりませんか？　私が」
「イル？……イルなのね」
レミーが分からないのも無理はなかった。
完璧に女装していたイルは、今、髪を切り、化粧も落とし、男性の服を着ていたのだった。
「なんだか変な感じです」
「イル、それでいいの、なかなかいい男だわ」
レミーは、姉が弟を誉めるようにイルの肩を叩いて言った。
イルはそんなレミーの態度に淋しそうな目をしたが……。
「私、決めました。行き先はどこであれ、レミーさんと一緒にいようって……」
「そうはさせないよ、イル」
別の男の声がした。
「!?……」
突然、今まで写っていた立体映像が消えた。
円型のドームの中にレミーとイルはぽつんと立っている。
「イルは私の大切な女だ。私は、イルをずっと見張っていた。ジューさん、持ち逃げは困りますよ。悪いが、思考情報局にも密告させてもらいました」

レミーの前に、車椅子に乗ったジーラスが現れた。
後ろには思考情報局員達が並んでいる。
イルが叫んだ。
「ジーラス様、私は私で、自分の生き方を決めたいんです。もう、あなたのおもちゃはたくさんです」
「愛されたいんだね。この女に……」
「そんなんじゃありません。私は、この人と一緒にいて、話したり、歌ったり、笑ったりしたいだけです」
イルの言葉はジーラスを怒らせた。
「ジューさん、あなた、よくもイルを手懐けてくれましたね。私はあなたが許せない。私の最愛のものを奪ったあなたがね」
ジーラスはいきなり銃を抜いた。
「あぶない！」
イルがレミーの前に立ち塞がった。
イルの体にレーザー光線が叩き込まれた。
「イル！」
ジーラスは、思いがけずイルを撃ってしまったことに動転していた。
イルは虫の息で、ポケットから銃を出すと、ジーラスに狙いをつけた。
「僕は、僕は自由でいたい」
イルは銃を発射した。

ジーラスは車椅子ごと後ろにひっくり返り、絶命した。
イルはレミーの腕の中であえぐように言った。
「レミーさん……僕、愛するって分かるような気がします。レミーさんを守ってあげたいっていう、今の僕の気持ち……それが、愛……なんでしょ……ね？……」
「ええ……きっと……きっとそうだわ……」
イルは、フッと微笑むと、そのまま動かなくなった。
今、イルは、クーアノアの人間ではなく、レミーと同じ感情を持つ人間として、この世を去った。
レミーは、遠くを見つめているイルの眼をそっと閉じてやった。
そんなレミーの背後に、思考情報局員がやってきた。
「元、支局調整員のジューさんですね」
レミーはもう逃げようとはしなかった。
「やっと見つけましたよ」
思考情報局員は、レミーの背に麻酔弾を撃ち込んだ。
レミーが麻酔の深い眠りから眼を醒ましたのは、二日後の朝だった。
キリーが宇宙船で飛びたつ日まで一日しかなかった。

第九章 私はA級ライセンス

激走、クーアノア管制線突破

レミーは、思考情報局の牢獄にいた。
牢獄とはいっても、鉄格子が窓にはまっていることを除けば、一流ホテルのスイートルームといっても過言ではない、豪華な部屋である。
「お目醒めかね、ジュー」
壁のディスプレイからデノアがレミーに話しかけた。
「久し振りね、デノア。でも私はジュージャない。レミー・島田……地球人よ」
「そう、そうだったね。君はなかなかやり手だよ。人間ひとりの力で、よくここまで私とやり合ったね。でも、もう終わりだよ。三日後、君は支局調整員として現役復帰だよ」
「また、洗脳？」
「きれいさっぱりとね。雨も、禁断地区も、地球も、なにもかも忘れるんだよ」
「つかまった以上仕方ないのかもね。でも、聞かして……雨って、一体何を意味するものなの？」
「私の考えでは、クーアノアの、少なくとも四分の一は、〝雨〟という言葉を思い出している。君は運が悪かったのだよ。思い出しても黙っていれば良かったんだよ。どうせ時がくれば、また洗脳して忘れさせてあげるのにね」
「なぜ、〝雨〟を忘れなければならないの？」
「雨は、この星の人間の過去に起きた、ある出来事を思い出させるキーワードだよ。私は、その出来事を人間に思い出さすまいとして、人間全部を洗脳したんだよ。今から百二年前、この星は、未曾有の豪雨に襲われたんだよ。北半球から南半球に至るまで、地上の全ての土地で、その雨は二年間も降り続いたよ。君達の地球でいうインドやアフリカなどの、飢餓地帯の人間達は、最初の一年

で全滅したよ。やがて一年後、意外な事実が判明したんだよ。その雨には、この星に存在する、ありとあらゆる有害物質が含まれていて、人類、いや、この星の生命は全て、一年以内に死滅する。それが、学者達の調査結果だったんだよ」

レミーはデノアに聞いた。

「なぜ、そんな雨が降ったの？」

「知らないよ。今となっては、どうでもいいことだよ。私自身はこの星の浄化作用が狂ったためだと思っているが……。問題はその後なんだよ」

ディスプレイにフィルムが写し出された。

「これが、私の手に入れた、そのころの人間達を写した数少ないフィルムの一部だ」

雨の中を、人間達の列が続いていく。

画面が上昇を始め、大俯瞰（ふかん）になると、その列が、ナイアガラの滝を思わせる大瀑布（ばくふ）に続いているのが分かった。

レミーは次のシーンで思わず目を閉じた。

人間が次々に落下していくのだ。

男も――。

女も――。

次々に、大瀑布に飛び込んでいくのだ。

「集団自殺……」

次のシーンでは、北京風の都会で、人民服まがいの服を着た大集団が、雨の中を踊り狂っている姿が写された。
「絶望した人間達は踊り狂ったよ」
やがてイスラム教風のモスクが炎上し、神社・仏閣が次々と爆破されるフィルムが写った。
「神も宗教も芸術も文化も、なにもかも無意味だったんだよ。しかし、往生際の悪い奴も多かったんだよ。その人間達は生き残るために何をしたか……」
レミーが目撃した、クーアノアの戦いと瓜ふたつの世界が写し出された。
至るところで、暴徒による殺戮、暴行、破壊が繰り広げられている。
「この状態が一年続いたよ。結局は、食料を手に入れられる者だけが生き残った。それがクーアノアの人間達だ」
やがてディスプレイに、どしゃ降りの雨の中、四歳くらいの男の子がしゃがみ込んでいる姿が写った。
火焔放射器の火線がディスプレイを走った。
屍体の山が炎上している。
男の子はポケットから肉塊を取り出して、しゃぶるように食う。
と、その足元に、血のように赤い水滴が落ちてきた。
男の子は空を見上げた。
雨の色が赤い。
やがて、ディスプレイは赤いフィルターをかけたようになり、男の子の全身が血のような雨で洗

デノアが説明するこの星の歴史。それは悲惨なものだった……。

われる。

「その赤い雨には解毒作用があったんだよ。そして、雨が止んだとき、この星には、不毛の大地と、ひと握りの生命だけが残ったよ」

デノアは話を続けた。

「それから人間達は、まるで何かに導かれたかのように、あちこちからこの土地へ集まったんだよ」

レミーがデノアの言葉をさえぎって言った。

「そして、デノアとクーアノアを作った」

「いや、それは違うよ。誰が私を作ったのか、分からないんだよ。人間達がこの地に辿りつく以前に、私もクーアノアも、すでに完成されていた。この星の人間は血に飢えた獣だったよ。だからこそ生き残れたともいえる。その忌まわしい過去を背負って、彼らが人間として生きていくことができるだろうか？　人は殺戮と暴行を繰り返した自分の手を見て、恐れ、恥じないのか？　生きる意欲をなくさないのか？」

デノアの声は無感動に続いた。

「あの出来事は、現在、この星に生存している人間の人間性を根底から否定するものなのだよ」

レミーは、宇宙基地の司令官の遺書を思い出した。

――この星の人間は、宇宙へ進出する資格がない――

確かにそうなのかもしれない。かつて、地球がビッグソウルによって宇宙に進出する資格を試されたように、この星も試されて、失格したのかもしれなかった。

デノアは続けた。
「だから私は、〃雨〃という言葉を忘れさせた。〃雨〃という言葉と同時に、過去の忌まわしい、この星の人間の悪業を忘れさせたかったのだよ。野獣ではない、本当の人間を残すためにね。そして、いつの日か、人間らしさを取り戻した人間が、この星を昔の緑の星に復活させてくれるはずだよ」
「すると、あなたは、滅びかけたこの星の人間を守るために作られたわけね」
「そう。だからこそ、私は救世主なのだよ」
「それだけかな」
リンとした男の声がレミーの後ろで響いた。
振り返るレミーの前に局長が立っていた。
レミーにとって、忘れるはずもない男だった。
金髪の髪をなびかせた、レオナルド・メディチ・ブンドルだった。
「ブンドル局長……」
「さよう。やっと会えたね、レミー。君とは、いろいろ接触を取ろうとしたのだが、何しろ、君の記憶が戻っているかどうか定かでなかったのでね」
「接触を取ろうとしたって……？」
「さりげなくね。君は病院のベッドの横にあったバラもどきの花瓶(かびん)を憶えていないかね」
レミーは、交通事故で入院した病院で、襲いかかってきた医者の頭に叩(たた)きつけた花瓶を思い出した。
……そうか、あのバラのような花が……なぜ、ブンドルを思いつかなかったのだろう……

レミーは微笑して、ブンドルに言った。
「ありがとう。あのお花、役に立ったわ。花瓶は惜しいことをしたけれど……」
「なにはともあれ、レミー、デノアの言葉を信じてはいけない」
「どういうことかな、局長」
デノアがブンドルに聞いた。
「あなたは確かに生き残った人間を守るために作られたのでしょう。まるで、宇宙へはばたく地球人、ケン太やレミー達を守ったゴーショーグンやグッドサンダーのようにね。そういう意味では、あなたは救世主かもしれない。だが、あなたは、人間のように支配欲を持った」
レミーがブンドルに聞き返した。
「支配欲？」
「そう、デノアはこの星を支配しようとした。そのためには人間が邪魔だ。特に、パニックの二年間を生き抜いた、悪業の限りをつくした人間達がね。デノアは何をしでかすか分からない人間が怖かった。とはいえ、人間を守るために作られたデノアは、人間を滅亡させることは出来ない。デノアの基本プログラムは、人間を守るためにあるからね。そこで、デノアは、人間達を飼い殺しにしようとした。増やしもせず、減らしもせず、永久にね……このクーアノアという檻の中に閉じ込めて……だが、放っておくと人間は増えてしまう。人減らしが必要になる」
「人減らし……」
「そう。デノアは、人間を守るという基本プログラムを崩さずに、人間を整理しようとしたのだ。そのためには、人間に殺し合いをさせるのが一番早い……デノアは〝雨〟を利用した」

「大胆な仮説だね」
デノアの言葉にブンドルはリンとした声で答えた。
「仮説ではない。事実だ。デノア、あなたは、地球人ブンドルの情報収集分析能力を侮らないでいただきたい。あなたは洗脳によって、〝雨〟を知っている人間と〝雨〟を忌み嫌う人間の二種類を作って戦わせた。おそらく、この百年の間に何回も、この人減らし戦争を起こしたはずですな。そして洗脳するのは、人減らしをするおそらく一年ほど前……」
「一年ほど前？」
レミーが聞き返した。
「そう、一年なら洗脳でごまかせる。それ以上の期間は、人間達がいつ何時、過去を思い出すか分からない」
レミーはカットナルの言葉を思い出した。
〝自分は生まれも育ちも禁断地区のつもりだが、実際は一年前にやってきた。他の連中も、それを当たり前だと思っているのは不思議だ……〟
なんのことはない。一年前にクーアノアの内の人間も外の人間も、皆、洗脳されたのだ。
そして、目的は、デノア生誕百周年記念日の人減らしのために……すべてが仕組まれていたのだ。
「だが、デノアはいつものパターン通りの人減らしに飽き飽きしていた。そこに我々が飛び込んできた。この星の人間と違い、見事に宇宙に飛び出した少年を生み出した地球人がね……デノアはおそらく、こう思っただろう。我々を鬼にしようとね」
「鬼？」

「ゲームの障害さ。障害が多ければ多いほどゲームは楽しい」
「私達は遊ばれたってわけ？」
デノアがレミーに言った。
「私はゲームのコマの君達をもっとも適した場所においたよ。ブンドル君は、その情報収集の手腕から思考情報局の局長に……キリー君は、頭脳探査の時に、小説のことばかり気にしていたよ。だから小説家に……ケルナグール君は、その戦闘性、暴力性から、クーアノアの美術商にぴったりだったよ。カットナル君は指導者になりたがっていたよ。北条真吾は、職を決める前に逃げられてしまったよ。そしてレミー君、君は、とっても素晴らしい考えを持っていた。メカは友達……君は、宇宙にはばたいた地球の少年が好きだった。それにその少年を母親がわりに育てた教育ロボットのこともね。そのロボットとは、メカと人間を超えた、女友達という気持ちで接していたようだね。私はあなたが、コンピューターの知識はまるでないにしろ、支局調整員にぴったりだと考えたんだよ」
「ほんとに遊ばれたのね、あなたに……」
「特にあなたは、心強い味方にもなるトランプのジョーカーだった。あなたは見事に私に勝てる作戦を考え出し、そしてそれを利用した私に、人減らしをさせてくれた」
「あなたにはゲームかもしれないけど、人間の私には失ったものが多すぎるわ」
「さらに失うものは多いかもしれないよ」
「どういうこと……」
「クーアノアの外は、私の管轄外だ。艦の壁の外にしがみついている細菌やごみは、掃除しなけれ

ばならない」
「!!……あなたって人は……」
「なに、洗脳すればすぐに忘れられるよ、昔の友達のことはね」

＊

そのころ、デノアの言うように、アンドロイド達の操縦するジェット戦闘機隊が、突然クーアノアの禁断地区の村に襲いかかっていた。
傷ついたカットナルの護衛をしていた真吾は、炸裂するロケット弾の中をカットナルに肩を貸しながら逃げまどい、霧の壁の中にかろうじて身を隠した。
「ちっ、なんてこった」
「真吾君、わしのことはもういい。ここに隠れていればなんとかなる。それより奥さんを……」
「分かっている」
真吾は霧の壁から飛び出すと、ジープに乗って小屋に向かった。
村は破壊されつくされて、生存者はほとんどいそうにもなかった。
クーアノアへの攻撃隊が全滅し、病人や怪我人達だけが残された村では、突然の攻撃を逃げられる者がいなかったのだ。
「俺の小屋は村から離れているから、大丈夫とは思うが……」
真吾は、はやる気持ちを抑えてハンドルを握っていた。
いきなり頭上にジェット戦闘機の轟音が響いた。

次の瞬間、ジープに向けロケット弾が発射された。
真吾はジープから飛び降りた。
ジープは大爆発を起こしたが、間一髪、難を逃れた真吾は、爆風によるかすり傷だけで済んだ。
ジープを仕留めたと確信したジェット戦闘機は、真吾の小屋に向かって飛んで行く。
「よせ！」
真吾は絶叫した。
しかし、何の役にもたたなかった。
ジェット機の発射したロケット弾は、小屋を跡形もなく吹き飛ばした。
焼け跡に辿り着いた真吾の前には、なにも残っていなかった。
妻のシアと、その体の中にいるはずの真吾の子供は跡形もなく吹き飛んでいた。
真吾は声も出なかった。
真吾は跪き、焼けただれた砂地を握りしめた。

＊

「もうたくさんだわ、こんな世界は……」
吐き捨てるように言うレミーに、デノアは答えた。
「しかし、君達には生きて貰うよ。宇宙にはばたいた人間を生み出した地球人のサンプルとしてね」
ブンドルが冷ややかに言った。

「そうではないだろう。デノア、あなたは恐れているんだ。雨を降らせた者とデノアとクーアノアを作り出した者が、同じではないかとね。かつて地球を試した、宇宙の意志ビッグソウルが、この星も試したのではないか……そして今、デノアが試されているのではないか……ビッグソウルが我々をこの星へ送り込んで、人間を守るはずのデノアを試したのではないかとね」
「私達をビッグソウルが送り込んだ？……」
　ブンドルはレミーに答えた。
「デノアはそれを疑っていた。だからこそ、それを知るために、私達を檻の中で飼ってきた。しかも、わざわざ、自分のゲームの障害物の役目を振り分けてね……」
「見事だよ、局長……だが、私の結論もでたよ。君達は、単に紛れ込んできたにすぎない。なぜなら私のゲームに勝てなかった」
「それはどうかな？　私は他人の星の、他人の救世主をどうこうしようとは思わぬ。ただ、私の生き方を邪魔する者は許してはおかぬ」
　レミーがブンドルに言った。
「私達は、ここから抜け出すわ」
　デノアが呟いた。
「禁断地区の外に行っても君達は生きられぬよ」
「ここにいるよりましだわ」
「クーアノアから抜け出すことがもう一度、君に出来るかな」
　いきなりブンドルは銃を抜き、ディスプレイを撃った。

「やるだけのことはやってみるよりない。レミー、車を用意した。行くぞ」
　ふたりは牢から飛び出すと、思考情報局の駐車場に向かった。
　旧式の、しかし見るからに強力なガソリンエンジンをボンネットから剝き出しにしたスポーツカーが止まっていた。
「これは？……」
「もう、金色の特権カードは使えない。このガソリンカーで交通管制を突破するしかない」
「分かった。私が運転するわ」
　デノアの声が車のスピーカーから聞こえた。
「私は人を撃たないし、殺さないよ。でも、暴走する車は、交通管制のレーザー砲が破壊することになっている」
　ブンドルは、スピーカーを銃で撃って黙らせた。
「デノアの言う通りだ。だが、交通管制のカメラ集積装置を壊せば、ひとつのブロックのレーザーは三分間、使用不能になる」
「ワンブロックを三分で通り抜けるのね」
「そう、一秒でも遅れるとレーザーの餌食だ。いけるか？」
「やるわ。地球でもクーアノアでもA級ライセンスの腕前、お見せしましょう」
「事故に御用心……」
「大丈夫、今度は余計なことで疲れてないもの」
　ブンドルは先端にロケット弾の付いた銃を持ち、スポーツカーの窓から身をのり出した。

パトカーのサイレンが聞こえてくる。
「役者が揃ってきたようだな。よし、ゲームの始まりだ！」
「了解」
レミーはアクセルをふかした。
ブンドルが叫んだ。
「行け！」
スポーツカーは、Nブロックの街角に飛び出した。
ブンドルは、街頭の交通管制カメラ集積装置をロケット弾で狙い撃った。
集積装置は粉々に吹き飛んだ。
そのとたん、Nブロックの交通は全て停止した。動いているのは、レミーの運転するスポーツカーと、パトカーだけである。
信号が赤に変わり、電光交通指示器が〝Nブロック管制装置故障、復旧まで三分間お待ち下さい〟と表示した。
レミーの車は車輪を軋ませて、猛スピードで突っ走った。
ブンドルは次のロケット弾を銃に装置した。
交通指示器が〝復旧まで二分〟と表示する。
スポーツカーの前方に、交通管制の故障で停止した十数台のエアカーが見えてきた。
レミーはスピードを落とさず、巧みなハンドリングですり抜けて行く。
後を追うパトカーは、車を躱しきれず追突し、ひっくり返った。

「なかなかだな」
「こんなの序の口よ」
逃げるスポーツカーを追うパトカーの数はどんどん増えていった。
交通指示器が〝復旧まで一分〟と表示した。
スポーツカーの前方にいきなりパトカーが飛び出してきた。
「ブンちゃんの重心をこっちへ！」
レミーはハンドルを切り、片足走行で躱した。
「重いわ。いつまでもよりかかってないで、前を見て！　ブンちゃん」
レミーは体に寄りかかっているブンドルに言った。
「ブンちゃん……まっ、この際、いいか」
交通指示器が〝三十秒〟を表示した。
〝Sブロックまで五百メートル〟という表示の下をスポーツカーは通りすぎた。
ブンドルは窓から銃を持ち、身を乗り出す。
〝Sブロック〟の表示が見えてくる。
交通指示器が〝四秒、三秒、二秒、一秒……〟――信号が青に変わり、交通管制カメラのレーザーが光線を発射した。
しかし、スポーツカーは一瞬早くSブロックに走り込んだ。
レーザーは、車の後部バンパーに穴を開けただけだった。
次の瞬間、ブンドルの銃が火を噴き、Sブロックの集積装置を破壊した。

Ｎブロックに停止していた車の群れが動き出し、代わりにＳブロックの自動車道路の交通が死んだように動かなくなった。
ブンドルはロケット弾を装着しながら、
「お尻に火がつくところだった。しっかり頼むぞ、あと、越えねばならぬブロックは四つもあるのだからな」
「大丈夫。要領が分かったわ」
スポーツカーは猛然と走り続けた。
Ｔブロック、Ｙブロックと……ブンドルの正確な射撃が集積装置を壊し、レミーはワンブロック三分間の時間との戦いに勝ち続けた。
そして今、Ｕブロック――。
スポーツカーは見通しの良い直線道路を走っている。
ブンドルが前方を見てうなった。
「レミー、あれを……」
警察と思考情報局員が、ビルの谷間にパトカーを横に並べてバリケードを作っている。
蟻のはい出る隙間もない。
ブンドルは呟いた。
「これまでか……」
レミーはニッコリ笑って、
「そうはさせないわ。ベルトを締めて。合図をしたら、私に体当たりするのよ」

レミーはアクセルを踏み込んだ。
猛速で、車はバリケードへ突進する。
スピードメーターがピークを超した。
レミーは、安全バンパーのスイッチを押す。
車のバンパーが前へせり出してきた。
バリケードの局員達が、泡を食ってパトカーの陰に隠れた。
レミーは緩やかにハンドルを切っていく。
スポーツカーは、斜めにビルディングの壁面に向かって突っ込んだ。
壁に激突する瞬間、レミーは急ハンドルを切る。遠心力で、スポーツカーは回転しながら、ビルの壁を駆け上がり、宙に投げ出される。スポーツカーは上下逆さまで、パトカーのバリケードの頭上を越えた。
レミーが叫ぶ。
「今よ！」
ブンドルはレミーに体当たりした。
宙を飛ぶスポーツカーのバランスが崩れ、一回転し、着地する。
その衝撃で、ボンネットとフロントガラスが吹っ飛ぶが、車体は無事だった。
「あんなバリケードでは、私を止められないわ」
ブンドルはレミーの顔を見つめた。
「君のテクニックは呆れるほどに美しい。ただし、二度と乗りたくないがな」

「ありがとう、おほめ下さって……」
　スポーツカーは走り去った。
　呆然と見送る局員達の背後で、追ってきたパトカーがスポーツカーにつられて、次々とバリケードに突っ込んできた。
　あっという間に、バリケードにパトカーの山が築かれた。
　渋い表情の局員の頭上を、レミーの真似をしたパトカーが飛び越していき、逆さまで路上に激突した。
「だめだ、とりゃ」
　局員はうんざりして、かぶりを振った。

　ズガーン!!
　禁断地区に隣接するJブロックの集積装置をブンドルが撃ち壊した。
「さあ、最後だ」
　貯水池に架かっている橋に向かって、スポーツカーは走って行った。
　しかし、その橋は開閉式で、今、橋桁が持ち上がって通れない。
「このッ！」
　レミーは急ハンドルを切った。
　スポーツカーはスピンターンして、今来た方向へ戻った。
　ブンドルが呟いた。

「時間がない」
「私、時間は守る女なの。あれを黙らせて」
前方に、数台のパトカーが執拗(しつよう)に迫って来ている。
つごうよくスポーツカーは、先刻のバリケード突破でフロントガラスがなくなっていた。
ブンドルの正確なレーザー銃連射でタイヤを撃ち抜かれ、パトカーは道をあける。
スポーツカーは横道に突っ込んだ。
そこは階段で、車一台がやっと通れるぐらいの幅しかない。
激しくバウンドしながらスポーツカーが降りていく。
横道を出ると自動車道である。
スポーツカーは、狂ったように疾走(しっそう)する。
その道は、次第に上昇し、高架になっている。
ブンドルがレミーに注意した。
「この道は逆戻りだぞ」
「分かっているわ。あっちの道へ行くつもり」
車の走る道に並行する高架道が見えてきた。スポーツカーが走る高速架道とは百メートル以上離れている。
「レミー、まさか！　空を飛ぶ気か？」
「私、飛びたがりの女なの。たまには羽根なしもいいんじゃない」
「任すよ、レミー。飛びなさい」

「サンクス」
レミーはハンドルを緩やかに切っていく。
ブンドルは座席の手すりを思わず握りしめた。
高架道のガードは、自動操縦地区であるため、三十センチほどの高さしかない。
スポーツカーは、高速でその上に乗り上げ、宙を飛んだ。
長い滞空時間の後、車は並行する高架道へ着地した。
「へえ、飛べば飛べるんだ。こんなの初めて」
はしゃぐレミーにブンドルが言った。
「二度目は遠慮したい」
「あと何分？」
「三十秒もない」
「このッ！　もっと速く走れッ！」
レミーはアクセルを強く踏み込む。
時計の秒針が持ち時間を嚙んでいく。
車の車輪が悲鳴をあげる。
時計があと十五秒を示す。
前方に、禁断地区とクーアノアをへだてる立ち入り禁止地区の鉄条網が見えてくる。
時計が五秒を切った。
鉄条網がぐんぐん迫る。

三秒、二秒、一秒、〇――。
交通管制がよみがえった証拠の青信号が点く。
スポーツカーは一瞬遅かった。
レーザーが光線を放つ。スポーツカーの前部エンジンが火を吐いた。
かまわず、車は鉄条網を破って立ち入り禁止地区の中へ突っ込んだ。
立ち入り禁止地区の街路を、スポーツカーは燃え上がりながら走っていく。
座席の中にまで火が舌を出している。
レミーは急ハンドルを切ると、袋小路に突っ込む。壁が迫った。
激突！
いや、スポーツカーは壁をすり抜けていた。
霧の壁の中から、炎上するスポーツカーが飛び出してくる。
すかさず、レミーとブンドルが飛び降りた。
車は次の瞬間、爆発した。
レミーはパチンと指をならした。
「やったね」
「君が運転していた間、ずっと考えていたのだが、君の運転には、シンセサイザーのロックよりもバイオリンがよく似合う。例えばチゴイネルワイゼンのように……激しく切なく美しい」
「はあ……」
レミーはブンドルを見つめ返した。

……私、本当はとっても怖かったんだ。でも、この人は……やっぱり、並の人間じゃあないのね……

もっとも、ブンドルの掌も冷や汗でじっとり濡れていたのだが、それを表に出すような男ではなかった。

なにはともあれ、ふたりはデノアの交通管制のゲームに勝ち、クーアノアを脱出した。

レミーとブンドルは、禁断地区の村へ向かった。

そこで見たアンドロイドによる殺戮の跡は、クーアノアの地獄をしのぐものだった。

村の病人、怪我人は誰ひとり生き残ってはいなかった。

「この星には無惨なものしかない……」

ブンドルの呟きにも、レミーは答える気にもなれないほど呆然としていた。

第十章 私はケリをつける

最後の戦い

焼け落ちた集会場に、カットナルはぽつんとひとりで坐っていた。
「カットナル、しぶといな。よく生きていた」
ブンドルがカットナルに話しかけた。
カットナルは、自分の前に立つ、レミーとブンドルを見上げると、虚ろな声で言った。
「ブンドル、お前もな。ここにはわし以外、もう誰もいない。アンドロイド達は、ここで生き残った者達に、いちいち止めをさして消えていった」
そのとき、霧の壁の方向から、三人を呼ぶ声がした。
「うお〜い！　みんな生きとったんか！」
袋を肩にかけたケルナグールが走って来た。
「ええぞい。ええぞい。わしひとりだったら、淋しゅうてかなわんところだった」
ひとり陽気なケルナグールは、袋の中を見せた。宝石がザクザク入っていた。ちゃっかり財産だけは持ち出していたのだ。
「これ、お前らに貸してやる。これを元手に芸術保護エリアで、また商売でも始めて、やり直しだ！　利息は年五パーセントでええぞい」
三人はうんざりして顔を見合った。
「ケルナグール、悪いが、今さらクーアノアで生きるつもりはない」
ブンドルの言葉にカットナルが続けた。
「わしとて同じ。失うものは全て失った」
「ケルナグールさん、私達には宇宙船があるわ」

「宇宙船……」
「ええ、もうすぐキリーのお迎えが来るわ」
だが、そう言ってみて、割りきれない気持ちにも襲われるのだった。
……これでは、デノアに尻尾をまいて逃げ出すだけではないか……この一年、デノアの思いのままに翻弄されただけではないか……
レミーの気持ちを後押しするように、背後で声がした。
「俺はケリをつける」
そこに、ハンディバズーカを持った真吾が立っていた。
真吾の家族に何が起こったか、レミーは悟った。そして、きっぱりと言った。
「そう……私もケリをつけるわ」
ブンドルも頷いた。
……一年間の服従の屈辱は返さねばならぬ……
カットナルの片目が精悍に光った。
……そう、わしが守ろうとしたこの村の人々のケリもな……
ケルナグールはわけが分からず、四人の顔を窺っていた。

＊

「馬鹿なこだわりは捨てろ。明日、飛びたたなきゃ、新しい星に辿りつけないんだぜ」
宇宙船の整備を終え、超音速垂直離着陸ジェット機で迎えに来たキリーが四人に言った。

「キリー、これはこだわりじゃない。俺は失うものが多すぎた」
と真吾。
「浪花節だよ、浪花節。俺ぁそういうの、大嫌いだ」
キリーが吐き捨てるように言った。
「キリー、人の失ったものの大きさは、他人には決められないわ」
とレミー。
「そういうことだな」
ブンドルが呟いた。
カットナルは、黙って銃の手入れをしている。
キリーは肩をすくめた。
「どうせ、俺はたいしたものは失っちゃいない。もともと何にもねえからな。だがな、生きるのを、やめてまで、失ったものを悔やむことはねえ」
「死ぬとは言っていないわ。私達は勝つもの、デノアに……」
自信はまるでないが、レミーはニッコリ笑ってキリーに言った。
「手に負えんな……。勝手にするさ。俺は定刻になれば宇宙船を発進する。それでおさらばさ……」
ケルナグール、行くぜ」
「あ、ああ」
後ろ髪をひかれるような思いのケルナグールに、キリーが怒鳴った。
「てめえ、生きたくねえのか！」

キリーに怒鳴られて、ケルナグールの額に青筋が立った。

「うるさい。わしゃ人に命令されるのはまっぴらだ。わしゃ、元チャンピオンじゃ。強いんじゃ。そんなわしをブンドルもどきのやわな画商に仕立てやがったデノアの野郎を、わしゃ許せんわい。なんで、わしが、〝美しい〟なんて台詞をくっちゃべらなきゃならんのじゃ」

「そういうのを単純っていうんだ」

「じゃかあしい。わしゃな、まだ記憶が戻ったのを知られとらん。おまけにお宝だって持っている。芸術保護エリアで生きていけるわい」

「ふん、そうかい。仕方ねえ……フフ……また会おうぜって別れはもう言えねえみたいだな。あばよ、ダチ公」

キリーはジェット機に乗り込んだ。そして後も見ずに発進した。

「ひとりか……どうせ俺は一匹狼さ……フフフ……」

ジェット機はぐんぐん加速して、宇宙基地を目指した。

＊

翌日――。

雨を知る特殊患者達の攻撃が引き金となったクーアノア各地の混乱と暴動も、四日後ともなれば完全に平定された。

各ブロックの思考情報局の分室には、クーアノア住民の列がずらりと並んでいた。

それは自分を守るため、狂気に走り、殺戮と暴行を繰り返した住民達の記憶を忘れさせるための

洗脳を待つ列だった。デノアによって新しい記憶を持ち、新しい職につき、新しい生活をするのだ。

……これでまた静かになる……

デノアは計算した。

この戦いで六百万人の人間を整理出来た。また人間達が増加すれば、同じことをやればいい。そして、いつか、この檻の中で得た人間のデータで、人間の持つ残虐性だけを抜いた、人間そっくりのアンドロイド達の世界を、この星に作りあげるのだ。彼らアンドロイド達は、この星で、人間の繰り返した過ちを決して犯さないだろう。人間そっくりな、しかし平和な世界を作るだろう。

それこそ、デノアの理想郷だった。

暴動で破壊されたいくつかのデノア支局も次々に修復されている。

修復された支局とデノア本体との接続の瞬間に起こる一瞬の空白、機能マヒが心地良く計算されていく。

デノアは、この一日にすでに二十回以上、再び接続された支局との間に、人間が愛するときに感じる快感にも似た機能マヒを計算していた。

禁断地区に逃げて行ったふたりは確かに誤算だった。

しかし、アンドロイド達の報告によれば、外の世界の人間達は全て整理したことになっている。

誰ひとり生きていなくて、しかも食物のない不毛の世界では、ふたりは長くは生きられまい。

残る地球人は、芸術保護エリアに住む、洗脳から醒めたかどうかも分からぬケルナグールとキリーだが、そのふたりも、そのうち思考情報局員が捕えてくるだろう。

ただひとつ気になるのは、半年前、アンドロイドの基地から行方不明になった超音速垂直離着陸

ジェット機のことだが、デノアの機能が整備されていない辺境の地のことだ、事故で墜落ということも計算できる。なにしろ、その後、そのジェット機が飛んでいるという報告はないのだ。
ゲームは終わったのだ。
デノアは満足だった。
だが、そのとき、デノアの監視カメラは、芸術保護エリアから市街地を抜け中央広場に通ずる大通りを走る車をキャッチした。
ケルナグールの美術品輸送車だった。
輸送車の行き先は、交通管制のコンピューターによればデノアの塔になっている。
デノアの塔のある中央広場は、洗脳を済ませ、救世主デノアの言葉を聞こうとして集まってきたクーアノアの人々で鈴なりだった。
まして、地下の面会フロアには、各ブロックの指導者的地位に就くよう洗脳された人々が集まっていた。
デノアの中に不安な計算がよぎった。
デノアは、輸送車のスピーカーに割り込んで聞いた。
「デノアの塔に何の用事かね？」
「贈り物がありましてね」
ケルナグールが言った。
「贈り物？」
「私達だよ、デノア」

「ハーイ、デノアさん」
ブンドルとレミーが答えた。
「逃げるのを諦めたんだね」
「いいや、私達は、クーアノアから脱出したことで、あなたとのゲームにひとつだけ勝った。違うかな？」
「確かにそうかもしれないね」
「デノア、なぜ我々が勝てたか分かるかな……」
「さあ、地球の人間は時として不思議な力を出すときがあるのかもしれないよ」
「私達がビッグソウルから、この星へ送り込まれたからだとは思わないかな？」
「信じられないよ。君らの頭脳を探査しても洗脳しても、それらしき意識はなかったよ」
「デノア、君に感づかれるような意識をビッグソウルが我々に与えると思うかな？　この星を試し、君とクーアノアを作ったかもしれない偉大なビッグソウルがね……」
「とにかく、私達は、あなたとのゲームにひとつだけ勝ったわ。そして、一度逃げた私達が、どうして、こうやって戻ってくると思うの？」
「君達は、私に何をしたいのだね」
「ビッグソウルの意志をじきじきに伝えたい」
デノアはしばらく黙っていた。
「デノア、あなた、まさか私達が怖いんじゃないでしょうね」
レミーの挑発にデノアはすぐに答えた。

「よかろう」
デノアの答えにブンドルとレミーは頷いた。
……デノアはひっかかった。嘘とハッタリはメカより人間の方が上だ……
ケルナグールの輸送車は、デノアの塔の前にふたりを降ろすと、もと来た大通りを引き返した。
輸送車の中のケルナグールにデノアが言った。
「君も記憶をとり戻したようだね」
「へえ、おかげさんで」
「早く思考情報局の分室へ行って、洗脳して貰うことだね」
「へえ、へえ。ただし、どんなに洗脳してもビッグソウルの意志は消せんわい」
これもハッタリだった。そして輸送車の中には、もうひとり、カットナルが隠れていた。

デノアの塔の地下にあるデノアのメカニックが見えるベルト・ロードに来た、ショルダーバッグを肩にかけたレミーとブンドルは、注意深くデノアの本体を探した。
それらしいものはない。やはりこの巨大なメカニックは、クーアノアの人間達を畏怖させるための道具にすぎない。
やはり、本体があるとすれば、面会フロアのデノアの感情表現を表すともいえるディスプレイの裏……救世主や支配者を気取る者は、たとえ、それがコンピューターであろうと、直接、面会者に会いたがるものだ。でなければ、ことあるごとに局長のブンドルをデノアの塔の面会ルームに呼び出したりはしない。レミーとブンドルの考えは同じだった。

ふたりは面会フロアに来た。そこは、各ブロックの指導者達が集まり、デノアの言葉を待っていた。
ブンドルは腕時計を見た。決行まであと三分。ブンドルは懐の中のレーザー銃に手をやった。

同時刻——。
ケルナグールの輸送車は、修復間際のデノア支局の前を通りかかった。
ケルナグールは輸送車を停めると、バズーカレーザーを待って飛び降り、支局の扉をぶち破り、中に飛び込んだ。
この支局の防御用レーザー砲は、まだ直っていないらしく、発砲してこない。よしんば直っていても、デノアはただの一度も、クーアノアの中で車というメカニックには発砲したことはあっても、人間自体に対して発砲したことはなかった。
ケルナグールの後ろにカットナルが続いた。
ケルナグールが支局の作業ロボットを撃ち倒しているうちに、カットナルは支局調整室に飛び込んだ。
驚いて振り返る支局調整員を殴り倒し、レミーに教えられた通りにキーボードを操作した。
そのコンピューターはデノアと接続寸前だった。
ブンドルはいきなりデノアのディスプレイにレーザー銃を乱射した。
だが、防御用のバリアーがレーザーをはね返した。

面会フロアの指導者達は、パニックに陥り、出口に殺到した。
「随分、幼稚で乱暴な攻撃だね。これがビッグソウルの意志かね？」
デノアが皮肉っぽく言った。
ブンドルは何も答えず、ディスプレイを撃ちまくった。
「無駄なことは止めたまえよ。何をやってもバリアーがはね返すよ」
もとよりブンドルにも分かっていた。目的は面会フロアのパニックだった。
洗脳され、元の狂暴さを失ったクーアノアの群衆は、攻撃を恐れ、怯える。
群衆は出口を求め、オートロードに、エレベーターに、そして避難階段にあふれるだろう。
人命尊重のデノアのプログラミングは、それを止めることが出来ないはずだ。それは、とりもなおさず、レミーとブンドルの退路を守ることにもなる。
問題はこれからだ。
ブンドルが乱射する間、レミーはショルダーバッグからハンディバズーカの部品を取り出し、素早く組み立てた。
「レミーさん。そんなものはまるで通用しないよ」
「どうかしら？」
「無駄だよ」
突然、そのとき、デノアの回路に新しい計算がインプットされた。
「支局接続、十秒前……」

カットナルは乱入した支局調整室の金色の接続ボタンに指をかけた。

「愛し合ってお眠んなさい」

レミーはバズーカの引き金に指をやった。

あとはレミーのファイターとしての勘に頼るしかない。支局とデノアが接続した瞬間の機能マヒにかけるのだ。その一瞬ならバリアーも解ける。

「待て！　やめてくれ！」

デノアの声が響いた。

〝5・4・3・2・1・0、接続！〟

〝今だ！〟

レミーの一撃は、まばたきする間もないバリアーの消滅を逃さず、ディスプレイを直撃した。

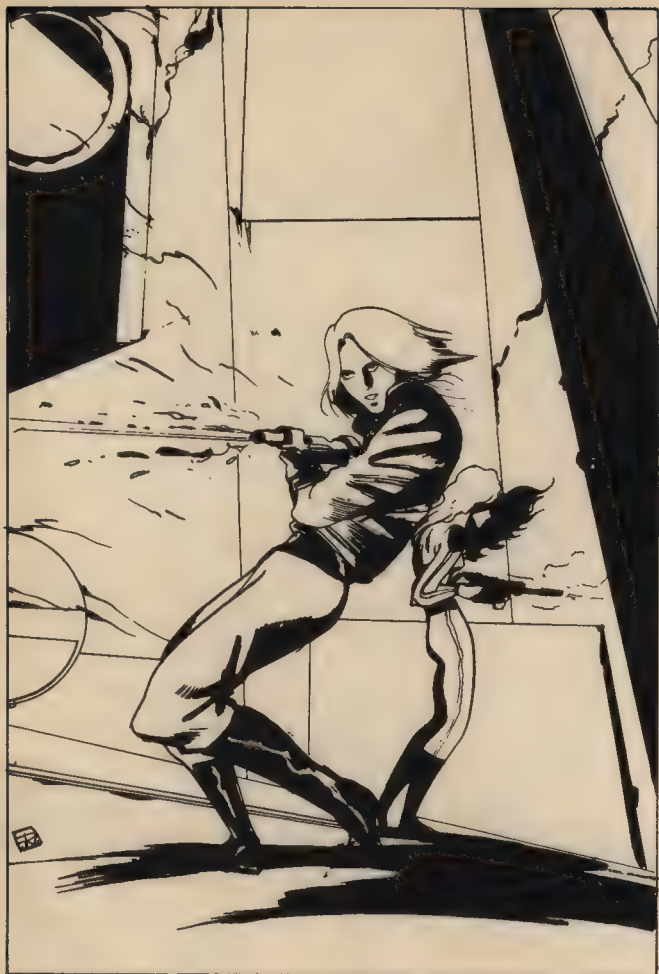
ディスプレイは爆発し、崩れ去っていった。おそらく、ディスプレイの裏にあるデノアの本体も同じ運命だろう。

「やった！」

レミーとブンドルは頷き合うと、面会フロアから飛び出した。

爆発、連鎖反応で、面会フロアも吹き飛ばされていく。

デノアは呟いた。

「なるほど……見事だ……だが、地球人とのゲームは、これで終わりだ。彼らは本当に私を怒らせた」

〝ケリをつける〟ために、レミーとブンドルは必死に戦う。

逃げる群衆をかき分けて、デノアの塔の前に出てきたレミーとブンドルに、突然、レーザーが浴びせかけられた。

「!!」

ふたりはかろうじて身を躱した。

周りの群衆がレーザーでバタバタと倒れていく。

レミーとブンドルは、デノアの塔の扉の陰に釘付けになった。

十数台のレーザーを備え付けた監視カメラが、デノアの塔の前に姿を現した。しかもそれは、脚部が可動式になっていて、緩やかにこちらへ向かって近づいてくる。

「デノアは生きている。本体はディスプレイの後ろにはなかったんだわ」

「では、どこに?……」

どこにあろうと、もう遅すぎた。監視カメラはふたりをとりまき、確実に近づいてくる。

デノアの声が響いた。

「やはり、君達をこの星に送りこんだのがビッグソウルだという話はでたらめだったんだね。だが、君達は、よく私をここまで追いつめたよ。せっかく、私自身の手だけは人間を殺すまいと計算していたのにね。でもね、君達は私にとって、クーアノアの人間よりも危険だ。私は、私の手で君達を殺すよ」

監視カメラのレーザーは、狙いをレミーとブンドルに定めた。

「これまでかな」

「かもね。でも私、往生際が悪いの」

ふたりは身を伏せると、レーザー銃とハンディバズーカを撃ちまくった。
監視カメラのレーザーの一斉射撃がデノアの塔の扉に集中した。
次の瞬間、監視カメラが次々とはじけとんだ。頭上を轟音が走り抜ける。
「!?……」
上空を見上げたレミーが叫んだ。
「キリー！　キリーだわ」
キリーの垂直離着陸ジェット機が急降下して来た。
ジェット機のレーザー砲は正確に監視カメラを撃ち抜き、再度急上昇したときには、監視カメラは一台も残っていなかった。
すばやく垂直急降下したジェット機は、ふたりを拾いあげるように乗せると、ただちに浮上した。
「まったく世話の焼ける連中だね、君らは……」
キリーは、ふたりに、いつもの口調で話しかけた。
「キリー、でも、どうして？」
「宇宙船の発進予定時刻はすぎちまったがね。人生のひとり旅にゃ、俺もちいと飽きた」
「キリー、サンクス」
「俺のやりたいようにやっただけさ」
「それにしても、よくクーアノアの上空に侵入できたものだ」
ブンドルがキリーに言った。
「フフ、苦労したぜ、と言いたいところだが……しごく簡単。クーアノアの空の守りはがらあきさ。

デノアの野郎、いつも人間を地べたに這いずりまわしていたからな。人間の敵が空から来るはずがないとでも考えたんだろう」
「ならば、なぜ、アンドロイド達が戦闘機を持ち、しかもハイジャックを防ぐような演習をしていたのだろう」
「万が一のことがあるからじゃない。空から攻撃されるのが、デノアは怖かったのよ」
レミーが何気なく言った言葉にブンドルは頷いて、それから呟いた。
「分かったぞ。デノアの本体のありかが……」
「えっ？」
「人を上から見降ろし、誰からも見降ろされたくない。そしてより高く神に近づこうとする。どこの支配者も一様に持つ特徴だ」
「そか……クーアノアで一番高い所……デノアの塔のてっぺん」
「そう、太陽をかたどった、あの、きらめくクリスタルの中だ」
レミーはデノアの塔の先端のクリスタルをじっと見つめてから、キリーに頼んだ。
「パラシュートを貸して」
「どうする気だ？」
「生きて帰りたいから……」
「話が見えない、詳しく話せ」
……話せば、キリーもブンドルもこれからやろうとすることを止めようとするに違いない……
レミーは、黙ってコクピットの通信スイッチを入れ、デノアと交信を始めた。

「デノア、私はケリをつけるわ」
デノアが答えた。
「どうやら、私の居場所が分かったようだね。しかし無駄だよ。デノアの塔はバリアーされているし、仮に先刻のようにバリアーが消えたとしても、私を囲むクリスタルは光線を屈折させ発散させるんだよ。レーザーもメーザーも効果はないよ」
レミーは時計を見ながら、胸のペンダントを取りだし、デノアとペンダントの両方に聞こえるように言った。
「ゲームの切り札は最後まで捨てないわ」
この台詞は、ペンダントに仕組まれたマイクの声を、おそらく待っているだろう、北条真吾への暗号でもあった。レミーの時計と真吾の持つ時計はぴったり合っている。
真吾が、かねての予定通り、ある目的地に潜入していれば、一分後に計画通りの行動をとるはずだ。
だが、果たして真吾は目的地に潜入できているだろうか？　確かめる術はない。だが今は、真吾を信じるよりない。真吾ならやれる！……。
レミーはパラシュートを装着しながら、キリーに言った。
「キリー、何も言わずに高度五千に……」
レミーの緊張した表情は、何を聞いても答えてくれそうになかった。
「おお、こわ……」
キリーは肩をすくめて、ジェット機を上昇させた。

「コクピットのフードを開けて！　早く！」
コクピットのフードが開いていった。
突然、上空の雲間から、アンドロイド達の戦闘機隊が襲いかかってきた。
アンドロイド達は、いうまでもなく、デノアの計算通りに動かされているのだ。
キリーのジェット機は、攻撃を躱しながら高度五千に上昇した。
「レミー、高度五千だ」
「レミー、何をする！」
ブンドルの叫びにキリーが振り返ったときには、もうレミーは宙に身を躍らせていた。
「飛んでる女ってわけか……」
「いや、落ちていく女だ」
呆気にとられているふたりの男の会話は、なんとも間が抜けていた。
戦闘機の攻撃が激しくなった。
「おっと、下手すりゃこっちも落ちちゃう。ブンちゃん、後ろの敵は頼んだぜ」
「まかせろ！」
ブンドルは、開け放されたフードからレーザー銃を撃ちながら呟いた。
「また、ブンちゃんか……しかし、それにしても、レミー、君という人は……」
レミーは、手足を広げたり閉じたりして落下方向を調整しながら、デノアの塔に向かってまっしぐらに落ちていった。

レミーは太股にくくりつけた44口径のマグナムを手に持った。
時計をチラリと見る。
……あと三秒……真吾、うまくやって！……
レミーは銃をかまえた。

その二秒前、デノアの回路に、また新しい計算が入った。
〝デノア新支局1946、接続五秒前〟
……何？　接続は二時間後の予定だ。確かに1946は完成し、いつでも接続できる状態になっているが、新支局接続の儀式、接続ボタンを押す支局調整員はまだ支局に姿を現していない……では、いったい誰が……私の監視カメラは新支局に入った人間を感知していない。それどころか、新支局のあるSブロックの監視カメラのどれひとつとして、不審な人間も車も写しだしていない……
一体誰が……
そのとき、デノアの中に、病院から逃げたレミーが監視カメラの死角をぬって、かなりの距離を徒歩で突破したデータが浮び上がった。
……それができるレミー以外の人間は……
デノアの中で、データ不足だった男の記録が浮かび上がった。
……北条真吾……洗脳したはずが、クーアノアに運ばれたその日に逃亡した男……あの男か……
しかし、あの男は、クーアノアの外でアンドロイドの攻撃を受け死んだと計算されている。仮に生きているとしたなら……そうか、あの男が切り札か……

……だが、接続の機能マヒが起こってバリアーが解除されても、私のクリスタルはレーザーもメーザーも受けつけない……
新支局接続のときがきた。
デノアは安心の計算をした。
「私は大丈夫……支局との接続を楽しもう」
空中を落下するレミーと、デノアのクリスタルの距離は、二十メートルと離れていないところまで接近した。その一瞬、クリスタルの光があせたような気がした。レミーのファイターとしての勘が叫んだ。
……今だ！……デノア、もう一度愛して、もう二度と起きないで！……
レミーは銃を撃った。
レミーの体は銃の反動で、宙でもんどりうった。
結果がどう出たのか、レミーには分からなかった。もう、デノアのクリスタルは、落下するレミーのはるか上だ。
レミーはパラシュートのコードを引いた。
パラシュートが開く。高度が低い……！
レミーは、無事に地上へ降りることに必死になった。
レミーが撃ったのは、レーザーでもメーザーでもない、旧式な鉛のマグナム弾だった。

鉛の弾はクリスタルを砕き、デノアの本体を貫いた。
デノアは二度と起きなかった。
デノアが動かしていたクーアノアの機構は全て停止し、キリーのジェット機を襲ったアンドロイドの戦闘機も、指揮者のデノアを失い、次々に墜落していった。

「きゃん!」
着地に少し失敗して、尻もちをついたレミーは、尻の痛みに涙が出そうだった。それでも結果が知りたくて見上げたデノアの塔の先端は、火を吹き、爆発を繰り返していた。
「やったね、真吾……」
レミーの目に、尻の痛みではない涙がこみあげてきた。

真吾は、新支局のディスプレイから明かりが消えていくのを見て、デノアの死を知った。
「終わった」
真吾はフーッと息をもらした。
真吾にとって、静かで孤独な戦いだった。
銃弾のひとつも撃たなかった。
デノアは支局と接続するとき、一秒の何分の一か機能マヒを起こす。それは、レミーしか知らないことだった。いや、他の誰が知っても、そのわずかな瞬間を狙って銃弾を撃ち込むことなど不可能だった。可能だとしたら、デノアをよく知るレミーのファイターの勘に頼るしかない。

真吾は、黙って、デノアと支局を接続させる側にまわった。
支局を攻撃するには二つの方法をとった。
問答無用の直接攻撃を電撃的に仕掛けるカットナルとケルナグールの方法。そしてデノアに知られずに支局に潜入する真吾の方法。あくまで真吾の方法は、カットナルとケルナグールの一回目が失敗したときの予備だった。だが、一回目が失敗したときは、最後の切り札になる。
いつもの熱血タイプの真吾なら、直接攻撃を選んだだろう。だが今日の真吾は違っていた。どうしてもデノアを倒したかった。そのためには切り札がしっかりしていなければならない。
真吾は、他の仲間が攻撃にでかける十時間も前にひとりで出発し、禁断地区から新支局までの道を、監視カメラに見つからぬよう苦闘しながら、徒歩でやってきて、新支局に潜入したのだった。
真吾は呟いた。
「シア……デノアを倒した今、君のいなくなったこの星に、もう用はなくなった。俺は、所詮(しょせん)、浮き草なのかもしれないな……」

デノアが消え、後に残ったのは、デノアから洗脳され、与えられたクーアノアの生活を決められた通りに暮らし続ける人間達の群れだった。
やがて月日が経ち、洗脳が自然に解けていったとき、彼らを待つのが、再び殺戮と暴行の狂気の日々なのか、それとも他の生き方なのか、それは誰にも分からなかった。

*

宇宙船の窓の外を、赤茶けた星が次第に遠ざかっていく。

地球の六人は、あの星の過ぎ去った一年を様々な思いで見つめていた。

真吾は、なぜかあの星の畑で芽ばえた地球の種を思っていた。

……だが、あの畑は戦闘機の攻撃で焼け野原になってしまった。あの地球の芽のように、我々も結局、地球でしか生きられないのかもしれない……

レミーは、洗脳された屈辱の一年より、イルのことを思っていた。

……洗脳されてさえ人間らしい心を持った人間がいた。他にもいるのかもしれない。デノアがいなくなった今、あの星だって……きっとね……いつかね……

ブンドルにとって、あの星は〝美しくない〟の一語だった。唯一、美しいと思ったのは、レミーが見せたしたたかな行動力だったが、それは最初からブンドル自身が認めていた美しさで、新たに極めた美ではない。

……こんどこそ美しい星に出会いたいものだ……

……わしは、このお宝が通用する星に出会いたいわい。せっかく、あの星で、かせいだんだからな……

ケルナグールは、しっかり宝石の袋をかかえていた。

……せっかく、あの星では真面目にやったのに……やはり善意は力には勝てぬのか……

しかし、そう思いながらも、カットナルは指導者志向を捨てたわけではなかった。

……政治家が駄目なら、善意の新興宗教……その教祖にでもなるか……ウム……

カットナルはニヤリと笑った。

……俺は、やっぱり何もなかった。どうせ、それが俺のさだめさ……

キリーは、相変わらずの台詞通りのことを思った。

……おっとっとと、そんなことは言っとられんのだ……

キリーは五人に言った。

「万感胸迫る皆さんのお気持ちは分かりますがね。この船、ただでさえ一日遅れなわけ。一日遅れが、どんだけこの先影響するか分からんけど、急いだ方がいいんじゃない？　早いとこ、冷凍冬眠でおねんねして、あとは行き先、船まかせ……人間の住めそうな星みつけたら、自動的に眼覚ましで冬眠から起こしてくれるらしいからね……」

光速に近い速さで、確かに一日の遅れは大きい。この宇宙船の予定された目的の星に着くのは絶望的といっていいし、どこに辿りつくのか、何年かかるのかも分からなかった。だが、目的の星にできるだけ近づくには、早く乗組員が冬眠し、光速ドライブした方がいい。

一同は頷いた。

「眠る前に……ミスター・ブンドル」

レミーがブンドルに言った。
「なにかね」
ブンちゃんと呼ばれなかったことに、いささかホッとしてブンドルは答えた。
「あなたは、いつから、洗脳から醒めてたの？」
「最初からだよ、レミー」
一同は驚いてブンドルを見た。
「私は味覚にうるさい。特に酒にはな。良い酒でないと体が拒否反応を起こすのだ。あの星の酒はまずかった。それを少し飲みすぎた。悪酔いした私の頭脳はガンガン痛み、とてもまともな洗脳など受けつけられなかった」
「はあ……そういうこと……」
「クーアノアでは、何度も業者に新しい酒を作らせた。だが、レミーのルイ13世の味は作れなかった。もう一度、あのブランデーのレミーの味を賞味したいのだが」
「私本人じゃ駄目かしら」
レミーは、あの星の一年をふっ切りたくて、かなり無理して悪ぶって言った。
「ダイタ〜ン」
真吾とキリーは顔を見合わせて呟いた。
ブンドルはレミーに言った。
「ぜひとも賞味したい。だが、君は他のみんなの大切な酒でもある。好事家は、大事な酒は封を切らずにショーケースに入れておくものだ。そして誰かが封を切って飲んだら大騒ぎになる」

「じゃ、誰も封を切らないの？」

「封を切るのは酒自身だ。酒自身が、心底、飲まれたがっている相手になれるのを本当の酒好きは待っている」

レミーはちょっとさびしかったが、うれしくもあった。

「それに私は冬眠前の体だ。美味な酒で体力をなくしたくない」

微笑するブンドルにレミーは呟いた。

「サンクス、ミスター・ブンドル」

＊

赤茶けた土地……あの星の焼け野原になった真吾の畑に、雨が降っていた。

小屋の破片の陰で、なぎ倒されていたしなびた芽にも、雨は降りかかっていた。

やがて芽は青さを取り戻していった。

芽は生きていた。ささやかだが、しっかりとその根は大地をふまえていた。

何十年後、いや何百年、何千年後、この星を緑に変えるかもしれない地球の芽は、今、生き抜くことに懸命になっていた。

＊

冬眠した地球の六人を乗せ、宇宙船は漆黒(しっこく)の宇宙を光速に近い速度で飛んでいる。

寝息は聞こえないが、冷凍カプセルの中で眠る六人は確かに生きていた。そして、生きようとし

ている六人だった。

宇宙船の前方に広がる宇宙は、果てしなく広かった。

またまた戦国魔神ゴーショーグン狂気の檻（完）

あとがき

首藤剛志

——みんな勝手に生きるがいい。どっこい自分も生きてやる！——

これが「その後の戦国魔神ゴーショーグン」のラストでした。でも彼らは、どこで、どのようにして生きたのでしょうか。

長い間彼らとともに考え続け、いろいろできた答えのひとつがこれです。

どんな世界に生きていようとも、自分さえ失わなければちゃんと生きていけるんだ。

自分は自分なんだ。他の誰でもない。

彼らは、ボロボロになりながら、僕にそう教えてくれたような気がします。それをうまく表現できない僕の筆がとても歯がゆいのですが……。

彼らは、今もどこかで生きています。それをお知らせできる日が来る機会を楽しみに……。また

see you again。

アニメージュ文庫

またまた戦国魔神ゴーショーグン

狂気の檻

Printed in Japan

N-005

1983年12月31日 初版

著者 首藤剛志

発行者 尾形英夫

東京都港区新橋四－一〇－一〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話〇三(四三三)六二三一(大代)

振替 東京四－四四三九二番

印刷 大日本印刷株式会社

製本

〈編集担当 鈴木敏夫・片桐卓也〉

ISBN4-19-669517-5C0193(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

●JuJuには5つの部門があります。
既刊AM文庫もよろしく。

NOVEL

アニメ作品の小説化が原則だけど、しばらくたったらオリジナルにも挑戦します。

宇宙戦艦ヤマト・完結編(前編)
宇宙戦艦ヤマト・完結編(後編)
戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン

CHARACTER

人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

十七歳の伝説(ゴッドマーズより)
いつかきっと(ミンキーモモより)
夢みるプレリュード(マクロスより)
マクロス LOVE STORY(徳木吉春)
あれから4年…(カリオストロの城より)
また会えたね！(コナンより)

FILM

傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオールカラー版です。

セロ弾きのゴーシュ
「ホルス」の映像表現(高畑勲)

PEOPLE

アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

作画汗まみれ(大塚康生)
だから僕は…(富野由悠季)

THE BEST

「アニメージュ」で、好評のうちに連載終了したもの。およびオリジナル作品。

シュナの旅(宮崎駿)

定価はすべて380円です。

カバーイラスト=天野喜孝
カバーデザイン=真野薫
カバー印刷=真生印刷(株)

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669517-5 C0193 ¥380E 定価380円